

【完結】異世界TS少女は Vtuberになってスロー ライフを配信したい

水品 奏多

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

此処とは違う異世界に転生した主人公がV t u b e r もどきとしてのんびり配信する話。

※更新再開。毎日12:00更新予定。

※この物語はフィクションです。現実の人物・団体とは一切関係ありません。

※カクヨム、小説家になろうでも投稿しています。

目次

第一話	【初配信】はじめまして！ 異世界で防人やってます！	【新人VTube r】	1
第二話	家族のこと		11
第三話	【料理配信】世にも奇妙な異世界料理店、開店です！		18
第四話	【雑談】NGなしの質問コーナーです！		26
第五話	腹ペコ姉とメスガキ妹		33
第六話	【ゲーム配信】懐かしのアレをやります！①		39
第七話	【ゲーム配信】懐かしのアレをやります！②		47
第八話	この世界は好き？		58
第九話	雑談配信と来訪者		65
第十話	リリストアルトの住人たち		71
第十一話	常者に関するえとせとら		79
第十二話	重大な任務		87
第十三話	男友達と姑息な手		93
第十四話	カタリナの戦略		100
第十五話	この世界の家族		111
第十六話	【VLOG】異世界リリストアルトの歩き方		119

第十七話	遥かなる海を越えて	127
第十八話	新しい家族	133
第十九話	姉として	141
第二十話	【急展開】新しい家族ができました！	148
第二十一話	初デート	158
第二十二話	信じていいんだよね？	166
第二十三話	予兆	176
第二十四話	【料理配信】世にも奇妙な料理配信、開店です R	185
第二十五話	【雑談】守人姉妹と初めての共同作業！	195

第二十六話	【生配信】つよつよ幼馴染と異世界探索！	205
第二十七話	【潜入】異世界の学校！	212
第二十八話	祭りの前日	223
第二十九話	【生配信】ナキア村 春のお花見祭りっ！	231
第三十話	異世界リリストアルト	242
第三十一話	夢の終わり	251
第三十二話	幼馴染	257
第三十三話	家族との夜	263
第三十四話	サプライズ	272

第三十五話 帰還の儀 ————— 283

最終話 素敵な幻想がありますように

290

エピソード 或る少女の物語 ————— 303

第一話 【初配信】はじめまして！ 異世界で防人やつて ます！ 【新人VTuber】

ざあ、ざあと静かに波打つ夜の海岸。

そこに打ち上げられた黒い箱を見た瞬間、私は何故だか理解した。

この機械の用途。そして私が俺だったことを。

堰を切ったように流れ込んでくる昔の記憶。私ではない過去。

ああ、そうだ。俺は立派な日本男児として生まれたんだ。確か配信者として活動して
いてー

……何だっけ、うまく思い出せない。

「どうしたんだ、カタリナ？ 調子でも悪い？」

「……ううん、何でもないよ、お父さん」

心配そうにのぞき込んできたのは、そう、この世界のお父さんだ。

地球と隣り合う異世界、リストアルト。私はその防人さきもり、カタリナ・フロムとして
生を受けた。父の名前はマルク、母の名前はエレヌ。

うん大丈夫。記憶はなくなっていないし、自分が変わってしまった感覚もない。思い

出したただけだ。

多分私は異世界転生者ってやつなんだろう。

神様の存在との遭遇もチートスキルとかなかったと思うけど、まあいいや。

剣も魔法もあるファンタジー世界、目の前に転がる配信機材。そして――超絶可愛い私。

胸の奥の誰かが叫んでいた。

これは伸びる。それはもう大注目間違いなしだ、と。

拝啓 前世の俺。

あなたがどんな人生を送ったかはよく分かりません。

それでも女として二度目の人生を許されたからには――

「ねえお父さん。

私、配信者になりたいっ

「へ？」

激情の赴くまま、小学生みたいなことを言うのだった。

202×年、3月初旬。

空が茜色に染まる頃、某大手動画投稿サイトに一つの生放送告知がされた。

チャンネルの名前は「異世界系VTubeer カタリナ・フロム」

生放送のタイトルは「【初配信】はじめまして！ 異世界で防人やっています！【新人VTubeer】」

SNSアカウントも存在せず、どこの企業にも属していない彼女の配信は人知れず電子の海に消えるはずだった。

しかし、「異世界と現実を繋いだ生放送」という唯一無二の特性から次第にネットの注目を集めていくことになる。

手始めはライブ配信の待機画面だった。

どこかの森を背景に金髪の少女が控えめな笑みを浮かべるイラスト。まるで異世界の風景を切り取ったかのようなそれに、住民たちが集まってくる。

【わこつー】

【ばんわー】

【イラストに惹かれて見に来たけど、誰これ？】

【さあ？】

【めっちゃ綺麗な3Dイラストだよな】

【どっかの箱所属とか？】

【調べたけど、どこの事務所も告知してなかった。SNSアカウントもないし】

【ま？ 個人でこのクオリティ？】

【お、はじめた】

切り替わる出力、一面に広がるは茜色の空。

手ブレで揺れる中、高く透き通った声が響く。

「現実と空想の狭間にある世界、リリストアルト。

そんな不思議な世界に絶世の美女たる私、カタリナ・フロムが生まれました」

【エッツ】

【多分マイクに口が近すぎて、音割れてるw】

【これは良いばちばちですねえ】

【……こほん。現実と空想の狭間にある世界、リリストアルト。

そんな不思議な世界に絶世の美女たる私、カタリナ・フロムが生まれました」

【やり直すんかいw】

【絶世の美女（ここ重要）】

【これは大型新人の予感】

「自然と戯れながら14歳になった私は、初めてこの配信機材と出会い、あなたたちが住む向こう側へと繋がる方法を知りました。

そして色々と調べていくうちに思ったわけです。

あれ、私がV T u b e rになれば天下とれるんじゃないかね？ と」

【あー、そういう感じね。なる】

【ここら辺の説明もテンプレになったよなー】

「ふっふ。当然こんな話、信じませんよね。ですから一番異世界らしいことを最初に紹介しようと思ったんです。

まずはこの空をご賞味ください」

その言葉と共に画角が動き、空に浮かぶ白色の何かが映る。
満月に似た形と大きさの何か。それを一言で表すならー

【月、じゃないな】

【巨大な歯車？】

「そう、地球の魂の生まれ変わりを司る輪廻の歯車です。

私たち流者^{ながれもの}はみんなそこから生まれてきました」

「??」

「はえー、変わった設定やな」

「独自路線系か。おい、その先は（設定を守るのが）地獄だぞ？」

「……それでは今回の真骨頂を見ていただきましょうか」

不満そうに声のトーンを落とした彼女が今度は別の風景を移す。

水平線に沈みゆく太陽。

オレンジ色の光が海にきらきらと反射して、幻想的な光景を編み出していた。

「うーん、綺麗な夕日」

「何が始まるんです？」

「みんな普通にスルーしてるけど、さっきのどういうこと？ あんな光景、現実じゃあり

えないよね？」

「多分事前にCGとかで作っておいた映像で世界観を説明しようとしてるんだと思われる」

【なる。めっちゃ手が込んでるのね】

暫くすると、海と空の境界が陽炎のように揺らめき始まる。

【お、何か来た】

【黒い、靄？】

【何かこんな感じの怪談があつたような……】

「あれが〃穢れ〃。夕暮れ時に流れてやってくる悪いものです。

そして私たち防人さきもりの仕事は、それを浄化すること」

画角が動き、今度は海辺に佇む二人の男女の後ろ姿が映る。

華やかな和服に身を包んだ彼ら。その体が白く発光すると同時、遠く彼方の穢れが群れる場所に巨大な光の柱が落ちる。

【何か白いビーム出たあああ】

【天光 満つる処に 我は在り……】

【はえー、すつごい映像】

【あれ、まさかこれ新作アニメのPV？】

【→どゆこと？】

【アニメのキャラがVTuberになって番宣する手法があるんよ。

見た感じかなり金がかかってそうで、しかも大手所属じゃないなら、そういうことかなーって】

細かな光の粒まで再現された異常なグラフィックに、視聴者たちの困惑が広がる。

その様子を見かねたのか、少女のかすかな吐息が入った。

「全く、皆さんかけらも信じてませんね。

それではこれでどうでしょう？」

切り替わるカメラ。

少女の精巧な顔が画面いっぱいに広がった。透き通るような青色の瞳がぱちくりと

瞬く。

【!?】

【ガチ恋距離キター!!】

「やべ、近すぎたっ……こんな感じ、ですかね？」

どうも、皆さんの美少女、カタリナ・フロムです」

逆光の中、浜辺の二人が後ろに収まる画角で不愛想に手を上げる少女。

空に光が走る度、その端正な顔が照らしだされた。

【かわeeeeeee】

【??】普通に口とか違和感なく動いてるけど、全部CG?】

【お、恐らく】

【ま?】某事務所の3Dモデルは軽く超えてないか?】

【というか現実と見分けがつかん。後ろの映像もモニターに映ってるようには見えないし】

【だから言ってるじゃないですか、ここは異世界だつて。

ともかく、こんな感じで私たちは日々仕事に励んでいるわけです】

眉を吊り上げ、不敵に微笑む少女。

その雰囲気は圧倒されて、コメントは現実逃避の方向へと進んでいく。

【……ま、まあ最先端の技術なら、これくらい簡単なんやろ。知らんけど】

【受け入れるしか、ないかあ】

【可愛いは正義!!】

それで、カタリナちゃんは何もやらなくていいの?】

「いえ、私も手伝わないとです。わりと本気で危険ですので、この配信もそろそろ落とし

ますね。

見に来てくれた人、本当にありがとうございますー」

【おつでしたー】

【88888】

【はつや。テストも兼ねてって感じなんかな】

【次の配信は？】

「今後の予定なんかはチャンネルのコミュニティ欄でお知らせしようと思っています。SNSとか他のサイトは色々あって使えないので」

【りよ】

【チャンネル登録、高評価よろしくお願いしますっつてやつやな】

「お、Xさん良いこといいますね。」

少しでも私が可愛いと思ったら、チャンネル登録、高評価お願いします。

それでは。皆さんに素敵な幻想がありますように」

ぱたぱたと手を振って、生放送を終了する少女ー異世界の防人、カタリナ・フロム。初配信から強烈なインパクトを残した彼女の伝説はまだ始まったばかりである。

第二話 家族のこと

「…………ふむふむ、今はこういうのが流行っていると」

確かに呼び起こされた前世の記憶。

ただ何となく配信者だったような気がするだけで、どんな人生を送っていたかとか詳細な部分はいまいち思い出せなかった。

配信者街道を突き進むにもまずは敵を知らねばなるまい。

テーブルランプの灯りの元、私は黒い箱を操作して某動画サイトを見回っているところだった。

さつき海辺で拾ったそれを弄っているうちに分かったことがあった。

まずは片手で持てるこの小さな機械がカメラやマイク、エンコーダーといった生配信に必要な機材が一通り揃ったものであること。

ついでに電力が無尽蔵に供給されていて、かつ地球のインターネットと繋がっていた。

つまりこれ一つあれば、簡単に地球に向けて生配信ができるというわけだ。

…………ご都合主義、万歳!!!

と、まあ冗談はともかく、得てして流具（地球から流れてきた物品のこと）はそういうものなのだ。一度も電球を変えたことがないこのランプ然り、例え色々な設備が足りていなくともその本来の役割を全うできる性質を持っている。

「V T u b e r、ですか」

目に留まったのは、仮想のAvatarを使って配信するV T u b e rという存在。今や何千というV T u b e rがいて、中にはドラゴン娘なんてプロフィールを携える人もいるらしい。

うん、これならごり押せば異世界云々もそういうものだと受け入れてくれるかな。

現状の私の強み——本当に異世界人っていう特性を生かせるはずだ。

……元が日本人でしかも男だったことは多分言わない方がいいよね。

出来るだけ俗世と離れたほうが説得力があるだろうし、女性ライバーに男が近づくの嫌がるファンもいるみたいだから。

「こらっ、カタリナ。早く寝なさい。」

夜中にそんなものを見ていたら、目を悪くするわよ」

「はーい」

様子を見に来たお母さんに諭され、機械の電源を落とす。

……こんなやり取りも何だか懐かしい気がするな。

「うん、良いんじゃないか」

翌朝。両親がそろった食卓で改めて配信者になりたい旨を伝えると、返ってきたのはあつさりとした了承だった。隣でお母さんも大きく頷いている。

「え、いいの？ 私結構変なこと言ってると思うけど？」

「そんなの今更よ。」

おままごには目もくれず、昆虫採集に明け暮れるカタリナの姿をお母さんたちはずっと見てきたのよ？」

「う、その節はご心配をおかけしました」

黒歴史を掘りおこされ、肩身が狭くなる私。

まさかこんなところで前世の影響が出てるとは。ただそのおかげで自由にやらせてもらえるわけでーこれが怪我の功名ってやつかつ（違う）。

「むしろようやく女の子らしい趣味に目覚めてくれたって感じよね。

ほら、最近の若い子はヒップホップ？ で踊る動画を取るんでしよう？

どうせならお母さんと二人でやってみる？ こう見えて踊りには自信はあるのよ」

「母さん、もう昭和じゃないんだから……」

「あ、あはは」

歳不相応にフリフリと腰を振り始めたお母さんに、思わず愛想笑いが零れる。

お母さんの言う通り、地球では誰もが動画を投稿できる時代になったというのだから本当に不思議なものだ。

私の時はやべー奴しか配信していなかったような、そんな気がする。

「でも、ね。ネットで活動していると、意味わからない理由で炎上したりするんだよ。そのせいでお母さんたちにも迷惑をかけるかもしれない」

「大丈夫よ。もしそうだったとしても、テレビに出るのとかと違って地球の彼らは私たちには何もできないわ」

それにね、とお母さんは優しげな笑みを浮かべた。

「――例えば見ず知らずの誰かに貶められようと、私たちはお互いのことを思いあつてい。だから大丈夫よ。」

何をそんなに心配しているかは知れないけど、カタリナは自分のやりたいようにやればいいわ」

「最悪、全てを消してここに引きこもればいいだけだしね」

こんな無鉄砲な私の背中を優しく押してくれる二人。

……ほんと、良い人たちだよなあ。

配信者になりたいのは私の我儘なんだから、二人には非難の矛先が向かないようにしたいな。

「ありがと、お父さん、お母さん。」

それじゃあー」

「ふっふっふ」

初配信を終えて布団に入った後、タブレット（黒い箱を勝手にそう名付けた）のチャネル管理画面を見て、思わず失笑が零れた。

総再生回数は約1000回、チャンネル登録者数は117人。

後ろ盾や導線が何もない中でこの数字はなかなか伸びたと言ってもいいじゃないだろうか。

コメントを見るとやはり困惑の声が多い。何か大きなプロジェクトの一部なのか、一体どこの企業がバックについているのか、様々な憶測が飛び交っていた。

ただ気になるのは、そういう不可思議な面に押されて私個人に対する感想は少ないこ

と。

うーん、次は質問枠とかにして、もっとカタリナ・フロムという人物に焦点を当てた方がいいかな？

でもそれだと折角の異世界要素も出せないし……。

「こらっ。カタリナまたー」

「え？ 私、本を読んでただけだよ？」

お母さんの声が聞こえたその刹那、タブレットを枕の下に潜り込ませ、予め横に置いていた本を取る。

前世式緊急回避——名付けて「え、ゲームなんかしてないよ作戦だ」。前世の私はこれを多用して「ゲームは一日一時間」ルールを振り切っていたのだ、多分。

頑張れ、私。ここをしのげば希望が——

「……へえ、カタリナは上下逆さまでも文字が読めるのね」

「あつ」

「嘘をつく悪い子は、これ没収よ」

「ちよ、ちよつとまー」

「おやすみなさい、カタリナ。良い夢を」

がぼつと枕の下に手を入れ、タブレットを持っていつてしまうお母さん。

作戦失敗。司令部、次なる作戦を求む。

オーダー了解……奪還任務の難易度はSSSを超えるわ。諦めて寝なさい。
「くっ、ごめん愛する半身。守れなかったよ……」

屈辱にあふれる涙を拭って、私は大人しく布団にもぐる。
なにせよ、明日が楽しみだっ。

第三話 【料理配信】世にも奇妙な異世界料理店、開店で す！

「……お母さん。本当にやるの？」

「ええ、あつたりまえよ」

翌日の昼、自宅の厨房にて、今回の企画の発案者たるお母さんがやる気満々という感じで握り拳を作っていた。

うーん。大丈夫、なのかな？

「カタリナ。少し付き合ってくれるかい？」

母さん、昔から料理番組に出演することに憧れていたみたいなんだ」

「ま、まあ私としては願ったり叶ったりなんだけどね……」

ふんふんふーんとご機嫌に鼻歌を歌うお母さんが提案してきたのは、二人で料理配信してみない？ というもの。

確かにそれなら世界観に触れることもできるし、何より私ひとりじゃ無理だからありがたい話ではあった。

ただ中には良識のないコメントもあるわけー

「ほら、カタリナ。さっさとやるわよっ。

お父さんも位置について」

「はいはい」

「……ま、いつか」

妙にノリノリな二人を見てみると深く考えるのも馬鹿らしくなってきた。

急に内容を変更するのも印象が悪いし、何かあつたらその時考えればいいや。

「それじゃ、始めるよ」

タブレットを構えたお父さん（因みに画面にモニターが付いているから、私たち側からのコメントを確認できる。ご都合主義万歳!!）の掛け声のもと、生放送が開始される。

【こんばんわー】

【新作きたっ】

【横にいる美人さんは誰??:?】

生放送のタイトルは「【料理配信】世にも奇妙な異世界料理店、開店です!」。開始数秒にも関わらず、ぽつりぽつりとコメントが流れていた。

一拍置いて、お母さんが何だか手慣れた様子で話し始める。

「さあ、始まりました。異世界クッキングのお時間です。

司会兼シェフは私、カタリナママが。アシスタントに我が不肖の娘、カタリナを、カ

メラマンに夫のカタリナパパを置いて番組を進めていきたいと思えます。

視聴者?の皆さん、よろしくお願いします」

「でも、いきなり主役を奪われたカタリナ・フロムです」

「えー、ご紹介にあずかりましたカタリナパパです。」

今しばらく妻のお遊びにお付き合ってください」

【何か見覚えのある番組が始まったあああ】

【カタリナちゃんのお母さん!?!】

【唐突な両親登場ww】

【わつつつか。これならまだ……】

【おい、何かやべー奴いるって】

【ママさんに比べて、残り二人のローテンションさよ】

【今回作っていくのは家庭料理の定番、肉じゃが。

カタリナ、肉じゃがの作り方は?】

「えー、肉と野菜を切って煮込みます。以上」

【適当やなあ】

【間違っではない……のか?】

お母さんの呆れた視線と心なしか冷たいコメントにさらされる。

し、仕方ないじゃん、全然興味ないんだもん。

「それじゃあ、まずはお野菜を切っていきましようか。」

カタリナ、包丁と食材を」

「はい、どうぞ。」

あ、そうそう。皆さん、グロ注意かもです」

お母さんにザルに入ったそれを渡す傍ら、リスナーさんに注意喚起。

出来れば変な炎上はしたくない。

【ホームビデオって感じでいいなあ】

【肉じゃがでグロ注意とは一体……？】

「最初の食材はこれ、ジャガイモムシです。」

まずはこれを食べやすい大きさに切っていきます」

そういつてお母さんが掲げたのは、うにようによと動く手のひら大のそれ。

【??】

【いきなり知らない食材が出てきた……】

【ジャガイモが、動いている？】

【芋虫？ 嫌な予感がががが】

「○○さん、正解。」

ジャガイモムシはその名の通り、ジャガイモと芋虫が合体した生き物です。

私たち流者の根源は、地球に生きる皆さんの“もの”に対する強い感情。私たちが生まれる過程で色々な“もの”に対するそれが混ざってしまうんですよね

【強い思い……自然信仰とかそんな感じ?】

【はえー、面白い設定やな】

【あ、切ったら普通のジャガイモだ】

【うーん、でもなあ……変な緑色の液体ついてるし……】

【うわ、ほんとじゃん】

お母さんが緊張しながらイモムシを切っている間にコメントを確認していく。

見たところ、この不思議な生態に否定的な声が多いようだ。

「慣れですよ、慣れですよ。」

「ここじゃあ背中に花が生えたゴキブリとかが普通に育てられていますからね」

【まじか。異世界も結構大変なんだな】

【でえじょうぶだ。日本でもコオ○ギ食っていう昆虫食が大人気だから】

【おいばかやめろ】

【大人気(〇)】

「へえ、今はそんなのがあるんですね。」

……私だつたらごめんですけど」

【急にはしご外すじゃんw】

【そりやそうよな。ほんと誰が普及させたいんだか……】

【そーいや、リリストアルトだっけ？ そっちでは地球はどんな扱いなんだ？】

今も日本語を話してるし、こっちの常識とかも知ってるっぽいよね】

「あ、生き物だけじゃなくて地球の物品とかも流れてくるんですよ。それで把握してるって感じですよ。」

ただ元々が少ない上に最近はその量も減ってきたので、結構なジエネレーションギャップがあると思いますよ」

【なるほどね】

【ジエネレーションギャップって言葉も今日日聞かなくなったよなー】

【つまり中の人はそれくらいの年齢、と】

【カタリナちゃんに中の人なんて、いないっ】

とまあこんな感じで料理は進み、最終段階の煮込みに入ってるー

【あの、カタリナちゃん結局何もしてないんですが】

【アシスタント（リスナーの相手）】

【最初はノリノリだったママさんが料理に集中してほとんどしゃべれてないのが、こ

うーぐつと来るよね」

「まあ、作りながら話すのも訓練が必要だからなあ」

「あの、カタリナに料理の腕を期待しないでください。

カタリナの料理は月に一回食べるくらいで十分です、本当に」

「ええ、お父さん酷いっ。」

最近は二人とも最後まで食べてくれてるじゃんっ」

「そうね。何とか食べられるものにはなったわね……」

「母さんの完全介護でな……」

私の言葉に遠い目をして黙ってしまふ二人。

……そ、そんな酷いのかな？

「『悲報』カタリナちゃん、料理下手属性だった」

「またべったべったなのが来たなー 大袈裟に言ってるだけじゃないの?」

「ママさんの目を見る あれは何かに絶望した時の目だ……」

「うるさいですよっ。大体皆さんだつてまともに料理とかしたことないでしょう?」

「いや、別に?」

「まあ、今は男でも自炊する時代だからなあ」

うっそだろっ。最近のニートっっかりしすぎだろ（失礼）。

さ、流石にここまで女として惨敗なのは元男としてクルものがあるなあ。
「お母さん、私。やっぱり花嫁修業を頑張るよ。」

そして可愛い女の子を捕まえてみせるっ」

「カタリナ……そんなに思いつめなくても大丈夫よ。」

女はとにかく愛嬌。きっとカタリナでもいいと言ってくれる人は見つかるわ」

「……あ、あの、私別に男と結婚することに絶望したわけじゃないよ？」

普通に女の子が好きなんだよ？」

【キマシタワアー!!】

【よっつしやああああああ】

【百合展開キボンヌ】

物凄い盛り上がりを見せるコメント欄。

やっぱり今は女の子同士の恋愛が人気があるようだ。私としても無理しなくて済むから、その方がありがたい。

待ってて、まだ見ぬ美少女たち。

この世界で私は百合ハーレムを作ってみせるっ。

私はそんな最低な夢を心の中で思い浮かべたのだった。

あ、因みに配信は円満に終わって、肉じゃがはおいしく食べました、まる。

第四話 【雑談】NGなしの質問コーナーです！

勉強机の上にタブレットを置き、カメラをこちらに向ける。

配信の待機枠には既に100人近くの人に来ていた。

うん、順調順調。やっぱりこのガワは強いなあ、とか本物のVTuberっぽいことを考えていると、時刻は11:00に。

小さく息を吐いて、私は向こう側の彼らに微笑みかけた。

「現実と空想の狭間よりこんにちわ。」

皆さんの美少女、カタリナ・フロムです」

【お、はじめた】

【こんにちわー】

【何かまともに始まって凄い違和感がw】

【昨日のあれは衝撃だったからなあ】

【今日はママさんとパパさんはいないの？】

「ええ、私ひとりです。今日は皆さんの質問に答える回ですからね。」

どうぞバシバシ質問してください」

【デビュー三日目によやくか、】

【色々ありすぎて逆に迷うなあ】

……

【カタリナ先生つ、スリーサイズを教えてください！】

私の言葉に、一気にコメントの流れが速くなる。やっぱりみんな色々とため込んでいたらしい。

その中で一番目に付いた質問を拾う。

「えー、上から129・3，129・3，129・3です。はい次」

「はえー、異世界人は丸太みたいな体型してるんやなあ」

【どこの猫型ロボット!?!】

【こいつ手慣れてやがる……】

【そーいや、なんでTwitterとかやらないんだっけ？ 理由とかあるの?】

「あー、それについてはごめんなさいです。」

異世界と地球と繋ぐにはいろいろと制約があつて、このサイトしかアクセスできないんですね。

「だから感想とかは動画のコメントに直接書いてくれると嬉しいです」

【了解、気を付けないとだね】

【相変わらず変わってるなあ……】

【今後の配信予定とかは?】

「基本的にこんな感じで不定期に配信していきたいと思ってます。

ただ夕方はやることが多いので、昼配信が多くなるかもです」

【異世界生活もいろいろ忙しいんだな】

【丁度休憩時間に見れるし、俺としてはありがたい】

【ま? 俺は普通に仕事中に見てるわ】

【コラボの予定とかはあるの?】

「コラボですか。一応考えてはいるんですけど、配信機材とかの関係で多分難しいんですよ。SNSがないから、なかなかコンタクトも取れませんし。

どなたか、リストアルト人の配信者を知りませんか?」

ロロの国、ナキア村のカタリナ・フロムがコラボを望んでいたと伝えてください。可愛い女の子だと尚よし、です!」

このタブレットは本当に必要最低限な機能しかなくて、配信以外に出来るのは動画編集と某大手動画投稿サイトへのアクセスのみ。コラボ配信に必要な会話アプリなどは入れられなかったのだ。

だから誰かと一緒に配信するには、ここに来てもらう以外方法はない。……まあ多分

無理なんだけども。

【ここまでネジが飛んだ配信者は他に知らないなw】

【一応リリストアルト人であることを伏せて配信している可能性が微レ存?】

【それよか隠しきれていない願望よ】

【女の子好きはマジなの?】

「ええ、大マジですよ。」

というか男なんてみんなエロガキじゃないですか。あんなん眼中に入りませんって」

前世の学生時代をフワフワと思いついても、何か馬鹿話をしていたような記憶しかない。正直、あいつらと結婚するのなあ……。

今まで男に興味を惹かれなかったのにも、まさかこんな理由があったとは。

あ、でもシルビオみたいなのもいるし、仲良くするくらいは良いかな。

【おお、なかなか辛辣やな】

【何というかこう、、わからせたい】

【→わかるで、どことなくメスガキ臭が漂ってるんよな】

【今は好きな人とかいないの?】

「うーん、今のところはいませんね。」

幼馴染の女の子二人は恋愛対象という感じじゃありませんし」

「くそっ、ガチ百合展開はまだ先かつ」

「あれ、というか他の友達は？ まさか二人だけ……？」

「やめてくれ、その技はオレに効く」

「し、仕方ないじゃないですか」

私はまだ見習いで、自由に動けないんですから」

鋭いコメントに、思わず声が震えそうになる。

私と関わりがある同年代の子は、幼馴染の二人と一以上。

ほんと、百合ハーレムまでの道は遠いなあ。私の異世界転生、世知辛すぎでしょ。

「??どゆこと?」

「結構親が厳しい感じ?」

「あ、いえ。私たち稀人は、穢れを浄化するっていうその役割故に穢者に襲われやすいんですよ。」

だからまだ力の弱い私は、外に出来るときは誰かと一緒にじゃないといけないっていう話です」

「なるほどねえ」

「やっぱりどの世界にもモンスターの存在はいるんだなあ」

「稀人とか”けがれもの”ってのは?」

「稀人は流者の中で、私たちがみたいに人と全く同じ体を持った存在のこと。

穢者は穢れがついて凶暴化してしまった流者のことです」

【読んで字のごとくってことか】

【そういえば流者は色々なものが混じってるのが普通なんだっけ】

【まじ？ 俺は勝手に動物の尻尾とかが生えるものだと思ってたわ】

「ふ、そんな薄い本みたいな設定はありませんよ」

と、まあこんな感じでリスナーたちの質問に答えていき、あっさりと終了時刻の12；

00になった。

「さて、それじゃあこの配信もそろそろ終わりますかね。

最後までお付き合いいただきありがとうございます」

【おつ】

【お疲れ様ー】

【のんびりできたし、結構楽しかった】

【何よりこのグラフィックよな。本当に目の前で話してる気分になるわ】

パラパラと流れてくる嬉しいコメント。

一応みんなの印象は良かったらしい。ただー

「今度は動画でリリスタアルトに関することを纏めて紹介したいと思います。」

多分皆さんもその方が分かりやすいですよね？」

【おっけー】

【たすかる】

【正直ありがたい。色々ごっちゃになっていたから】

私の言葉に肯定的な言葉が続く。

やっぱりそうだね。世界観を説明するのって難しいなあ。

とにかく、お母さんに融通してくれるよう頼んでみよう。

「分かりました、それじゃあ頑張ってみますね。」

では、皆さんに素敵な幻想がありますように」

【おっー】

【素敵な幻想がありますようにー】

【これも決め台詞なん?】

【→そうよ。初配信から言ってる】

【りよ。素敵な幻想がありますようにー】

私が適当に考えた決め台詞にも律儀に反応してくれる彼ら。

三回目の配信はこうして好評のうちに幕を閉じた。

第五話 腹ペコ姉とメスガキ妹

「母さん、そつちはお願いつ」

「任されたわつ」

真つ赤に染まった夕暮れの空。

穢れを伴った流具が流れてくるその浜辺で、お父さんとお母さんが浄化の力を使つて必死に祓つていた。

互いに声を掛け合い、一個たりとも漏らしはししないと強固な防衛網を張る二人。

その姿はまさに村の防衛者たる防人らしいと言えた。

——ただ後ろから眺めているだけの私とは違つて。

ほんど情けないなあ、と今更ながらため息が零れる。

防人見習いの私には、二人がやるような超長距離での浄化は不可能。万が一に備えて、ただこうして見ていることしかできなかつた。

しかも本当に万が一がありうるから気を抜くわけにもいかないつていう……。早く、幼馴染たちみたいに成人になりたいな。

その方が色々と自由がきくし、何より——二人に楽をさせてあげられるから。

さて、逢魔が時も終わって、穢れの流入がほぼなくなったころ。私はお父さんたちと一緒に浜辺を歩いていて。

目的は使える流具と動画的に“映え”そうな場所の探求。

「お、ここの角度なんかは良さそうですね」

夜空には薄く光る輪廻の歯車、地面には打ち上げられた流具の山。

これは良い映像になりそう、とタブレットを構えー

「うわあ、お姉さま見てください。」

相変わらず変なことやっていますよ」

「こらっ、やめなさいサーニヤ。」

カタリナだって頑張って生きているのよ？」

「はい、分かりました……ぶぶっ」

明らかにこちらを馬鹿にした声と、フオローになってないフオローをする相方の声が響く。

振り向けば、そこにいたのは綺麗な茶髪をたなびかせる二人の少女ー私の幼馴染N

O. 1とN O. 2だ。

「うわ、出ましたね、残念姉妹。

久しぶりです、全然会いたくなかったです。特に妹の方」

「それは私のセリフですよ、カタリナ。

というかその言い方やめてください、不愉快です。

私はともかく、最強無敵のお姉さまが残念なわけないじゃないですか」

「……私はサーニヤを残念だなんて思ったことはないわよ？

まあちよつと行きすぎな部分はあるけれど」

「さすがお姉さまですつ。

ーほら、見ましたか？　これが私のお姉さまです。カタリナとは頭も格も違うんで

すよつ」

自らの姉ータリア・ロツテンに抱き着き、べーつと舌を出すサーニヤ。

とまあこんな感じで、お姉さま愛にあふれるサーニヤになぜか私は目の敵にされているのだ。しかもタリアの方も口ではやめなさいとか言いながら、満更でもなさそうに顔を綻ばせている。

タリアと会おうと思えばサーニヤがついてくるし、その逆もまた然り。

似た者同士なのだ、この二人は。

顔は良いんだけどなあ。何というかこう、そそれないというか、踏み込んじやいけ

ないラインがあるような気がするんだよね。

まあともかく。

「それで、二人はどうしてここに？」

私に会いに来るなんて結構珍しいですよ？」

穢れを浄化する防人を担う私達フロム家、穢れを結界で封じる守人もりびとを担うタニア達
ロツテン家、そして穢者を退治する狩人を担うグラント家。

この三家は役職ごと別々の場所に住んでいて、そこまで多くの交流はないのだ。

私達が小さい頃にはお互いの家に預けることもあったけれど、私以外の全員が成人になつた今では、多くて月に一回会うか会わないかくらいの関係になつていた。狩人のシルビオなんかはここ一年くらい姿を見てない。

今日は特にそんな話はなかった……と思うな、うん。

「あなたのお母様に誘われて、ご相伴に与ることにしたのよ。

久しぶりにカタリナに会いたかつたからで、決してお母様のご飯にご飯に釣られたわけではないわ……じゆるり」

「はい、お姉さま。至高のお姉さまが食事なんか釣られるはずがありません。

私たちはカタリナの馬鹿の顔を拝みに来ただけです、感謝することですね」

言葉に反して涎を垂らすタニアの口を、サーニヤが急いで自らの服の袖で拭く。

尊敬するお姉さまのアホな部分を私に見せたくないのだろう。……そう、だよな？

な、なんでサーニヤは涎が付いた袖を見てうへへと気持ち悪い笑みを浮かべて、それを見ずの口を持っていてーあつ。

……うーん、ヨシ！ 何も見なかった！

「じゃ、じゃあ目的は果たせましたし、もういいですかね。

後はどうぞ、お二人でお楽しみください」

「それは駄目っ。

……いい、いえあの、あなたが拾ったそれに興味があつてね、是非食事中に聞かせてほしいのよ」

「くっ。お姉さまをおちよくるとは万死に値しますっ。がるるっ」

タニアが私がつつタブレットを指さし、サーニヤが獣のように唸る。

例えとつきに出た言葉でも興味を持つてくれるのは嬉しいなあ、と説明しようとしたところでー気付く。

浜辺で佇む二人の、（見かけだけは）綺麗な姿に。

黒を基調にした落ち着いた着物に身を包み、茶色の髪を腰まで伸ばしたタニア。

その顔はきつと引き締められてはいるものの、まだ子供っぽさが抜けきつてはいない故に小動物が威嚇しているような印象を抱かされる。

対して、白をベースに色鮮やかな花が華やぐ着物を着たサーニヤ。

その顔に浮かぶ嗜虐的な表情に目を瞑れば、タニア譲りの整ったパーツと頭に付いた黒色のリボンカチューシャもあって、なかなか愛らしい感じだ。

ーこれはいける。一部のリスナーの性癖にぶっ刺さるっ。

「ふっふっふ」

「うわあ……また変なことを考えてそうです」

「だ、大丈夫よ。サーニヤだけは私が守るわ」

「お姉さまっ」

私をダシにイチヤイチヤし始める残念姉妹。

ふっ構わないさ、これもまた立派な営業になるからね（多分）。

攻略すべきは妹の方。私は満面の笑みを作って話しかけた。

「ねえ、サーニヤ?」

尊敬するお姉さまの美貌、全世界に知らしめてみたくありませんか?」

第六話 【ゲーム配信】懐かしのアレをやります！①

ロツテン家の四人、残念姉妹とその両親と一緒に夕食を食べた後。

蛍光灯に照らされた居間のフローリングにて、私たち子ども三人は向かい合って座っていた。

タブレットを構えたお母さんが生放送開始の合図を送ると同時、私は出来るだけお淑やかに見えそうな笑みを浮かべて話し始めた。

「夜も更けてきた頃、皆さまいかがお過ごしでしょうか。」

異世界の超絶美少女、カタリナ・フロムです。まずは突然の告知にも関わらずこんなに沢山の方がくれたことに感謝を」

【こんばんわー】

【お、本当に始まった】

【ええんやで むしろ二回行動感謝や】

【レトロゲームかな？ 結構楽しみ】

「さて、今回は何と特別ゲストに来ていただいております。

さ、挨拶をどうぞ」

「タニア・ロッテンよ。一応カタリナの幼馴染をやらせてもらってるわ。

よろしくね、リスナーさん?」

「お姉さまの妹、サーニャ・ロッテンです。

今日はお姉さまの魅力を伝えるために来ました。それはもう、カタリナなんかとは比べものにならないほどの最強っぷりを存分に教えてあげます」

【幼馴染キターー】

【どっちもかわええなあ】

【カタリナちゃんと同じ年くらいかな】

【美人姉妹……大好物です】

【妹ちゃんの方、なんかすごい圧を感じる……】

手筈通り挨拶する二人。

結局私の口車に乗せられて配信に出ることになったのだ。流石私、やればできる子。あ、勿論ちゃんと危険性は教えたよ。

「そして今回はカメラマンを務めさせていただきます、カタリナママです。

その横にいますのがー」

「地球人の皆さん、初めまして。」

ロッテンママです、私の二人娘をよろしくお願いしますね。」

「よ、カタリナママ待つてましたっ」

「おっとり系美人妻、ですか。ふう」

「わつつつか。これならまだ……」

「おいなんかやべーやついるって（n回目）」

カメラに向かつて手を振る母親二人にコメント欄が一気に沸く。

因みにロツテンママは本当に優しい人でー私の初恋です（最低）。

「そして最後に、離れたテーブルで宴会を楽しむ父親たち二人です。

可愛い娘たちを肴さかなにして飲む酒はおいしいですかー？」

「おう、そら絶品よ。」

俺たちにとつては娘たちの笑顔が最高のスパイスだからなあ」

「いやはや、全くもつてその通りですね。ささ、どうぞどうぞ」

「オラオラ系とクール系のイケメソ……これは女性層も狙えそうですね」

「い、いや俺の足元にも及ばないな」

「やめとけ、可愛い妻と娘がいる時点で俺たちに勝てるはずがねえよ」

【唐突なNTRによって脳が破壊されました】

「うわっ、皆さんうちのお母さんを狙っていたんですか？

流石カタリナのファンの人たち、さいてーですね」

【お、これは良い煽り】

【何か、胸がむずむずするな】

【ちよつと、ざーこ♡ざーこ♡って言ってみてよー?】

【……気持ち悪いです】

「みちやだめよ、サーニヤ。こんなの見たら穢れてしまうわ」

「はい、お姉さま。私はお姉さまだけを見ていますっ」

【……これはこれでいいな】

【ふ、悪くありませんね】

コメントを見て辛辣なことを言う残念姉妹に、わりと好意的に返すリスナーたち。

最近の人たちはこういうのがいいんだ（驚愕）。

……ってか私の人気、残念姉妹に奪われてない?

急いで軌道修正しないとっ。

「さ、さて、紹介はこれくらいにして本題に移りましょうか。」

今回やっていくのは懐かしのこちらー百人一首ですっ」

【百人、一首?? 百人一首きちゃー!!】

【よ、予想外のが来たなあ】

【確かに懐かしいっちゃあ懐かしいけど……】

【俺はてつきり64とかそういう系のレトロゲームをやるのかと思ってた】

【あー、最近流行ってますもんね！ 昔の全然知らないゲームをやるの！】

【う。そ、そうだね】

【そうだね……（昔やってたなんて言えない）】

お母さんがフローリングに雑に広げられた百枚の取り札と、その周りに離れて座る私達を写していく。

そして、コメントを見えるよう私の対面に腰を下ろした。

「あ、因みにレトロゲームとかはやろうと思ってもできませんよ。」

最近の娯楽機器は滅多に流れてこなくて、異様な高値で取引されますから」

「そうねえ、ここラキア村だと村長の家にテレビが一つあるくらいよ。」

昔のものだったら結構あるんだけど……きつと物を大切にする精神を忘れてしまったのね」

【流者は〃もの〃に対する強い思いが根源……なんだっけ】

【まあ最近はそのような感情は薄れてるだろうなあ。

大量生産大量消費の時代で、壊れたら買い替えるのが当たり前になってるし】

【さつきテレビとかが見当たらなかったのはもんなあ】

【まじか、俺らからしたら考えられない生活だな】

お母さんの言葉に、どこかしんみりとした雰囲気の流れていくコメント。

あー、よくないなあ。みんなにはリリストアルトがもつと楽しい世界だって知ってほしいのに。

「それじゃ、早速始めていきましようか。」

ロツテンママさん、読み手をお願いします」

「は〜い。みんな準備は良い〜?」

「大丈夫よ。私、二人には負けないわ」

「はい、お姉さま。お姉さまの覇道を阻む邪魔者は私が阻んであげましよう」

「いいですね、受けて立ちますよ。」

「ただし今回の私には強力な助っ人がいることをお忘れなく」

「??」

頭に疑問符を浮かべる二人の前で、タブレットに向けて可愛くウインク。

私の前には数百人の集合知がある。頼んだよ、視聴者さんっ!

【「悲報」カタリナちゃん、汚い】

【だから百人一首を選んだのかww】

【小学校の百人一首大会で一枚も取れなかった俺に任せろっ】

【それじゃあ始めます。】

みちのくの〜」

【めつちや綺麗な声】

【??】

【あー、なんだっけ聞いたことあるような……】

【「乱れそめにし 我ならなくに」 川原左大臣の一句やな】

【ま？ それならさつきサーニヤちゃんの方にあつたぞ？】

よし来た、と早速サーニヤの方に目を向けて、みたれそめにし、みたれそめにし、と探し――

「見つけましたっ」

バシリとその札をたたく。

「お、カタリナちゃん正解〜。

すごいねえ、覚えてたの？」

「ええ。私の灰色の脳細胞を以てすれば簡単ですよ。

どうしたんですか？ 私の邪魔するんじゃないかなかったですかー？」

「くっ……絶対、おかしいですよ、これ」

「さらに出来るようになったわね、カタリナ」

【煽りおる煽るおる】

【おいこらw w】

【ほぼ俺らの功績じゃねえか ……ところで正解した人は何者?】

【高校の時カルタ部だったんや 全国大会でわりと上のほうまで行った】

【何でこんなところに猛者おるんだよw】

「ふっふ……」

予想以上の助っ人登場に、にんまりと口角が上がる。

まだ二人は私の他力本願戦法に気付いていない。それに例え気付かれたとしても、今のカメラ位置を死守すれば、顔を横に向けなくていい私の方にアドバンテージがある。

さあ、私の華麗なる活躍でリスナーの心を鷲掴みにして、ついでに完全になめやがってこれている年下二人にお灸を据えてみせますかねっ。

第七話 【ゲーム配信】懐かしのアレをやります！②

百人一首も終盤——残されたのは二枚の取り札。

思わずごくりと喉を鳴らした私を見て、サーニヤが馬鹿にしたように笑う。

「あつれ、最初の威勢はどこにいったんですか、カタリナ？」

「うるさいですよ、サーニヤ。」

あと一枚取れば私の勝ちなんですから、それまで黙ってくださいいっ

現状の私の獲得札数は33枚、タニアは32枚、サーニヤは33枚。最後まで三人に勝利の目がある大接戦となっていた。

おかしい、計算では二人はとっくに私の前に跪いているはずだったのに……。
どうしてこうなった???

最初アクシデントはそう、二句目が終わった後に起こったのだった。

く唐突に挟まる過去回想く

「あ、見てください、お姉さま。」

カタリナの奴、コメントに色々教えてもらっていたみたいですよ」

「……本当ね。流石、カタリナ。」

「こういう時の悪知恵は良く働くわね」

「くつくつく、何とでも言ってください。」

例えバレたところで、私の有利は変わりませんから」

私の視線の動きを見たんだろう、あっさりとからくりを見破る二人。

思ったよりも早いなあという気持ちはあるものの、まだ大丈夫。そこまで考えてこの配置にしたのだ。流石、私。あつたまいいつ。

「うわあ、わるい笑み」

【完全に悪役側で草】

【カタリナちゃんに弱みを握られ、わからせられるメスガキ姉妹、…、あると思います】

ほら、リスナーも私の活躍にこんなに喜んで……喜んでる、これ？

ま、まあ威厳は示せたのかな、うん。

私の策略にがると唸っていたサーニヤが手を上げる。

「カタリナのお母さんに場所替えを要求しますっ。」

「やっぱりお姉さまの前に来るべきです」

「え、私？」

「うーん、そうねえ。あまりに差が開くようなら、そうしようかしら。」

このままカタリナに調子乗らせるのも気分がよくないし」

「ちよつとお母さんっ!？」

母親なら娘の成功を喜んでよー!」

【「悲報」カタリナママさん、娘を裏切る】

【何か普段カタリナちゃんがどんな扱いされてるのかわかるなあ】

とまあこんな感じで、家族の謀反がありながらも

「それじゃあいきますね〜。」

なつのよは〜」

【俺はカタリナちゃんの方見るわ】

【おっけー、じゃあ俺は手前の方】

【「雲のいづこに 月宿るらむ」やな これも結構有名な句】

【さてさて……】

【みつけ、カタリナちゃんから見て左の手前の方】

【これですっ】

【くっ】

すっかりリスナーさんのロボットと化した私は、指示された通りの札を取ってー

「あら残念ですね。お手付きです」

「え？」

【あれ？ 名人さんの勘違い？】

【い、いや、合ってるはず サイトにもちゃんと書いてあるし】

【ロツテンママさんが勘違いしてるとか？ それか誤植？】

【そんな重要な部分がちやごちやになるかねえ】

【あれ そういえば流者って色々なものが混ざっているんじゃない？】

【？ 流者って生き物だけを指してるんじゃないの？】

「あつ……いえ、地球から輪廻の歯車を通して流れてきたものを総称して流者と呼びます」

【……つまり？】

【流具も流者の一種で、色々混ざってる】

【ダメじゃんwww】

リスナーに指摘され、その事実を思い出す。

そうじゃん、大体問題なく使えるから忘れてたっ。

「ぷっ。流者のくせに自分たちの性質を忘れるとは、流者の風上にも置けませんね」

「く。ま、まあいいですよ。それでもまだ私の有利は変わりませんっ」

どのみちリスナーのコメントにどれだけ早く反応できるか対決になっていったのだ。その指示と盤面が同時に見えるという有利性を使えば簡単に勝てると、この時は思っていた。

ところがー

「ちよつと、全然違う場所にあるじゃないですかっ!？」

【わーい、騙されたw】

【何か小学生みたいな悪戯しとる……】

【可哀そうは可愛いつつ】

【まあタニアちゃん達の目を欺く意味も多少はあるからねw】

私がリードすると反旗を翻し始めるリスナーのせいで、自分の力で探さざるを得なくなったりー

「お姉さまっ、そつちです」

「あ、本当ね。ありがとう、サーニャ」

「えへへへ」

お姉さま絶対主義のサーニヤが、何とか反射神経よわわタニアを勝たせようと「お姉さまが無理なら自分が、お姉さまが取れるならお姉さまに」といった絶妙な調整を繰り返した結果――

「全員に勝利の目があるってか。嬢ちゃんたちの勝負、面白いことになってるじゃねえか。……どうだい、ここらで一局？」

「お、いいですねえ。」

「じゃあ私はこの唐揚げをサーニヤちゃんに賭けます。一番反射神経がありそうですからね」

「ふ、あいつは自分がお姉さまに勝つことに許せねえじゃないかな。」

「ってことで、俺はタニアにこれを賭けるぜ」

と私たちの真剣勝負で勝手に賭博を始める父親二人。

「……おかしい、私の味方は？　そうだ、リスナーさんは私の勝利を望んでくれるよねっ！」

「どうする？　誰を勝たせたい？」

「タニアちゃんが勝てば丸く収まりそうだよなあ」

【丸く（カタリナちゃん以外）】

【お前らは間違ってるぜ】

重要なのは誰を勝たせるか、じゃなくて誰を泣かせるか、だ】

【な、何だつてー!?】

【名言きたー!!!】

【そうなることやっぱりメスガキ二人かな〜】

【つてことはつまり……?】

【い、いいでしょう!!!】

最高の形でこの闇のゲームを終わらせてみせますつ。誰も望んでいない、私の勝利という結果でつ】

ここにいる全員に向け、私は大きく宣言する。

私以外が幸せになるなんて、許せねえよなあ。

私の宣誓に、ふつとサーニヤが口角を上げる。

「いいえ、勝つのは私たちです。ですよね、お姉さま?。」

「そうね、頑張つてサーニヤ。あと一枚よ」

「え、ええ。そうですね……私はお姉さまに勝つてほしいんですけど」

姉妹の微妙にかみ合わないやり取りを聞いたのち、運命の一局は始まる。

「ひともし〜」

下の句が来た瞬間に反応できるよう、神経を研ぎすませていく。もうコメントは見ない。

勘で二分の一をあてにいくのもなし。あと一枚取ればいいのだ、有利な条件を自ら捨てたくはいかない。

またサーニヤの方も自分が勝ってしまう可能性がある以上、無理な賭けはできないはず。最後に、真剣勝負を好むタニアはそんな発想はしない、と思う。

つまり、完全なる反射神経勝負。

「うきにー」

読みはついに下の句に。

きた、と右側の札に手を伸ばしー

「ーいっつっ」

何かにぶつかって止まる。

見れば、目の前に100cmはある半透明の白い壁が立っていた。

これは結界……だと!?

「よし、取れたわ」

「さすが、お姉さまですっ」

と、明らかな付度プレーを見せられている間にその壁が空気に溶け込むように消えていく。

下手人のサーニヤはこちらを見すらしなかった。おいこらっ。

「ちよ、ちよつと流石にずるくないですか？」

今の守人十八番の結界ですよ？ 穢れを封じる術をこんなことに使うなんて、恥ず

かしくないですかね？」

「え、何の事ですか？ ずつとリスナーさんに助けてもらっていたカタリナさん？」

「く。お、お母さんは……？」

「うーん、そうねえ。

サーニヤちゃんが本気を出したらカタリナじゃあ手も足も出ないでしょうし、次からは守人の術を使うのは禁止にしましょうか」

「はい」

今回の審判たるお母さんに抗議し何とか制限を勝ち取ったのもつかの間、視界の端でサーニヤがベーと舌を出す。

いいですよつ。

そつちがその気なら考えがあります。

「それじゃあ最後、いきまますよ。」

かくとー」

読み上げが始まったその瞬間、浄化の力を極限まで細く集めて飛ばす。白い槍は高速で飛び、狙い通りタニアの鼻へと吸い込まれていく。

「へくちっ」

「おねえさまのくしやみ!」

と完全にペースを乱された二人を横目に、私は最後の札を取った。

ふ、これが天才の戦法ってやつですよ。

さあ、みんなの顔が屈辱に歪むのを見ようと顔を上げてー

「あ、残念。おてつきですね」

「は
????」

「???

「?」

【どういうこと?】

私の札をのぞき込んだタニア達のお母さんが衝撃の言葉を発する。

床を見ても、もう一札も残っていない。ど、どうということだつてばよ?

「あ、そうだわ。これ、本当の誤植があるのよ。」

二つの読み札の取り札になっている札が一枚だけあるの。

私たちは面白いから、その札をボーナス札として2枚、どこにも繋がっていない札を0枚としてカウントしたわ」

くそみたいな伏線回収を始めるお母さん。そのまま私たちがとった札を確認している。

え、ええ。冗談、だよね……？

【つまり？】

【どこかの一枚に二枚分の価値があるわけで……？】

「あ、そうそうこれよ。」

というわけで勝者、サーニャ・ロツテン!!!」

【よっしゃっ!!!】

【いやあ、文句なしの大団円エンドでしたね】

うそ、だろ……？ 私、頑張ったのに……。

一気に力が抜け、体が崩れ落ちる。

「おめでとう、サーニャ」

「あ、ありがとうございます、お姉さま」

視界の端で、サーニャがひきつつた笑みを浮かべるのが見えた。

第八話 この世界は好き？

「さ、夜も遅いし、あなたたちも早く寝なさい」

「はい」

「おやすみなさいです、カタリナのお母様」

ゲーム配信を終えた夜、私、サーニヤ、タニアの三人は私の部屋で仲良く布団をくつつけて寝転がっていた。

部屋の電気が消され、同時にお母さんの気配も消える。

障子の隙間から漏れる風、ほのかな草の匂いが鼻を撫でる。

耳が拾うのは草木が揺れる音と、かすかな生活音。

「……面白かったわね、百人一首」

その静寂に耐えかねるように、あるいはさつきまでの余韻に浸るようにタニアがぼつりとそう言った。

私も何だか今は話したい気分だ。

「ですね。リスナーの人たちも喜んでくれたみたいです」

「結果は納得いきませんでしたけどね。」

なんですか、ボーナス札って。最初に教えてくださいよ、全く」
サーニヤがふんと鼻を鳴らす。

お姉さまに勝ちを譲れなかったのがよほど悔しいらしい。
「そう？ 私嬉しかったわよ。」

昔からサーニヤは私に遠慮していたみたいだから」

「……気づいて、いたんですか？」

「当たり前じゃない。」

皆にサーニヤに凄さを知ってもらいたかったのに勝負事とかで手を抜くわけにもい
かなくて、結構困っていたのよ？」

「さ、流石はお姉さまです」

思わぬ事实に、恥ずかしそうに言葉を切るサーニヤ。

……なんでお姉さまと慕っているか、分かる気がするなあ。

「今頃、お父さんたちは晩酌でもしてるんですかね」

「そうでしょうね。」

勝負が決まった時のサーニヤの顔は傑作だったなとか言ってますよ、きつと」

「二人とも凄く楽しそうだったわね」

あの時は惜しかった、あの時の反応は面白かった。

暗闇の中で、静かな語らいは続いていく。

けれど永遠に続くと思われたそれも暫くすると途切れ、私たちは暖かな静寂に包まれた。

「……今日はありがとうございました。」

私の我儘に付き合ってくれて」

不思議なもので、こんな時になって初めて本音が口からこぼれた。

暗闇の中、サーニヤが唇を尖らせるを何となく感じる。

「何ですか急に。私はただ自分にメリットがあるから出ただけです。」

カタリナのためなんかじゃありません」

「ふふ。相変わらず素直じゃないわね。」

「そもそもここに来るのを一番楽しみにしていたのはサーニヤだったじゃない」

「……へえ？ その話詳しく聞かせてくださいよ、タニア」

「な、なんの話ですか？」

お姉さまの勘違いじゃないですかね」

「あれえ？ サーニヤでもお姉さまを否定するようなこと言うんですね」

「ぐう。完全無欠のお姉さまにだって、間違えくらいありますよ……」

「くす、当たり前じゃない。それに今回はサーニヤの負けね。」

さつきも真つ先にカタリナの横に陣取っていたし」

「わ、私がここを選んだのは、お姉さまを取られないためですつ」

三人の真ん中にいたサーニヤが（多分涙目で）もそもそと体を動かして、タニアに抱き着く。

流石に揶揄いすぎだと思つたのか、タニアが彼女の頭をポンポンと撫でた。

変わらないなあ、二人は。

「……ねえ、カタリナの馬鹿。」

まだ配信は続けるんですか？」

「？ はい。とりあえず需要がある間はやめるつもりはありませんね。」

あ、二人にはまた出てくれると嬉しいです」

「そう、じゃ……なくて」

言いくそうに言葉を切つて、そのまま黙つてしまうサーニヤ。

彼女の頭の上でタニアは悲しそうに眉を寄せる。

も、もしかして本当は出演するの嫌だったとか？

私も別に誰かを不幸にしてまで人気者になりたいわけじゃない。それなら教えてほしいと、二人に言おうとして――

「手、握ってください」

「え？」

「聞こえなかったんですか？」

手、ですよ手。それともこんな悪い子には触れたくもありませんか？」

「い、いえ。そんなことあるはずがありません」

迷子の子供のような声音のサーニヤに詰められ、投げ出された彼女の手を握る。

サーニヤの手はじんわりと汗がにじんでいて、小さかった。

その感触で不意に過去がよみがえる。それはここリリストアルトでの歴史、私たちがまだ小さかった頃の出来事。

「何だか子供の頃に戻ったみたいですね。」

ほら、こうして三人で手を繋いでお昼寝していましたよね」

「くすつ、懐かしい。そんなこともあったわね」

「……よく覚えていませんね」

恥ずかしい過去の過去、不貞腐れた様子を見せるサーニヤ。

ただ彼女の手は私の掌の中から逃げようとしなない。

昔はここまでサーニヤは攻撃的ではなかったのだ。

きつかけは確か彼女が5歳の時、誰よりも早く成人になったからだったか。

それから急に私に対して冷たい態度を取るようになって、今もまだ私たちの間には大

きな溝が横たわっている。

……多分、サーニヤはいつまで経っても成人になれない私に失望しているんだと思う。

だからー

「私も早く成人になって、あなたたちに追いつきます。」

それまでは私という天才がないフィールドで、伸び伸びしててくださいいよ」

「……本当に成人になりたいんですか？」

その言葉、嘘じゃありませんか？」

「サーニヤっ、流石にそれは」

「分かっています。でもっ……」

「大丈夫です、私を信じてくださいいよ。」

それとも私、そんなに頼りありませんか？」

否定的な態度が気になってそう聞くと、タニアはゆつくりと首を横に振った。

「どういふことだろう？ 成人になるには凄い難関があるとか？」

その時になったら分かるかと言われていて、どんな条件があるかとか詳しく知らないんだよね。

「ねえ、カタリナ。この世界は好き？」

「ええ？」

唐突に、本当に唐突にタニアがそんなことを聞いてきた。

私が転生した異世界、リリストアルト。

地球から流れてきた流者だけで大地も生き物も全てのものが構成された、不思議な世界。不思議な生き物たちが暮らし、おかしな法則に支配された、まるで御伽噺のような場所。

学校やゲームが無かったり、自分で植物を育てないといけなかったりと前世と比べて不便なことも多い。それでも私は——

「ええ、好きです。お父さんもお母さんも、みんな大好きです。あ、勿論タニアとサーニヤのことも。」

だから、その生活を守るために立派な防人になってみせますよ」

「約束、ですよ……？」

「ええ、約束です。」

安心してください。私、カタリナ・フロムは嘘をついたことは一度もありませんから」
「それはどうだったかしらね」

くすくすとタニアが忍び笑いを零す。

決意を示すように、俺はサーニヤの手をぎゅつと握りしめた。

第九話 雑談配信と来訪者

タニア達が帰った日の昼下がりに。

昼食を食べ終えた私は、自分の部屋で配信を始めようとしていた。今回のタイトルは「大切なお知らせ」皆さんに相談したいことがあります」。

配信開始のボタンを押した後、出来るだけ真剣っぽく見えるように両肘を机に付け、口の前で腕を組む。

「こんにちはー」

「ちわーす」

「これまた典型的な釣りタイトルやなあw」

「さて、カタリナちゃんやんはゲンドウポーズを見る……」

「これは、お腹減ったとか考えてる顔ですね 間違いない」

パラパラと流れていくのは真面目とは程遠いコメントたち。

な、何か私のイメージがおバカキャラで固定されてる気がする……。昨日の百人一首で負けたのが痛かったなあ。

とまあそれはともかく。

「皆さん、こんにちは。」

本日お集まりいただいたのは、タイトルの通りリスナーの皆さんに相談したいことがあるからです。とても大切な相談ですので、心して聞いてくださいね」

【りょーかい】

【ワクワク】

【ドキドキ】

「議題はそうーお母さんへの誕生日プレゼントをどうするか、です。」

来月に迫ったお母さんの誕生日。皆さんには私と一緒に何を贈るか考えてほしいですよ」

【はい、終了！ 解散〜】

【しょーもねえww】

【お前らちゃんと聞いてやれよw 微笑ましいお願いじゃん】

「本当ですよね、そんなだから彼女の一人もいないんですよ？」

あ、それと××さん、昨日の配信も見ていただいてありがとうございます」

【は？】

【やめろ。その術は彼女いない歴〓年齢の俺に効く】

【てめーはおれを怒らせた】

「つてか、リスナーの名前とかちゃんと覚えてるんやね」

「覚えてますよ。空いた時間なんかによく配信を見直していますからね。どこが皆さんの受けが良かったとかは重要ですし」

それにSNSでの交流ができない以上、こうして見に来てくれる人とのつながりは大切にしていきたいかった。

まあ予想以上の反響で、全てを見切れていないのが本音なんだけどね。

上の方だと同接が5桁を超えるのザラらしいし、本当にVTubeerつてすごいなあ。

「はえー、意外と真面目なんだな」

「カタリナちゃん俺のこと覚えてる〜?」

「俺は初回から見てる古参勢や」

私の言葉に一気に加速するコメント欄。

ちらほらと流れる見覚えのある名前に反応したい気持ちになるもーぐつと我慢。多分、こういう身内ノリはほどほどにした方がいいんだよね。依怙鼻肩にも担がりかねないし。

「えと、ごめんなさい。時間が足りなくて、全部拾いあげるのには難しいです。」

ただこんな個人勢?の私を見て来てくださっている時点で、皆さんには本当に感謝し

ています」

【まあそれはそう】

【悪い、俺らも大人げなかったよな】

【真面目モードのカタリナちゃんもいいなあ（ボソツ）】

【これが今回の本題かあ……】

「あ、いえいえ。話を戻しましょうか。」

皆さんは自分の母親の誕生に何を贈っていますか？ もう贈っていない人は過去の

話でも可です」

【く、先手を打たれたw】

【俺はいつも花を買ってるなあ】

【コンビニで売ってるお菓子とか】

【俺は掃除機を買ってやったで 勿論親の金で】

【→ニートがあげられる最高のプレゼントは仕事することだぞ?】

「うーむ、やっぱり物をあげるのが多い感じですね。」

ただお母さん、食べ物以外だと喜ばないんですね。それ関連の面白いものは全部あげつくしてしまいましたし」

昔から料理が好きで、変わった食材を見ると一層目を輝かせるお母さん。

今までは魚屋さんとかに頼んで探してもらっていたけれど、今年は無理そうだとあらかじめ言われてしまっていた。

【面白い食べ物とは一体……（哲学）】

【前のジャガイモムシみたいなのやつじゃない？ 知らんけど】

【それなら手作りの何かは？ 料理はー駄目か。手編みのマフラーとか？】

【俺らのカタリナちゃんがそんなことできるとでも!?!】

【正直、イメージが全然沸かないww】

【失礼ですね、私だってお母さんの手伝いでやったことくらいありますよっ。

……全部やり直しになりましたけど】

【だめじゃん】

【いつもの】

【「急募」カタリナちゃんのできる事】

コメントに辛辣な言葉が並ぶ。

たださっきのコメントに一つ刺さるものがあった。

「料理配信という形でコメントを見ながら作るのはアリかもしれませんがね。」

あの回は結構評判良かったですし、最悪失敗しても皆さんのせいに出来ませんから」

【最初から失敗前提かいw】

【俺ら責任重大じゃん】

とこんな感じで、おぼろげな輪郭が見えてきたところで部屋の左奥——玄関の方が騒がしくなる。

【？ 誰か来た？】

【大丈夫？ 配信落とした方がいいんじゃない？】

「ちよ、ちよつとー」

お父さんたちの慌てる声。心配してくれるリスナーたち。

それらに反応する前に襖がバシンと開き、小さな女の子が勢いよく入ってくる。額に真つ赤な二つの角をはやした彼女は——

「マハタ様っ!？」

【鬼娘キターー】

【ロリっ娘キターー】

「町に行くぞつ、カタリナつ。」

地球の小童共に儂が育てた町をみせてやるのじやつ」

機嫌よく振られるモフモフとした尻尾。

ナキア村の村長——鬼とキツネの化身であるマハタ様は意気揚々と私の手を取ったのだった。

第十話 リリストアルトの住人たち

「町に行くぞつ、カタリナつ。」

地球の小童共に儂が育てた町をみせてやるのじやつ」

私の腕を掴んで町へ連れて行こうとするマハタ様。

お父さんから色々と聞いて、何をしているかは理解しているかみたい。ただ簡単に「はいそうですか」とは言えなくてー

「ちよ、ちよつとマハタ様つ。」

いったん配信を閉じさせてください。紹介するのは色々と融通が利く動画の方がいいと思います。映りたくない人とかもいるでしょうし」

【カタリナちゃん、律儀やなあ】

【まあ生配信を巡るトラブルも無視できないからねえ】

編集ができない生配信では色々な事故もありうるのだ。

そんな心配を含んだ言葉に、マハタ様がふつと頬を緩めた。

「構わんよ。町の連中には話を通しておる。」

みな雲の上の存在だと思っていた地球人の存在に興味津々で、尻込みしてるものなど

一人もおらんかったよ。

それに例え心無い言葉を浴びせられようと、あやつらはそんな小さいことを気にする玉ではないわ」

「う、うーん。それなら大丈夫、ですかね……」

からからと笑うマハタ様に、不安な気持ち薄れていく。

確かに彼らが炎上とかで苦しんでいる光景が欠片も想像できなかったしー何より、マハタ様は自分の都合のために誰かを蔑ろにするような人じゃないから。

「それで、今もそのタブレットとやらで地球と繋がっておるのか？」

「はい、その通りです。」

見てくれてる人たちをリスナー、彼らが書いた言葉をコメントと言って、こうしてコメントを通じてリスナーとやり取りができるんです」

【マハタ様ちーす】

【相変わらず、すげーグラフィック】

【モフモフモフモフ】

【何か俺らが地球人代表って感じで恥ずかしくない、これ？】

「ほお、面白い。テレビと違って双方方向の意思疎通ができるのか。」

「っつかし、流れが速すぎて全然読めんのお」

【おばあちゃんかなww】

【ロリババア（ボソツ）】

「……どうやら地球には礼儀も知らん餓鬼が蔓延っておるようじやの。

少しお灸を据えてやろうか？ いやなに、少しばかりちくつとするだけじや。死にはせん」

「ま、マハタ様つ。ちよつと待つてください。

今のはただの冗談ですから。そうですね、皆さん？」

【ひえっ、凄いい殺気】

【まさかの任侠キャラ!?!】

【モフモフモフモフ】

【むしろお仕置きとか俺らにとつては、褒美なんだが?】

【本気で死ぬぞww】

あらぬコメントを見て、腰に差した刀を抜こうとしたマハタ様を必死で止める。

何かマハタ様なら、時空を超えた攻撃とかしても不思議じゃないんだよなあ。本当にやめてほしい。

リスナーのみんなも危険を察したのか、大人しいコメントを……

うん、一度くらい痛い目を見た方がいいかもね（辛辣）。

「つて、こんなことをしている場合ではなかった。

マルク、ちよいとお主の娘を借りていくぞ?」

「どうぞどうぞ」

「へっ?」

お父さんの適当な返事と同時にぐつと体が引つ張られ、マハタ様に抱きかかえられる。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。

ちよ、ちよつと流石にこれは恥ずかしいんですけど!?

そう叫ぶ間もなく、私の体は一気に急加速してー

【飛んだあああ!!!】

【すげーすげー!!!】

【何かここに来て初めてファンタジーっぽいことしてるなあ】

【最初にあつたやん】

【あ、あれは何か遠くでうのようによしてるだけだったから……】

びゅうと体を撫でる豪風。はるか下に広がる森と私たちの家。

気付けばー私は空を飛んでいた。

【うへ?】

「ほれ、こつちの方が早いであろう?」

下手人のマハタ様が自慢げに口角を上げる。

確かに私たちは長い滞空時間を経て、ゆつくりとナキア村の中心へと向かっているようだった。流石はマハタ様、とんでもない身体能力だ。

と、そうだ。

「ここが私たちの世界、リリストアルトです。

皆さんどうぞご覧ください。素敵な世界でしょう?」

タブレットを動かし、眼前に広がる光景を映していく。

せつかくならこの空中浮遊を上手く活用しないと。

「おー、一面の森　こんな辺境に住んでたんか」

「すっげー遠くまで見えるな」

「何かめちやくちや広くね?　俺の気のせい?」

「リリストアルトは地球の何千倍は広いと言われておるからの。

まだ流者の誰も、その全貌を理解できてはおらん。太古の昔に新しい大陸が毎日のように生まれておったその名残らしいのじゃ」

ちらつと視線を落としてマハタ様が説明してくれる。

「はええ、それはちよつと見てみたい」

「言い方的に最近はないのかな?　残念」

【ところでさ、新キャラのマハタ様、どう思う？】

【鬼娘×狐っ娘×のじゃロリ……間違いなく属性過多】

【それな】

【あの尻尾絶対柔らかいって もふもふしたい】

【モフモフモフモフモフモフ】

【ほら、やっぱり動物の尻尾とか生えてるんじゃないっ】

プレッシャーから解放されたのか、一気に騒がしくなるリスナーたち。あれでも押さえてたんだ。

……それとずっとモフモフ言ってる人、それは無理なんだ。マハタ様は特に厳しくて、一度無許可で触ったら本気で殺されかけたから。

「お、町が見えてきたぞ。」

カタリナ、格好よく写すのじゃぞ？」

「はい。」

マハタ様の指示通り、村人の家が偏に集まる町の方へとタブレットを向けた。

町の中央にあるのは一本の巨大な桜の木（まだ蕾の段階だ）と、その周りに設けられた広い空間、大衆広場。

次いでそこを取り囲むように昔ながらの家が雑多に立ち並び、その隙間をひよろひよ

ろとした小さな道が通っていた。

【はー大きな木やなあ】

【見る限りの木造建築……凄くノスタルジーを感じる】

【時代劇とか絵巻でしか見ないような景色だなあ。すげえ】

【ふむ、見たところ土蔵造りの家が多いようですね

是非カタリナさんにはこの世界の職人たちと話す機会を】

【お、歴史研究家さんちっす】

【ほんと何でそんな人がこんな配信見てるんだよ……】

【そりゃあ一部界限ではかなり有名になってるらしいからな

聞いた話じゃ某大手映画業界のCGチームとかも見てるみたいだぞ?】

【まじか】

そんなコメントを眺めながら、私たちは大衆広場に降り立つ。

東京ドーム一個分くらいはありそう（適当）なその場所にはすでに沢山の村人たちが集まっていた。

躊躇するように顔を見合わせた後、顔なじみの魚屋の店主が二足歩行で近づいてくる。

そうして頬に生えたひげを前足でかきながら、その可愛らしいω型の口を開けた。

「お久しぶりですよにや、カタリナの嬢ちゃん。

それが地球と繋がる道具ですかにや？」

【猫がしゃべったあああああ!!!】

【あざとい、あざといぞこやつつ】

【周りを見てみろつ、色んな動物の姿をしてるぞ つまりこれは……】

【みんな凋落させれば、モフモフできる?】

【ケモノー大歓喜!!!】

【あつ……】

【何か昇天してる奴がいるぞww】

二足歩行の猫が人間の言葉を話すファンタジーな光景に、一気に沸くコメント欄。

……常者のみんなが人気なのは嬉しいんだけど、露骨に私と対応が違うとなんかこう

釈然としないなあ。

くそ、何で私の体には何も生えていないんだつ。

第十一話 常者に関するえとせとら

「お久しぶりですにや、カタリナの嬢ちゃん。

それが地球と繋がる道具ですかにや？」

【猫がしゃべったあああああ!!!】

【あざとい、あざといぞこやつっ】

魚屋の店主、ニヤハットさんの姿に阿鼻叫喚の模様を見せるコメント欄。

一種の敗北感を覚えながらも、私はニヤハットさんにカメラを向ける。

「はい、そうですよ。」

ニヤハットさんの可愛らしい姿にみんな大喜びしてますね」

「お、私の良さが分かるとはなかなか話せる奴のようだよ。」

どれ、褒美に私の頭を撫でさせてやるのにや」

【あつあつあつ】

【悲しいことにそれは無理なんだよなあ】

【まだ説明しないから色々分かってないのかw】

【くそ、何で俺らは見ていることしかできないんだっ】

んな。犬やネズミ、ドラゴンなど様々な生き物の体をした彼らにもみくちやにされ、思わずタブレットを手放してしまう。

「にゃん、わん、チュー、ドラ……ドラ？」

いえ、モフモフに貴賤はありません。どれも最高のモフモフですね」

「ああ、耳が幸せなんじゃあ〜」

「俺たちが探し求めた桃源郷はここにあったんだな……」

人ごみに流される中、私の視界はそんな幸せそうなコメント欄を捉えた。

……うん、しばらく放置しても大丈夫かな。

「ぎやはは、そんなんじゃ、地球のみんなに笑われちゃうぜ？」

「煩いですゾウ。今に見ているがいいですゾウ」

「そこだ、させつ。運び屋の旦那っ」

「巨人VSゾウ ファイツ」

「おおー、相変わらずすげー迫力」

「これが本当の異種格闘技ですか……」

何も無い場所で相撲を始めた巨人族のララットさんとゾウ族のファンティアさん。

その周りには顔を赤らめた常者のみんなが集まって、徳利とっくり片手に思い思いの言葉をかけている。中にはベンチの上でぐうぐうと眠る姿もあり、広場全体が酒気を帯びた空気が広がっていた。

そしてそんな光景を少し離れた場所でタバレットを構えながら眺める私。

その後、地球人に自分たちの雄姿を見せてやるとかでみんな私にタバレットを預けて各々好き勝手に特技を披露し始め、ついでに当然のように酒を飲みだして——結果はこの通りの乱痴気騒ぎ。一応地球のことを口に出してはいるものの、彼らの視線はもう私を捉えていなかった。

……ほんと、常者のみんなならしいなあ。

「全く、あ奴ら困ったものじゃな。

もはやお主らのことなど眼中にないのではないか？」

どさりとマハタ様が私の横に座る。

その手には例のごとく日本酒が入った徳利。ただマハタ様に酔っている様子はない。流星は村一番の酒豪ちゃんだ。

「でも私、この光景が好きだったりします。

みんな楽しそうですから」

「ふ、違くないの」

マハタ様と二人、朗らかに笑いあう。

いつも徳利を引つ提げて、ことあるごとに酒をひっかける彼ら。

時には褒め、時には罵り合う彼らの表情に影はない。宴会が終われば以前の關係に元通り。

一人寂しく飲んでいる誰かがいたら、必ず誰かが気づいて声をかける。そこに遠慮も立場もない、誰もがただの客で、主役。

私は彼らのそんな気の良いところが好きだった。

【良い顔してるもんなあ 正直俺も混ざりたい】

【それな 会社の飲み会もこれくらいだったらいんだけど……はあ】

【あああああ 現実とのギャップで死にたくなってきた】

【そーいや何でみんな動物そっくりの見た目してるんだ？】

マハタ様みたいに色んな要素が混ざってそんなものだけど】

「我ら常者たちにとつては」混ざり」が少ない方がモテるのじやよ。

じゃから世代を重ねるごとに別種の部位は淘汰され、今のように現実とほぼ変わらぬ姿になった。ただ儂のように長寿で子供を滅多に作らぬ種族はその進化が緩やかになる、とそういう話じや」

「因みに常者には必ずベースとなる生物がいて、その同種同士で子を成すのが普通なん

です。

異種間だどうしても問題があるみたいですから」

マハタ様の言葉に付け足す。

やっぱり早く世界観をまとめた動画を作った方がいいよね。頑張ろう。

「こんな世界にも非モテ連中はいるのか……」

【世知辛い世の中よのお】

【常者つてのは色々なものが混ざっている生き物つて認識であつてる？】

「うむ。正確には稀人を除いたすべての生き物のことじゃな。大抵は地球の動植物や空想上の生物なんかベースとなつておる。

あとは人の思いより生まれたからか、大体は言葉を交わせるの」

【はー、やっぱり実在の生物だけじゃないのね】

【わざわざ稀人と区別してるのは何か意味があつたり？】

「んー、畏敬の念を込めて、という感じじゃな。

穢れに対抗するマナの力を持つておるし、何よりその体は我らが想像主たる人間と全く同じ。否が応でも惹かれてしまうものなのじゃ。

……それこそ相手の宿命を曲げかねないほどの」

ふつと視線を落とすマハタ様。

そんな彼女らしくない態度に、思わずそのしゅんとした尻尾を触ってみたくな
てー

「さて、そろそろそれも終わらせた方が良いのではないか？

カタリナもずっと気を張っておるのは疲れたであろう？」

「あ、本当ですね。もう三時半ですか」

既に三時間近く配信していたのに気付いて、手を引つ込める。

元々一時間の予定だったし、リスナーのみんなももう疲れているんじゃないかな。

「ああああ、終わらないで、せめて定時まで……」

「社会人さんはその前に仕事してもろて

というかどうかやってこの配信見てるん？」

「社用のパソコンで見てんだよ、文句あるかっ!？」

「ええー 完全にばれてるよ、それ」

「ま？ え、冗談だよな、今まで何も言われなかったぜ？」

「何も言われてないだけ定期」

「最悪に解雇されるレベル」

「え

さよなら、おまいら」

「すうーそれでは、皆さんに素敵な幻想がありますように」

【急に終わった!?!?!】

【おいこらww!】

【ごめんなさい、冗談です】

「え?」

やばい一人の人生を壊しちゃった、と急いで配信を止めようとしたその瞬間、彼?の訂正するコメントが目に入る。

さりとて、画面に映るのは「この配信は終了しました」の文字。

あーやつちやった。

しかも、みんなに何も言えてないし。

「くつく、良いようにやられておるではないか」

「ち、違うんです。今のはわざと乗ってあげたんですよ」

「まあ、そういうことにおいてやるのじゃ」

羞恥に染まる私を見て、マハタ様が機嫌よく笑う。

ま、まあ、マハタ様を喜ばせてあげられたと思えば元が取れたということ、うん……
ぼむぼむポテトさん、名前を覚えたからな。絶対許さん。

第十二話 重大な任務

「……とうとうこの日が来たわね。」

カタリナ、今年こそいけるわよね？」

朝の食卓にて、真剣な表情で聞いてくるお母さん。

私もそれにこたえるよう、ぴしりと敬礼をしてみせた。

「ええ、お母様。必ずや私めが成果を上げて見せます。」

例えこの身が朽ち果てることになろうとも、崇高なる目的のためならば惜しくはありません」

「お父さん、今の言葉は流石に看過できないんだけど……？」

「おーい？ 聞こえてる……？」

気分は、人類の生存をかけた最終作戦のメンバーに選ばれた少女。

お父さんが何か言ってる気がするけど、無視無視。流石の私も本気で言ってるわけじゃないしね。

「よろしい。ではオペレーション・イェーグル 驚。発動よ」

「はっ！」

お母さんの指示のもと、私は意気揚々とその大会に挑み――

「ぜんぜんつ、釣れませんねえ……」

【さつきからアタリ一つないなあ……】

【本当に上つてきてるの、これ？】

釣り糸がただただ流されていくのをぼーと眺めていた。

場所はナキア村から1kmほど離れたナナトの森（ナキア村の周りに広がる森のこと）の中、そこを南から東に流れるナキアナ川のほとり。

河口から数キロしか離れていないのにもかかわらず大きな岩がごろごろと転がり、まるで溪流のような光景が広がるその場所で、私は一人釣り糸を垂らしていた。

事の始まりはそう、村長たるマハタ様の口により語られた“それ”の襲来と釣り大会開催の告知だった。

海洋で成育し、産卵のためにナキアナ川を上ってくる“それ”を捕らえるため、毎年この時期はナキア村の住人総出で釣りをするのが恒例になっているのだ。しかも争いごとが好きな彼らの要望で、大会という形で。

さつき村の広場で行われた開催式なんかは本当に凄かった。

「互いに正々堂々戦うように」というマハタ様の掛け声の元、「今年こそは俺が釣り上げてやる」とか「は、お前にや無理だよ」とか煽りあつて、各々思い思いの場所へと散つていく。視線の間には確かにバチバチと火花が散つていた。

最もそれは私も同じこと。今年こそは釣りあげてみせるという熱い思いに突き動かされていた。

リスナーの前ということもあるし、何よりローめちやくちやおいしいから。

私が釣り上げて、一番おいしいあの部位を必ず手に入れてみせるつ。

「じゅるるーは、いかにいかに」

幸せな想像に思わず垂れてきた涎を袖で拭う。

これ以上リスナーの評価を落とすわけにはいかない。ナキア村を訪れてから早三日。私じゃなくてあのモフモフを映せという声が大きくなってきたのだ。

ここらへんで何とか名誉返上……あれ、名誉挽回だっけ？ まあいいや、やればできることを見せなくては。

因みに穢者が潜む可能性の高いこの森の中で私が自由に行動できているのは、三役（防人、守人、狩人）の大人たちが厳戒態勢を敷いているから。

守人がここ一体に結界な結界を張り、防人と狩人がその中を頻繁に見回っている。そ

れもこれも全ては子供たちに“それ”を釣り上げてもらうためである。

……お父さん連中まで虜にするとは、流石は海の王様。

それでこそ私のライバルに相応しいつ、と決意新たに再びエサを川に投げ入れてー

「……暇です。雑談配信でもしますか」

【飽きるのはつつや】

【まだ十分くらいしか経ってないじゃんww】

【即落ちニコマかな?】

私の言葉に、非難轟々といった様子を見せるコメント欄。

わ、分かってはいるんだけど、ここまで何も無いのはなあ。単純作業の繰り返しとか

私の一番苦手な分野なんだよね……。

はあ、もう少し頑張るかあ。

【別の釣り方を試したりしないの?】

溪流だと毛鉤けぼりとかの方が釣れそうなイメージだけど

「あー、村人のみんなは毛鉤でやってるみたいです。

ただ私、毛鉤を飛ばすのが上手くできないんですよね」

毛鉤——釣り針に動物の毛とかが付いた、虫に似せて作られた疑似餌。

それを使って魚を釣るのが毛鉤釣りなんだけど、毛鉤はエサと違ってかなり軽いから、狙ったところに投げるのが本当に難しいのだ。私なんか何度後ろの木とかにひつかったことか。

あんなものを涼しい顔で投げられるみんなは宇宙人だよ……いや本当に。

【まあ結構なコツが必要だからなあw】

【そうなん？ 普通にビュンビュン飛ばしてるから簡単だと思ってた】

【初心者は何時間も練習しないと釣りにならんよね】

【マジか……】

【じゃあ場所を変えたりとかは？ 魚影も見えないし】

「あ、そうしましょうかね。」

因みに私に釣りの知識は全然ないので、そういうことはドシドシ教えてください」

【他人任せだなあ】

【正直もので大変宜しい】

【基本的に魚は流れがない場所いるから、あそこの大きな岩とかが狙い目かなあ】

「△△さん、了解ですっ」

と、ラジコンよろしくリスナーの指示通りのスポットに移動して再開しようとしたと

ころでー

「まーた、変なことやってんのか、カタリナは」

懐かしい声に呼び止められる。

この声は、と嬉しき半分不安半分くらいで振り向く。

「よっ、久しぶりだな」

【正統派イケメンキターー!!!】

【十代後半くらい？ いやあ、ちよつときつそうな感じがいいねえ】

【乙女ゲームから飛び出してきたんかってくらい整ってるなw】

【この気安い感じ 間違いなく遊び慣れていやがる（偏見）】

【見知らぬイケメンに快樂に落とされるカタリナちゃん……それはそれでアリやな】

予想通りそこには最後の幼馴染、狩人のシルビオ・グラントが立っていた。

しかも初めての男キャラの登場なのに、予想したような炎上の香りは一切ない。むしろ喜んでいるリスナーすらいそいだ。

……おかしい、私のガチ恋勢はどこへ？

第十三話 男友達と姑息な手

シルビオ・グラント。

狩人を司るグラント家の一人息子にして、私の二歳上の幼馴染。

見た目はちよびりワイルドな爽やか系イケメンって感じで、赤い髪と真紅の瞳が良く似合っていた。

しかもそれでいて性格も良いんだから……ほんと、悲しくなるよね。前世の世界だったら、多分接点すらなかったんじゃないかな。

ただあくまでそれは私目線の話なわけで――

「なーんか、納得いきませんか。」

私みたいな美少女に男の友達がいようものなら即炎上、とかが普通なんじゃないですか？」

リスナーにシルビオの紹介を終えた後、私はそんな疑問を投げかけていた。

配信者、特に女性V T u b e rには熱狂的なファン（ガチ恋勢というらしい）がいて、少しでも異性と関わると炎上してしまう、なんて話をよく見かけたのだ。

【否定しきれないのがこの界限の悲しきところよなあ】

【まあ正直な話、カタリナちゃんは異性って感じがしないんだよなあ

むしろ気の良い女友達と馬鹿やってるみたいなき感じ】

【わかるわw ……女友達とか一人もいないけど】

【やめろ……まじでやめろ】

ガチ恋の話から発展して、なかなか鋭いツツコミが入る。可哀そうなコメントも……うん、気持ちはわかる。私もそうだった気がするから。

ってか、もつと女の子らしく振舞った方がいいかなあ。でも可愛いポーズをしたりするのって結構恥ずかしいんだよね……。

うーんうーんと唸っていると、隣でタブレットを見ていたシルビオがお、と嬉しそうに声を上げた。

「地球の奴らもわかってるじゃねえか。」

そうなんだよなー、カタリナは女っぽくないんだよ。昔から俺と同じで外で遊ぶのが好きだったし」

「ま、まああの時は子供でしたからね。」

今では花も恥じらう立派なレディですよ」

「へー、家事全般がダメなところは今も変わってないって聞いたんだが？」

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべるシルビオ。

くそ、なんでこんな表情でもサマになつてゐるんだ……イケメン死すべしつ。こうなつたら適当なこと言つてリスナーをドン引きさせてやる。

「なんでそんなこと知つてゐるんですかね？」

まさかストーリーカーなんですか？」

「なんで俺がお前を追いかけ回さにやらんのだ。

お袋たち経由でお前の近況が流れてくるんだよ。よく二人で話しているみたいだし、俺とお前をくつつけたいんじゃないやねえかな」

「うわ、一瞬想像しちゃつたじゃないですか。

本当にやめてください、気持ち悪いです」

「完全に同意だな。俺もこんな女つ気のない奴は御免だ」

「『悲報』カタリナちゃん、脈なし」

「どうなんこれ？ どつちかが本音を隠してる可能性も微レ存？ 教えてえろい人」

「……これはなしよりありですね 間違いない」

【情報が足りなくてまだ判断つかんだろw】

互いのお母さんのお節介に、二人したため息をついた。

あの人たち私がシルビオのことを好きだと勘違いしてる節があるからなあ。私の中のシルビオは良いお兄ちゃんつて感じで、恋愛感情は全くこれっぽっちもない。

……いや、本当に。異性間の友情は存在するのだ、特に私みたいなやつにはつ。まあいずれ起こる代替わりに備えたい気持ちは分かるけど……あ、でもそっか。

「どうしたんだ、カタリナ？ そんな鳩が豆鉄砲を食ったような顔して」

「いえ、そうなったらシルビオは残念姉妹のどちらかと結婚するのかなー、と思っただけです」

穢れに対抗するには稀人のマナの力が必要不可欠だから、稀人の血は残していかなきゃいけない。

ただ稀人同士でしか子供を作れないし、新しい稀人が流れてくるとも限らない。

そうなるとシルビオは私たちの中の誰かと結婚する必要があるわけでーあ、あの二人の仲を引き離すのは大変そうだなあ。

「あ、あー。それは大丈夫だと思っぜ。」

三役を守るための救済措置が色々とあるからな。例えば別の村や国から婿や養子として来るなんてことも昔はあったらしい」

「あ、そうなんです。知らなかったです」

シルビオの口から衝撃の事実が語られる。

いや、そもそも三役の担うのがそれぞれ一家だけっていう時点で、回していくのは無理があるのか。考えてみれば当たり前のことだよ。

……。
ってか待って。それなら私の百合ハーレム計画にもワンチャンあるってことじゃ

「ふっふっふ」

「カタリナちゃんが、笑ってる？」

「それってシルビオが私以外の誰かと結婚しなくていいのが嬉しいってコト!？」

「お、まさかのフラグが立ったか？」

あらぬ勘違いを始めるリスナーの諸君。

こ、この話はやめよう。何を言っても照れ隠しにしか見えない気がする。

「そうだ。『やつ』ーウマサケを捕まえるために、手を組みませんか？」

シルビオが捕獲して……そうですね、私は応援でもしてあげます」

シルビオは去年の釣り大会の覇者。きつと何か良い情報を知っているはずだ。

私の手札が全くもって役に立たないのは気になるけど、そこは私の高尚な交渉術で何とかしてみせるっ。

「ただ自分が楽しみたいだけじゃねえのか、それ？」

まあでもいいぜ。どっちにしろやろうと思っていたからな」

「? どういうことですか？」

シルビオがにんまりと口角を上げる。

その右腕に急速にマナが集まり、赤黒い球体が生み出されていく。バチバチと赤い火花が迸るそれは、衝撃を与えるのに特化した術。

「ま、まさかー」

「そのまさかだよっ」

シルビオがエネルギーを持ったそれを川に打ち込む。

ざぱーん、と天高く上る水しぶき。

降り注ぐ水と共に、モーモーと鳴きながら落ちてくる無数の大きな黒い影。

ほぼ同時、草陰から見覚えのある影たちが飛び出してくる。

「ほれ、お前ら行くのじゃっ」

「魚屋として負けるわけにはいかないのじゃっ」

「任せろチューっ」

「どいてくださいっお姉さまにアレを食べさせてあげるんですっ」

「じゅるるるるるるるるるる」

マハタ様、ニヤハットさん、残念姉妹、えとせとら。

決起集会にいたほぼ全員が狂気を感じさせるほど必死な形相で、打ち上げられたウマサケー馬の体に魚のひれと尾っぽが付いた化け物へと突進していく。

か、考えることはみんな同じってわけですか……。

【あの、、、馬です】

【ウマサケってウマってそっちかよwww】

【ってか、みんなシルビオの後をつけてきたんかw】

【正々堂々とは一体……?】

「ちよつと私も、混ぜて下さいよっ」

そんな完全同意なコメントを横目に、お母さんとの約束を果たすため――何よりおいしい晩御飯のため、私はウマサケ争奪戦へと足を踏み入れた。

第十四話 カタリナの戦略

モーーーーツ

「な、何て力なのになっ」

「くう、馬のくせになかなかやるチューっ」

シルビオの手によって数十体のウマサケが打ち上げられた川辺。

そこは既にナキア村の住人と体高2mはありそうな巨大な馬が入り乱れる戦場へと姿を変えていた。

さりとて住人達の中でウマサケに対抗できているのは稀。体を抑えようにも簡単に振り切られ、ほとんどの攻撃は奴らの強靱な肉体に跳ね返される状態だった。

【ウマサケ普通に強いのかw】

【何か大きな大人に小さい子供がじゃれついてるみたいで癒されるなあ】

【いや普通に痛そうなんだけど!?!】

「あ、それは大丈夫です。」

常者のみんなは回復が早いので、どんな怪我や病気でもすぐに治りますから」

【ほっ】

【よかったよかった】

【これは動物愛護団体もニツコリ】

【ニツコリ、なのかなあ?】

私の言葉に安心した様子を見せるコメント欄。

私も最初は驚いたなあ。みんな凄い簡単に簡単に危険なことするから。

とまあそれはともかく、常者の中で目立つのは身体的に恵まれた種族だ。

「ぎやはつ。よいねえ、力比べってわけかっ」

「今度は負けませんゾウっ」

先日の相撲では勝負が付かなかった巨人族のララットさんとゾウ族のファンティアさんの二人が、競うあうように二体のウマサケと肉弾戦を繰り広げたりー

「かつか、そんなもんか、ウマサケ?」

もつと我を楽しませてみよっ」

鬼狐族のマハタ様が巨悪な笑みで、ウマサケ相手に無双したりしていた。強烈なパンチで一体を吹き飛ばした次の瞬間には別のウマサケ（しかも既に倒れ伏してる）の上に乗っているという感じで、もはや私には何が起こっているのか理解不能だった。

【何か三人とも楽しそうやなあ】

【マハタ様まさかの戦闘狂キャラかw】

【何かマハタ様だけ世界観違わない？】

マハタ様の多分意外な一面に賑わいを見せるコメント欄。

因みに主催者側のはずのマハタ様がこうしてみんなと混じって遊ぶのはいつもの事である。

戦闘が好きっていうより、お祭りごとが好きだからなあ。

そしてさつきから草陰に隠れる私が何をしているのかと言えばーそう、ウマサケを掠め取る機会をじっと待っているのだ。ウマサケの所有権はその命を奪った人間に与えられる、つまり私は最後の止めをさえ刺せばいい。

他人に戦闘を押し付けて自分はその恩恵だけ受ける、完全なる漁夫の利作戦である。

……し、仕方ないじゃん。人間とほぼ変わらない戦闘能力の私が常者のみんなと一緒に戦ったら本当に死んじゃうし。

かっこいいところを見せようとしたら頭脳戦くわんせんしかないっ。

今の狙いは、目の前で一体のウマサケと格闘する残念姉妹だった。

「お姉さま、次はお願いますっ」

「分かったわ。任せて」

ウマサケの周りに強固な結界を張って、その動きを封じる二人。片方が結界を張っている間はもう片方が休み、結界の耐久が切れてきた頃に役割を交換する、といった感じ

で頑張ってるものの、互いに決定打を与えられずにいた。

このままいけばどこかで境界を切つて止めを刺す必要があるはずだ。つまり、その時が私の好機。

ただ問題は――

「……シルビオは何でこんなところにいるんですか？」

隣でにやにやと笑うシルビオに小さな声で問いかける。

この騒動を引き起こした張本人たるシルビオは、あの後何故かうマサケと戦おうとせずただただ私の後ろをついてくる完全なるストーカーと化していた。

狩人の術を使えば簡単にうマサケを倒せるであろうに、だ。

【そりゃあ、あれだろ。恋さ】

目に入る一つのコメント。流石にそれはないと思うけどなあ。
というか私が嫌だし。

「親父に今年はうマサケを譲つてあげるよう言われてるんだよ。

それにカタリナの近くにいたら面白いものが見れそうだしな」

「なんだ、嫌みですか。しっし。帰ってくださいいつ」

「辛辣だなあ。去年もちゃんと配つてあげたじゃねえか」

「一部だけ、でしょう？」

私はウマサケのレバーを食べたいんですよ」

ほつとを胸をなでおろして、シルビオを睨む。

コツを見つけたとか言つて（多分さつき見せたあれ）、去年三十三体ものウマサケを捕まえてみせたシルビオ。

確かにその後おすそ分けという形で結構な量が私達にも配られたけど、それはあくまで一部の話。「二番おいしい」と謳われる希少部位のレバーのほとんどはシルビオたちが持つていってしまったのだ。

そのせいで仁義なきじゃんけん大会が始まり、最初に負けた私はついに一口も食べる事すら叶わなかった。しかも私と同じで一度もレバーを食べたことがなかったお母さんは、ちやつかり最後まで生き残つて一人で味わっちゃったし。これで我が家のレバー童貞は私とお父さんだけ。

今度こそ私がウマサケを倒して、お父さんにおいしいレバーを食べさせてあげるんだっ（建前）。

……そういえばあの時お母さんの微妙そうな表情は何だったんだろう？

あまりのおいしさに表情筋がバグったのかな？

「あー、それな。実はー」

「ちよつと、そこのお似合いな二人さん。」

見てるだけじゃないで私たちを助けてくださいよ」

シルビオが何かを言おうとした瞬間、サーニヤが「お似合い」の部分強調してそんな提案をしてくる。

「ばれちゃあ、仕方ないか。」

「そうですね。」

私にレバーをくれるなら手伝ってあげないこともないですよ？」

「何言ってるのよ？」

「ここまで頑張ったのは私達なんだからレバーは私のもものよ」

「いい、いいでしょう。それじゃあ6:2:2でどうですか？」

「勿論タニア達が6です」

「駄目よ。8:1:1、それ以上は譲れないわ」

「さ、流石にそれはー」

「あ、俺はレバーはいらなから好きに分けてくれよ。」

「その分他の部位は多く貰ってもいいか？」

「私は、構いませんよ」

シルビオの提案に、タニアとサーニヤ、私の三人で頷きあう。

流石は性格イケメン、良いところあるじゃん。

「つてことは8:2ですか。」

わかりました。それで手を打ちましょう」

私の提案に、当然とでも言うように眉を上げるサーニヤ。よかった、これで何も得られないっていう最悪の状況を避けられそうだ。

とまあ、こんな感じで私たちは共同戦線を張ることになってー

「はいよっ」

「ワンパンじゃんww」

「つええええええ」

「黒い柱による攻撃……某忍者漫画の敵さんかな？」

「??」「痛みを知れ」

一撃でウマサケを倒したシルビオに全てを持っていかれたのだった。

……私も早く成人になりたいなあ。

「それでは、釣り大会終了を祝して、乾杯なのじゃっ」

数多の提灯が瞬く大衆広場。その真ん中でマハタ様が真っ赤な盃を掲げる。

同時にあちらこちらから陶器がぶつかる音が響き、わいわいと一気に騒がしくなる。

夜空の元、私達は閉会式という名の宴会を開いていた。

ベンチに座り、お酒と馬刺し片手に思い思いに語り合うみんな。お勤めの時間も終わったからお父さんたち大人組の姿もあるし、ナキア村のほぼ全員が集合していそうな感じだった。十体以上倒したマハタ様がそれをみんなに配ると言ったのも大きいのだろう。

そんな騒がしい広場をタブレットを持って歩いていく。

生配信は流石に長時間すぎるからやっていない。今は動画用の素材を取っているとこらだった。

やっぱりお酒を飲んでいるときの顔は良いなあ、とみんなの姿をパシャパシャりと写真や動画に収めていく。

肩を抱き合って健闘を称えあうララットさんとファンティアさん。口の中にとんでもない量を詰め込むタニアとそれを見て小さくため息をつくサーニャ。

その顔に後悔や恨みなんて昏い感情は浮かんでない。誰もが楽しそうに食事を楽しんでいた。

「おーい、カタリナちゃん、タニアちゃん、サーニャちゃん。

君たちの分が切れたよ〜」

「今いきまーす」

素材も揃ってきたところで、私たちを呼ぶ声。急いでウマサケを切ってくれていた鎌鼬族かまいたちの一人、ミミコロさんの元へ向かう。

「それじゃあどうぞ、これがウマサケのレバーだよ」

「あ、ありがとうございます。おお、これがですかっ」

「どうやら私が一番乗りらしい。」

ミミコロさんから赤黒い肉が乗せられた皿を受け取って、ようやく私もレバー処女卒業かあと感慨深い気持ちになりながら口に運ぶ。

ぱくり。

おお、こりこりとした食感に独特な苦みが絡み合って……独特な苦みが……苦みが……え、苦過ぎて他の味がしないよ？ しかも妙に内臓臭い。

「こ、こんなのが人気なの？ 他の部位の方が千倍くらいおいしいんだけど？」

そんな心情察したのか、ミミコロさんが私の耳に口を近づけこっそりと話し始めた。

「ははっ、どうだいカタリナちゃん。おいしくないだろ？」

「あ、ですよ。よかったです、私の味覚がおかしいわけじゃなくて。」

「でもそれならどうして……？」

「それがね、よく分からないんだよ。」

昔の人はこれがおいしいと感じたのか、あるいは地球の話と混ぜたのか。

ともかく僕らが生まれた時にはそんな噂が流れていて、カタリナちゃんみたいな被害者を沢山生み出してきた。

ただ面白いのが、その誰もが口を大きくしてまずいなんて言わないことなんだ。むしろ一番おいしいなんて言ったりする。

カタリナちゃんは どうしてだ と思う？」

「どうして……？」

「ま、まさかー」

「ミミコロさんに、先のトレードを思い出す。」

「ーあ、俺はレバーはいらないから好きに分けてくれよ。」

「その分他の部位は多く貰ってもいいか？」

「そう言って一番得した人間がいなかったっけ？」

「シルビオお、よくも騙しやがりましたねっ」

「くそ、これならレバーなんかにこだわらなかつた方がよかつたんじゃない。」

「……この恨みどこで晴らしてくれよう。」

「あら、カタリナ。どうしたの？ 変な顔して」

「カタリナが変な顔はいつもの事ですよ、お姉さま」

「私のはらわたが煮えくり返る中、タニアとサーニヤがやってくる。」

二人を標的にする？

いや、今は手ぶらから無理だ。きつと二人ともすぐに食べて真実を知ってしまう。だったら、と私は満面な笑みを浮かべた。

「ええ、いつも頑張っているお父さんにあげようと思ひまして」

「……偉いわね、カタリナ。見直したわ」

「お姉さまもーいえ何でもありません」

と、3秒後には意味がひっくり返る言葉を残して、私は標的お父さんの元へと向かったのだ。た。

第十五話 この世界の家族

「……うーん、どうしますかね、これ」

釣り大会の翌日の昼。紹介動画の制作に取り掛かり始めた私は、さっそく大きな壁にぶち当たっていた。

目の前に広がるのは、ノートに書かれたぐにやぐにやの何か。

カタリナ・フロム作 テーマ「人間」

歪あんだ円たの下から立派な四かつの細らい触だ手が生えていて……うん、我ながら酷い。

流石にこれを動画で使うのはなしだ。

動画に必要な音楽や字幕、テロップなどは編集ソフトに最初から入っていたやつで何とかなりそうだった。ただ問題は、良い感じのイラストがなかったこと。

しかも謎の制約のせいで、フリー素材が載ったサイトなどからダウンロードすることもできない。

それならと自分で書いてみたものの、結果はご覧のあり様。

まあ駄目なもんは仕方ない。誰か絵がうまい人を知らない？ とお母さんに聞いてみたら――

「あら、それならお父さんが得意よ」
意外な人物を挙げられたのだった。

「お、おお、凄い。ちゃんと人間に見えるっ」

昼食を片付けた後の食卓にて。

お父さんが書いたそれを見て、私は思わず声を上げた。

大きな頭と寸胴な体、そしてそこから生える小さな手足。

デフォルメという難しい分野なはずなのに全体のバランスも崩壊していない。誰が見ようと確かにこれは人間だった。

しかも柔らかいタッチだから、どこか可愛らしい感じもする。

まさかお父さんにこんな特技があったなんて。

心の中の好感度メーターがピピッと上がる。流星に昨日、お父さんが持っていた分全部と交換したのはやりすぎだったかな。

「何だか懐かしいね。」

昔はよくこうして母さんの仕事を手伝ってあげていたんだよ。あの頃はまだ付き

合ってすらいなかったっけ」

「もう、あなただったら。」

そんな過去の話、今更しくたつていいじゃない」

「いたつ、いた、いや本当に痛いよ?」

満更でもなさそうな顔でお父さんの肩を叩くお母さんと、その馬鹿力に多分本気で痛がつているお父さん。

そんな良い雰囲気気恥ずかしさを覚えながら、私は二人に話しかける。それはさっきのやり取りで気になった事。

「ねえ、二人はどうやって知り合ったの?」

なれそめとか色々教えてほしいなあ」

「……」

私の質問に、何とも言えない表情で黙り込むお父さんとお母さん。

あ、あれもしかして聞いちゃいけないかった? 子どもには言えないような後ろ暗い過去があるとか?」

「いやっ言いたくなかったら言わなくていいよ。」

別にどうしても知りたいわけじゃないし」

「……いや、驚いただけだよ。」

お父さんたちの過去なんてカタリナは興味ないと思つていたからね」

「あ、そうだよね。」

最近ちよつと色々あつてね、気になったんだ」

お父さんの言う通り、今までは積極的に聞いたりしなかった。親のそういう話を聞くのは何だか居心地が悪かつたし、何より二人には私には入れない特別な絆がある気がしたから。

ただシルビオと結婚とかについての話をした時、気づいたのだ。そういえば私、お父さんとお母さんのことを何も知らないな、と。

私知っているのは、私が子供の頃から防人として一緒に生きていることくらい。それまでどんな人生を送ってきたのか、とかどうして結婚したのかとかも全然知らない。

だから……知りたくなつたのだ。

この世界の家族、お父さんとお母さんについて。

「カタリナは知つてるよね？」

この国の外には沢山の稀人たちが集まつた場所があつて、そこでは稀人は三役以外の職に就いているって」

「うん、確か西の方に大きな国があるんだよね」

優しい笑みで話し始めたお父さんの言葉に頷く。

広大な大地を持ち、何千もの国が乱立するリリストアルト。その中には口口の国やナキア村とは比べ物にならないほど発展した地域があつて、何千何万という稀人が暮らしている、と聞いたことがあつた。(因みにナキア村の稀人はフロム家3人、ロツテン家4人、グラント家3人の計10人だけ)

「私たちはそこに生まれただよ。しかもかなり身分が違ふ家のもとに、ね。」

それで些細な切つ掛けから惹かれあつた私たちは、何とか一緒になろうとして――結局どうしようもなく、ここに逃げてきたんだ」

「おお、まさかの駆け落ちっ。」

お母さんのどこがそんなに好きだったの？」

「そうだなあ。何でも引つ張つてくれるような気の強さ、かなあ。」

お父さんはどうしても考えこんじやうからね、元気がありすぎるくらいが丁度良かったんだよ」

「ほほう、お母さんは？」

「そう、ねえ。賢いところかしら。」

私じゃ気付かないこととかを色々教えてくれたから」

仄かに頬を染めて、互いの好きな部分を語り合う二人。

そんな幸せな一ページを見せつけられて、自然と言葉が零れた。

「じゃあ私は、お母さんの気の強さとお父さんの賢さを受け継いでいるんだね」
「っ」

誰が息の飲む音。見れば、お母さんが何かを耐えるように顔をくしゃくしゃにしてー

へ??? 泣いてる？

「な、何でもないので。昔を思い出しちゃって、ね。

少し席を外してもいいかしら？」

「う、うん……」

私の返事を待たずして居間を出て、洗面台の方へ行ってしまうお母さん。

……そんなにつらい過去だったのかな。まあでもそりやそうか。駆け落ちするまでに嫌がらせとかもされたんだらうし。

「お父さんも行ってあげたら？」

お母さんの辛さを分かるのはお父さんだけだから」

「そ、そうだね」

ソワソワと体を揺らしていたお父さんに声をかける。

早く追いかけたかったんだらう、お父さんがパツと立ち上がってーあ、そうだ。

「ちよつと待ってお父さん」

「うん?」

振り返って不思議そうな顔をするお父さんに、私は本心を告げた。

「私、ここに生まれてよかったよ。」

お父さんとお母さんも、ナキア村のみんなも大好きだから」

何故私が二度目の人生を送っているのかは分からない。

もしかしたら本来生まれるはずだった本当のカタリナ・フロムになり替わってしまったのかもしれない。

ただそれでも私はこの世界に生を受けて、二人の娘として生きてきて幸せだった。

例え怒られようとも愛されているのは凄く感じたし、今も信じてくれているからこそ配信とかも自由にやれてる。

前の家族はそんなんじゃない。もっと息苦しい場所だった、気がする。

だから知ってほしかったのだ、私の気持ちを。

二人が駆け落ちを選んでくれたから、今の私があるんだよと。

「そうか、そう言ってくれるのは親として本当によいね。」

まあ出来ればそれを態度に表してほしいところだけど」

「残念、それとこれとは話です」

泣きそうな笑みで、そんな冗談を飛ばしてくるお父さん。

私もそれに冗談で返して、ふいと視線を外した。やっぱり恥ずかしいなあ、こういうのは。

第十六話 【VLOG】異世界リリストアルトの歩き方

「異世界系VTubeer カタリナ・フロム」

3月初旬に大手動画投稿サイトに開設され、異世界の少女が地球に向けて配信するという体で運営されるそのチャンネルは、今現在急速に大きくなっていった。

開設1週間にして、登録者数は9800人。

一度生放送が始まれば、10000人近くの視聴者が集まる。

その成功には様々な要因があったが、何よりもファンの心を惹きつけているのはライブ感だった。

精巧な3Dモデルに基づくキャラクターと世界観、そして此方の声に生き生きと反応する彼ら彼女たち。それら全てがまるで彼らが住む世界が本当に存在するかのような幻想を生み出していた。

さて、そんなチャンネルに今宵一本の動画が上がる。

タイトルは「【VLOG】異世界リリストアルトの歩き方」。9本目にして初めての限定公開である。

……。

【こんばんわー】

【お疲れさんです】

【お、珍しい。今日は動画か】

パラパラとコメントが流れ、同時接続数が3桁に乗った頃、動画は始まった。

画面に映るのは白背景に虹色で書かれた「異世界リリストアルトについて」の文字。耳に入るのは聞きなれた少女の声。

「最近の夜は少しだけ暖かくなってきましたね。」

こんばんわ。異世界の美少女、カタリナ・フロムです。

今回は特別編ということで、私たちが住む世界リリストアルトについて説明していきます
たいと思っています」

【やっぱりかあ】

【クソださフォントじゃねえかww】

【考察班の予想もあたるかね？】

【→どんな考察があるんやっけ？】

【有名なのは「死後の世界」説かな

輪廻の歯車とかもあるし、結構有力視されてるみたいよ】

【ま？ カタリナちゃんも幽霊ってこと？ それはなんかヤダだなあ。

みんなには楽しく暮らしてほしいよ】

【いや、だからそういう設定って話な

監禁説があつた某V t u b e rみたいな感じで好き勝手に考察してるのよ】

【あーね 懐かしいなあ、今はどうなつてんだろ？】

【一応ちよくちよく投稿されてはいるみたいよ】

次第に脱線し始めた中、画面は次のカットへ。

「まずは地球との関係について話しましょうか。

皆さんが住む地球と私たちが暮らす異世界、リリストアルト。

この二つの世界は確かに隣り合っています、その交流は基本的に「地球側からこちら側への輪廻の歯車を介した流入」という一点のみです。

また地球からやってくるそれらは流者と呼ばれ、リリストアルトのほぼ全てを構成しています」

白地を背景に、上下に並ぶ大きな二つの円。

その接点には歯車のイラストが描かれ、その下部から下の円中央に向けて大きな矢印

が伸びている。

二つの円には上から「地球」「リリストアルト」、歯車には「輪廻の歯車」、矢印には「流者」とそれぞれ書いてあった。

【向こうは知っていて、こっちは知らない、か。

どっかの異世界スレを思い出すなあw】

【そーいや、大陸とかも昔出来た名残だっけ？】

【次は輪廻の歯車についてですね。

地球の底、リリストアルトの天頂に浮かぶそれは、地球上のありとあらゆるものー動物や植物、そして道具に至るまでその全ての魂の輪廻転生をさせています。

あ、因みにこのイラストはお父さんに書いてもらいました」

今度は上側の円がアップに。

円の下側に書かれた歯車、その左上と右上に新たにそれぞれ5つの絵ーヒト、ネズミ、木、細菌、工具のレンヂを模した絵が描かれ、左上から歯車へ、歯車から右上へ、右上から左上へ大きな矢印が伸びていた。

左の方は目に×が描かれたヒト、右の方はヒトの赤ちゃんなどが書かれ、どうやら「死」と「生」の繰り返しを表しているようだ。

【なるほどねえ】

【可愛い絵やなあ】

【カタリナパパ、意外と有能なのかw】

【あの人なんか影が薄いんよなー】

【やめろ、薄いかいうんじゃねえ 可哀そうだろ】

【そうだぞ ハゲを馬鹿にするんじゃねえ】

【いつの間にか話がすり替わってる、妙だな】

【また髪の話してる・・・】

【ってか、道具に魂なんてあるの?】

【八百万の神とかそういう感じじゃね 知らんけど】

【あー、何か全てのものに神様が宿っている的思考だっけか】

「その過程で、特に道具においては一度真っ白な状態に戻す必要があるらしいです。

洗濯ものを洗うように漂白してーその時流れ出た汚れ、こびりついていた強い人間の思いが集約して生まれたのが流具です。

恨みつらみといった負の感情は“穢れ”として、それを引き起こした道具ー銃や刃物などの凶器へと姿を変えてやってきます。

逆に大事にされていた道具は何故かその機能が再現された状態で流れてきます。

部屋のライトや私が使っているこの配信機材なんかがそうですね」

壊れた道具の絵から小さな矢印が生まれ、歯車を通って「流者」と書かれた矢印（歯車から下へ伸びる矢印）と合流する。

小さな矢印には「流具」と書き込まれ、海岸に打ち寄せられた流具の写真が貼り付けられた。

「はー、そういう設定なのね 納得」

「いまいち穢れとかの説明もなかったからなあ」

「また流者を生み出すもう一つの要因として、沢山の人が抱いた強い思い——信仰や好奇心などがあります。

それが集まって生まれたものとその子孫たちを、稀人や常者と呼ぶそうです。

稀人と常者の違いは人間と全く同じか、そうじゃないかですね。

大地や生き物などリリストアルトを構成する多くのものが常者なんです、最近はこの二つが生まれるのも少なくなってきたみたいです」

今度は生きたヒトの絵から小さな矢印が生まれ、同じように輪廻の歯車を通って下の矢印に合流した。

その小さな矢印には「稀人・常者」と書き込まれ、ナキア村の住人たちやカタリナが微笑む写真が貼られる。

「と、このように流者には二つの成因があるわけですね。」

そしてどちらも“もの”に対する皆さんの強い感情を根源としているわけですから……
なんちゃって」

【うまい!!!】

【うまい、、、のか?】

【可愛いけりや何でもいいんだよっ】

【ええー そんなのがいるから寒いイベントが増えるんだぞ?】

【タイムスリップ茶番 くす玉の「おしまい」……う、頭がつ】

【あとは……なんでしょうね。

まあ、何かあったら生放送中に聞いてみてください。そっちの方が早いですし」

【りよ】

【色々と設定が明かされて、考察がはかどりそうですなあ】

【というか私が疲れました、これで勘弁ください。

動画編集って大変なんですね。たった数分の動画を作るだけでめちゃくちゃ時間使いました。

リスナーのためじゃなければ投げ出していますよ、ほんと」

【!?!】

【お、おう】

【急にデレるからみんな戸惑ってるじゃんw】

【まあ動画尺の十倍以上の時間がかかるなんてザラだからなあ】

【完成させるの、大事】

「つてなわけで、ここまで見ていただきありがとうございます。とうございました。」

チャンネル登録と高評価よろしくお願いします。異世界の美少女、カタリナ・フロムでした。

それでは。皆さんに素敵な幻想がありますように〜」

【乙でしたー】

【素敵な幻想がありますようにー】

【素敵な幻想がありますように】

【すてげん〜】

【つてかVLOG要素どこだよw】

最後にチャンネル主たるカタリナ・フロムが手を振る映像を残して、その動画は好評のまま幕を下ろした。

第十七話 遥かなる海を越えて

「えー、皆さん一日ぶりですね。あなたの隣の美少女、カタリナ・フロムです。

昨日のリリストアルト紹介動画は見てくれたでしょうか？ というかめちやくちや時間がかかったのでさっさと見ろ下さい」

【「こんちやー」】

【「もちのろんよ 数少ない考察勢として大変楽しませてもらいました

全然VLOGじゃなかったけど」

【「一日ぶり？」】

あれ……おかしいな、目から汗が……何か4か月くらい空いてたりしない？」

【「おい、何か精神攻撃受けてるやべー奴いるって（1回目）」】

動画を上げた翌日の昼、いつもの自室にて。

生配信開始と共に流れ始めた温かいコメントに、私はふっと頬を緩めた。

やっぱり待っていてくれる人がいるっていいなあ。

ま、そんなこと口が裂けても言わないんだけどねっ。

「さて、今回は雑談枠です。動画では使わなかった素材を見ながら、皆さんの質問や疑問

に答えていきます。

女の子の前だからって恥ずかしがらず、じゃんじゃん聞いてくださいねっ」

【りよ】

【何だか久しぶりだなあ　こういう穏やかな感じ】

【前は村人総出のわちやわちや回だったから余計にね】

【女の子（）】

【カタリナ先生質問ですっ。

地球から流れてくる流者ながれものは流具、常者、稀人に分けられてるっていう認識で大丈夫ですか？】

「お、○○君、分かっていますね。その通りです。

一応振り返っておくと、流具は実在の物、常者と稀人は空想上のものに対する強い感情——つまりをどちらも”もの”に対する思いを元にしてしているわけです。

うーん、流石は私。おあとがよろしいようで」

【……あれ、今何か言った？】

【さあ？　今丁度めっさ可愛いウ○バーの配達員の相手をしてたからな】

【おまいら渾身のボケをスルーしてやるなよw】

【知ってるか？　聞こえなかったんかね、て感じで放たれる二回目の親父ギャグほど寒

いものはないんだぜ？」

【ついでに「おあととはよろしいようで〓オチが付いた」は誤用だゾ】

かつこよく決めたつもりが、リスナーから送られてくるのは誹謗中傷の嵐。

お、おかしいなあ。私のファンのはずなのに、こんなに冷たいなんて……。可愛い女の子の話には黙ってうんうん頷くのが男として普通じゃないの？（偏見）

【流者がリリストアルトのほぼ全てを構成してることとは、逆に流者以外で出来たものも存在するの？】

「あ、そうなんですよ。」

詳しい事情とか私もよく知らないんですけど、たった一つ、この世界の海ともいえる原海だけはどうかやら最初から存在していたみたいです。

それがこの写真ですね。

因みに全ての流者は必ず一度原海に落ちてから陸地に流れ着くんですよ。私たちの防人の仕事には、「変な流具等がないか？」の検分も含まれているんです」

【はえええ なるほどね】

【綺麗な映像やなあ 地球の海よりも光沢が多い感じ？】

「ですね。」

原海は水じゃなくて謎の砂が集まって出来ているんですよ。その砂が昼は青色、夜は

黒紫色に光るので、こうしてキラキラして見えるんです。

ついですすし、このまま色々秘蔵写真を見ていきますか」

【お、いいね】

【俺、映画のエンドロールのNG映像集とか好きなんよなあ】

【分かるマン】

浜辺の写真からホームに戻り、ライブラリー内の写真を時系列に遡っていく。

釣り大会後の晚餐会、普段の町の様子、残念姉妹二人の寝間着姿など。

タブレットを手に入れてからまだ10日しか経ってないのに、随分いろんなことがあつたなあ。

どこか懐かしい気分になりながらリスナーたちと好き勝手感想言いあつてーいやがて最後、つまりは一番最初に撮った写真にたどり着いた。

そこに映るのは、ナナトの森を背に微笑むカタリナわたくしの姿。

うーん、やっぱりこう見ると私って超絶美少女だよねっ。正直、前世の俺だったら間違いないで惚れていたぜ。

「あ、そういえば結構恥ずかしかったんですよ、これ。

カメラマンのお母さんがなかなか妥協してくれなくて、何回も撮り直しを要求されて

……」

【あー、待機枠の奴か】

【なるほど だから今のカタリナちゃんとイメージが違うのね】

【あの時はすげー娘が来たと思っただのになあ】

どうしてこうなった……】

【いやでも今でも普通に可愛くないか？】

【まあ、それは……うん】

【おいやめろ 俺から女友達フィルターを取り除こうとするんじゃないやねえ】

「あれれ〜？ もしかして皆さんあれですか、ツンデレってやつですか？」

全く、今時流行りませんよ、男のツンデレなんて。

可愛いつて素直に言ってくれば私も少しは……ごめんなさい、私やつぱり女の子にしか興奮出来ないみたいです」

【うーん、この】

【これがなければなあ……】

【失望しました カタリナちゃんのファン辞めます】

まごうことない本心に、呆れた反応を見せるリスナーたち。

因みにそのアーカイブにはいつも二倍以上の低評価が付きまじったとき。

なんぞでっ!? みんな百合営業を求めてるんじゃないのっ!?

「カタリナ。絶対に私の傍を離れちゃ駄目よ。

いやっ、フリじゃなくて本当にお願いなね」

「分かつてるよー、だ」

さて、時は変わり逢魔が時も終わった頃。

私はお母さんと一緒に流具が流れ着いた海岸を歩いていった。

例えば役に立てないとしてもお父さんたちの職務に付き添うことが見習いとしての役割だ。流石の私も、自分の好奇心だけで二人には迷惑を掛けたりはしないよっ。……うん、そうなんじゃないかなー（過去の行いから目を逸らしながら）。

と、その時超絶鋭い私の瞳が沖から何かが流れてくるのを捉えた。

仄かな光を放つ丸い物体。

何かのカプセル？ ううん違う。あれはー籠に入った小さな少女だ。

「お母さんっ、海から女の子が！」

「5秒で受け止めなさいっ」

第十八話 新しい家族

「だ、大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「ええ。穢れてもないし、至って健康な稀人みたいね」

お母さんたちの浄化の力に守られながらやってきたのは、籠に収められた一人の少女だった。年は多分4歳くらいかな。あどけない寝顔がなかなか可愛らしい。

籠の中は他にも何かキーホルダーみたいな物が入っていて――

『はっはっ、お前ら刮目して見よっ。これが俺の――』
「っ」

急に何かが流れ込んでくるような感覚に襲われて、思わず頭を抑える。

な、なんだろう、今の？

少年っぽい誰かがクソ恥ずかしいことを口走っていたような……。

「あつ……大丈夫？ ここが何処かは分かるかしら？」

そんな疑問もお母さんの言葉で吹き飛んだ。

どうやらあの子が目を覚ましたみたいだ。一体どんな事情があるんだろう、と胸を弾ませながら籠の中を覗き込んで――ぱちくりと目が合った。

きらきらと輝く瑠璃色の瞳がこちらを射抜く。

「ー見つけたっ」

軽やかな声でそれだけ告げて、再び微睡の中へと戻っていく少女。

……ほ、本当に何かが始まりそうな感じじゃない、これっ!?

「ええっ、私たちが預かることになったのっ!」

浜辺から戻り、たった一人のおうち時間を悶々と過ごした後。

村長のマハタさんたちの話し合い（意味深）から帰ってきたお母さんたちが告げた衝撃的な一言に、私は素っ頓狂な声を上げた。

外用の着物を脱ぎながら、お母さんがどこか硬い表情で続ける。

「そうよ。」

稀人が現れた場合は三役の中のどこかが面倒を見ることになっているの。それで今回は私たちの番が回ってきたってわけ」

「そう、なんだ」

視界に映るのは、例の籠の中で眠る久方ぶりの少女。

このご都合主義的展開といい、さっきの“あれ”といい、間違いなく何かが起こっている、と私の第六感が告げていた。

思い出せ私っ、何か重要な伏線があったはずだっ（適當）。

……あ、そうだ。二人のなれそめについて聞いてみたあの時——

『カタリナは知ってるよね？』

この国の外には沢山の稀人たちが集まった場所があつて、そこでは稀人は三役以外の職に就いているって』

『私たちはそこに生まれただよ。しかもかなり身分が違う家のもとに、ね。』

それで些細な切っ掛けから惹かれあつた私たちは、何とか一緒になろうとして——結局どうしようもなく、ここに逃げてきたんだ』

外の世界、身分差、駆け落ち。

意味深な単語の羅列に、私の灰色の脳細胞がぎゅるぎゅると回りだすっ。

「……なるほど、謎は全て解けたよ、お父さん。」

この子は王国の姫にして私の腹違いの妹なんだよねっ。それで私たちの手を借りるために海を越えてやってきたんだよっ。

どうどう合ってる？」

未曾有の危機に襲われた王国。

その王女である彼女は出奔した前国王ちちを探すべく、たった一人で大海原に飛び込んだ。

彼女の行く手を阻むのは王国の兵士、そして過酷な自然環境。

それら全てを何とか退けた彼女は、ついに父親の元へとたどり着く。しかしそこには腹わ違いの姉の姿があつて――

いいねっ、燃えてきたっ。これからリリストアルトの命運を握る冒険が始まつたりするんだよねっ。

そう考えるとこの子も私と似ている気が、気が……うん、似てる似てる。ちゃんと目と鼻と口があるところとか、可愛いところとかっ。

私の超絶推理にお父さんたちは顔を見合わせて、楽しそうに息を噴き出した。

「さ、流石にそれは無理があるんじゃないかな。」

もしそれが真実だとしても、僕はどうやってこの子を儲けたんだい？ ここに来て十一年以上経つてるのに、どう考えても年齢が合わないよね？」

「た、確かにっ。」

それじゃあ姪っ子とか？ うーんでもそうになると繋がりとしては弱いし……あ、実は今のお父さんは世を忍ぶ仮の姿で、本当は夜な夜な向こうに戻っていたとかっ」

「……へえ？ あなたがそんなプレイボーイだったとはねえ？」

「ちよ、ちよつと母さんまで何を言ってるんだい？」

ただのカタリナの冗談じゃないか。だから、その、そんなに怖い目をしないで……」

「ふーん。でも私、あなたの財布からいけないカードが出てきたの、忘れてないわよ？」

「いつ、いやあれはその、魔が差しただけというかなんというか」

妙なプレッシャーを放つお母さんの追及から何とか逃げようとするお父さん。

それでもお父さんの顔には冷や汗すら浮かんでいて、どちらが優勢なのかは火を見るよりも明らかだった。

南無。元男として、うら若き娘として私だけはお父さんの味方をしてあげるよ。

いや浮気する気持ちとかは全然分かんないし、擁護するつもりもないんだけどね。

……やっぱり女の子を泣かせる男とか重罪確定である。イケメン死すべしつ。

「面白いね、カタリナのお母さんたちって」

「ええ、そうでしょうそうでしょう。」

私の自慢の家族ですーって、誰やつつ!？」

突然乱入した第三者の声で横を見れば、そこにはしつかり自分の足で立つ例の少女の姿があった。

「あ、起きたのね。大丈夫かしら、痛いところはない？」

「うん、二人のおかげで元気いっぱいだよっ」

「あらあら。やつぱりあの時も意識があったのね。」

それで……ここに来る前、昔のことは覚えているかしら？」

「うーん、よく分かんない」

「そう。じゃあー」

お母さんの矢継ぎ早の質問にもはきはきと答えていく少女。

ただほとんど何も覚えていないらしく、返答は「分かんない」の連続だった。ただ一つ、名前を問われた時に答えた「アネット」という単語を除いては。

うーん。記憶喪失設定とか実に怪しい。

やつぱり私が何か血筋を引いてる線もまだあると思うんだよなあ。

「うん。大体わかったわ。」

私の名前はエレヌ・フロム。これからはあなたの母親として頑張らせてもらうわ。よろしくね、アネット。

それと改めて……ようこそ、我がフロム家へ。歓迎するわ」

「はーいっ」

お母さんから差し出された手を少女、アネットが元気よく握る。

す、すごい順応力だなあ。怖いとか感じないのかな？ それともこれが稀人の特性と

か？

「僕の名前はマルク。」

お父さんって呼んでくれると嬉しいかな」

「えーと、私の名前はカタリナ。一応姉ってことになるのかな？

これからよろしくね、アネット」

「うん、わかった。お父さん、お母さん、カタリナお姉ちゃん。

不束者ですが、これからどうぞよろしくお願いします」

律儀に私たち三人と握手を交わし、頭を下げるアネット。

凄いしつかりしているなあ、とかそれ以上に胸の中に沸き上がる思いがあった。

カタリナお姉ちゃん……おねえちゃん……。

それは一人っ子には許されない甘美な蜜。原理は分からない、ただそれを聞くだけで

胸がポカポカと温かくなってーそうか。これがココロ、なんだね。

「お父さん、お母さん決めたよ。」

私ーシスコンになるっ」

私やアネットにどんな背景があろうと関係ない。

この最強無敵美少女たる私が、姉としてどんな敵からもアネットを守るのだ。

「……娘に妹を愛すると宣言されて、何て返せばいいのかしらね？」

「さ、さあ？」

微妙な空気の中、えへへとはにかむアネットが可愛かったです、まる。

第十九話 姉として

「それじゃあアネットをお願いね。

本当に頼むわよ。カタリナのせいでアネットが全然寝れなかった、なんてことがないようにね」

「だ、大丈夫。流石の私もそれくらいは弁えてるって」

「それならよし」

幾度もの念押しの後、ようやくトリピングへと帰っていくお母さん。

そ、そんなに私って信用されていないのかなあ。いやまあ正直お母さんに言われなかつたら夜更かしする気満々だったけどさ。

突然面白そうなイベントが起こるのが悪いんだよ、うん。

「えへへ、楽しみだなあ。

多分わたし、こうやって誰かと一緒に眠るのは久しぶりだから」

「……アネットは怖くないの？」

何にも覚えていないのに、突然こんなところに連れてこられて」

布団の上で上機嫌な笑顔を浮かべるアネットに至極当然な疑問を投げかける。

普通記憶喪失の状態で全然知らない人の元に引き取られたら警戒すると思う。何か裏があるんじゃないか、この人たちは何かを隠しているんじゃないかって。

それなのに彼女はすぐさま我が家に溶け込んでみせた。

何の臆面もなくお母さんをお母さんと、私をお姉ちゃんと呼んだり、心底リラックスしているような表情を見せたり……何というか物凄く違和感があるのだ。例え稀人にそういう特性があつたとしても、こんな簡単にいくものなのだろうか、と。

「うーん、よく分かんない。」

でもカタリナお姉ちゃんがいれば大丈夫。何となくそんな気がするんだ〜」

アネットが何処か恥ずかしそうに頬を染めて笑う。

私がいれば大丈夫、か。本当に、どういう事情なんだろうなあ。

どうやらおぼろげながら昔の記憶を覚えていられるらしく、時折こうして意味深な言葉を与える彼女。さりとて逆に「何となく」以上の内容も分からないようで、結局どこから来たのかもあの時の「見つけた」という言葉の真意も不明のままだった。

一応「新しい記憶を思い出したら教えてほしい」と言つてあるから、考察とかはそれ次第。

さつきはふざけちゃったけど、辛い過去があるとかじゃないといいなあ。

流石にこんな子に過酷な運命が待ち受けてるとか、考えたくない。

と、アネットの首に何かが掛けられているのが見えた。

黒い十字架の中央に髑髏っぽい赤いマークが付いたキーホルダー。彼女と一緒に籠に入っていた例のあれだ。

「それ、ネックレスにしたんですね」

「うん。なくさないようにって、お母さんが紐を付けてくれたんだ」

くるくると歳不相応な廚二アイテムを弄ぶアネット。

うーん、これは将来有望ですなーってそうじゃなくてっ。やっぱりこれには何か重大な意味があるのかなあ。

思い出すのは初遭遇の時に見せられた謎の光景。一人の少年がパソコンの前で何かをしゃべっている姿。自信はないけれど、多分あれは配信していたんだと思う。

そして何となく覚えている「配信者だった」という前世の記憶。

ー普通を考えれば、あれは前世の自分だろう。

流者は地球人の“もの”に対する強い執着で生まれる。それならアネットは「前世の私」のファンが抱く想いから生み出された、とか？

どう、なんだろう？

でもそれだけ愛されていた感覚もしないし、お母さんたちからそんな話聞いたことないんだよなあ。

うーん、前世の記憶が曖昧すぎてよく分からない。

……つて、よく考えればアネットと私の状態って凄く似てない？

アネットに、リリストアルトリでの記憶を加えたのがまんま私だ。

もしかしてアネットは何かの事情で記憶喪失になったんじゃないやなくて、そういう状態で生まれてきた？ それが稀人なの？

『稀人が現れた場合は三役の中のどこかが面倒を見ることになっているの。それで今回は私たちの番が回ってきたってわけ』

当たり前のように言った、お母さんの言葉が蘇る。

だとしたら私もアネットと同じようにしてー

ううん。そんなのどうでもいっか。

前世の自分がどうであろうと、稀人にどんな事情があろうと関係ない。

私はカタリナ・フロム。リリストアルトの防人見習いにして、お父さんのお母さんの娘だ。今はそれで十分。

くよくよ考えるのは教えてくれた後でいいしー何より私に似合わない。

今の私に出来るのは……そうだなあ。

お母さんたちがそうしてくれただよように(？)、アネットを本当の家族として迎え入れる事くらいかな。

「ほほお。そんなに大事なものは是非この妖怪カタリーナにみせておくれよ。なに悪いようにはせん。ちよおーと拝借するだけじゃよ」

「きやああつ、やめて、カタリーナ。」

これはお父様から託された大事な宝玉なのっ」

毛布を後ろに掲げて布団お化けとなった私から、アネットがきやいきやいと歓声を上げて逃げ回る。

なんというか、気分はあれだ。

休みの日に子供に構いまくってちよっぴりウザがられるお父さん。

今ならその気持ちもわかるなあ。子供がはしゃぐ姿つてめっちゃ可愛いもん……いや、ロリコン的な意味じゃなくて。

「こら、静かにしなさいっ」

「はーい」

お母さんおにほほに声に慌てて毛布をかぶる私たち。

布団の中で顔を見合わせると、どちらともなく笑いあった。

「こら、カタリナ。起きなさい」

「うーん？」

視界に差し込む白い光。

騒がしい気配に瞼を開けば、そこには眉をハの時にしてこちらを覗き込むお母さんがいた。

「あれ、もう朝？ 昨日は確か……」

寝起きの頭をのろのろと動かして、何とか記憶を手繰り寄せる。

あ後は確か布団の中でくすぐりあつたり、思い出話をしたりして……あれ、いつ寝たんだった？ それとアネットは？

「あつ、やつと起きた〜」

カタリナお姉ちゃんって変態の上にお寝坊さんなんだねっ」

「??？」

「……カタリナ。あなた、何したのよ？」

私のお腹の上で悪戯つぽく笑うアネットに、お母さんが鋭い視線を向けてくる。

い、いやいやそんな変なことをしてないはずっ。全部姉妹として健全なコミュニケーション

ションの範疇でー

「もう、早く起きてよ。」

一緒に遊ぶ時間が無くなっちゃうじゃんっ

「そ、そっか。そうだね」

全然深刻じゃなさそうな雰囲気、安堵の息を吐く。

やめてくれい、前世があるだけに本気で洒落にならなかつたってばよ。

……それにしても、子供の体力ってすごいなあ。

昨日の今日でこれかあ。私なんか体の節々が痛いのにーって、何か年寄りっぽくなかった、今のっ!?

い、いやだ、私はまだびちびちJK（死語）でいたいっ。

「よしっ。それじゃあお姉ちゃんと一緒に畑に行こうか」

「はーいっ」

澆漑としたアネットと一緒に、私は毎朝の日課へと繰り出した。

さて、今日も頑張ろうっ。

第二十話 【急展開】新しい家族ができました!

【こんちわー】

【待機〜】

【新しい家族かあ……何だろ? ママさんが妊娠したとか?】

【→普段の二人を知ってるだけに、何か妙に生々しくない それ?】

【つまり二人は夜な夜な……】

【まじでやめいw】

【どーせ、ペット紹介とかそんな感じじゃない?】

【あー、ありそう】

【不思議だよなあ、何で配信者ってペット——それも大体猫を飼い始めるんやろ?】

【そりゃ、猫の方が可愛いからだろ】

【あ?】

【は?】

【ちよつとこんなところで、仁義なき戦争を起こさないでもろて】

【わあ、面白いねっ、カタリナお姉ちゃんのリスナーたちっ】

「そ、ソウダネー」

コメント欄を流れる好き勝手な妄言を見て、嬉しそうに声を上げるアネット。

私はそれを冷や汗をかきながら眺めていた。

うう、どうしてこんなことに……。ネットの住民の言葉とか絶対に教育に悪いよねえ
(偏見)。

心の中に広がるのは焦燥と不安——そして後悔だった。

く唐突に挟まる過去回想く

事の始まりはそう。タブレットを見たアネットの「これは何？」という純粋な質問からだった。

私はそれに、何も考えずこれで動画取れることや配信をやっていることまで話してしまっ——

「わたしも、カタリナの配信に出てみたいっ」

目をキラキラと輝かせて、アネットがそう宣言したのだった。

そりゃあ自分の姉がそんな面白おかしそうなことをやっているのを聞けば、興味を惹かれるってもんだ。私の馬鹿っ。

「い、いやでもほら。」

ネットには何もしてないのに酷い言葉を投げかけてくる人が沢山いるんだよ?」

「大丈夫、そんなの見て私も、虫の羽音ぐらいにしか思わないから」

「う、うーん」

私の必死の説得も何のその、自信満々に胸を張るアネット。

「あら、いいじゃない。」

これからマハタ様も来るし、ナキア村の紹介も兼ねて一緒に撮ってみたら?」

はてにはお母さんたちがアネットの応援に回って万事休す。結局、アネットと一緒に生放送をする展開になってしまった。

く回想終了く

「そろそろ開始時間だねっ」

大丈夫かな? 一生残る傷になったりしないかな?

アネットの天真爛漫な笑顔とは対照的に、暗澹とした感情が広がっていく心。

『例え見ず知らずの誰かに貶められようと、私たちはお互いのことを思いあっている。だから大丈夫よ。』

何をそんなに心配しているかは知れないけど、カタリナは自分のやりたいようにやればいいわ』

『最悪、全てを消してここに引きこもればいいだけだしね』

同時に、お母さんたちの最初の言葉が蘇った。

……そう、だよね。

現実と違って、身バレして家に卵を投げ込まれたり無言電話を掛けられたりとかの害は起こりえないのだ。

最悪、ヤバそうな雰囲気になったらすぐに配信を閉じてしまえばいい。今の家族なら、それくらいきつと乗り越えられるはずだ。

「よし。折角なら楽しもつか、アネット。」

何があつたらお姉ちゃんやんがフォロワーするから、アネットは自由にやっていいよっ」

「うんっ。ありがとうカタリナお姉ちゃんっ。頼りにしてる」

アネットと改めて笑いあい、配信開始時間に。

場所はいつもの自室。私は手に持ったタブレットを自分の方に向け、手慣れた挨拶を始めた。

「えー、皆さんこんにちわ。異世界の美少女、カタリナ・フロムです。」

今回は我がフロム家に新しい家族が増えたので、早速紹介したいと思います。さあど

うぞっ」

【ワクワク】

【よし、犬よ来いっ】

【はあ? ここは王道の猫だろ?】

【じゃ俺はその間を取って犬と猫が融合した流者、「犬猫」だな】

【→ちよつとありそうなのやめろよww】

本当に頼むよ、みんなっ。私の天使を泣かしたら絶対に許さないからねっ。

どくどくと心臓が脈打つ中、画面の中心でアネットがぺこりと頭を下げた。

「え、と、こんにちは。カタリナお姉ちゃんの妹のアネット・フロムです。」

今日はわたしの我儘でお姉ちゃんのお邪魔させてもらいました。よければ仲良くしてくれると嬉しいですよ」

【新キャラキターー】

【かわええええええ】

【相変わらずの精度やなあ 全部で一体いくらかかってんだ、これ?】

【→考えるな あたまおかしなるで】

【年の割にしつかりとした女の子っていいよね】

いや、ロリコンじゃないけど】

【分かるマン】

「あ、あれ？ 意外とみなさん普通ですね？」

正直もつとセクハラじみた感じになると思っていました」

【俺らの信用なさすぎだろww】

【そりゃあ（前回の質問コーナーを見たら）そうよ】

【まあ3Dモデルでロリキャラはあるあるやし】

【おいこらモデルとかいうんじゃねえ】

……リリストアルトは実在するんだっ

あー、なるほど。

V t u b e r ブームと異世界設定のおかげで本物のロリっ子だとは思われてないのか。

……なんだ、これなら過度に心配する必要なんてなかったじゃん。

ほんと良かったあ。とりあえずは第一関門突破、かな。

「この12333っていうのが、今配信を見てくれる人の数なんだよね？」

「こんなに多くの人に見られると思うと結構緊張するなあ」

「それでしようそうでしょう。」

全部一から私が積み上げてきたんです。もつと褒めてくれてもいいんですよ？」

「カタリナお姉ちゃん凄いつ、可愛い、世界一つ」

【明らかに適当おべっかじゃねえかw】

【カタリナちゃんそれでええんか……?】

【……なあ、これアネットちゃんの方が（精神的に）大人なんじゃ……?】

【まっさつかー】

【「悲報」カタリナちゃん、4歳児（暫定）に「かしこさ」で負ける】

ん、んんー?

お姉ちゃんとして威厳を高めようと思つたら、何か私のリスナーたちの好感度が下がってる……?」

「みなさん、流石に言いすぎですよつ」

例えカタリナお姉ちゃんが布団の中でわたしの体にいたずらするのが好きな変態さんだとしても、私の大切なお姉ちゃんなんですからつ」

「ちよつとつ!? 流石にその言い方には語弊があるよねつ!」

◇布団の中でいたずら その話k w s k つ」

【姉妹百合……大好物です】

【とうとうここにキマシタワーがつ!?!】

アネットの大暴投に騒然とするコメント欄。

や、やばい何とか訂正しないと。そう思ったのもつかの間、障子をあけて一人の人物が部屋の中に入ってきた。

「ほお、相変わらず面白いことをやってるではないか。

やはり早めに来たのは正解じゃったな」

狐の尻尾を上機嫌に振る彼女の名前はマハタ様。

ナキア村の村長にして、今回アネットの町案内をしてくれることになった御方である。因みに頭には鬼の角が生えていたりします。

「え、と昨日からカタリナお姉ちゃんの家でお世話になっていきます、アネットです。

ご挨拶が遅れて申し訳ありません。不束者ではございますが、どうぞよろしくお願ひします」

「よいよい、そんな畏まらんで。

儂としてはお主がここで楽しく過ごしてくればそれで十分じゃ」

アネットとリスナーたちに向けたそんな説明を終えると、彼女はもの凄く丁寧な仕草で頭を下げた。

……あ、あれ、アネットって4歳くらいだよな？ 何かいまにも菓子折りでも渡しそ
うな雰囲気なんだけど？

頭の中に沸き上がる困惑。

さりとして流石に子供の好奇心には勝てなかったのか、耐え切れないという感じでアネットはマハタ様の尻尾を掴んだ。

「あつ」

次の光景を想像して、思わず目を瞑る。

マハタ様はいきなり尻尾を触る無礼者には厳しいのだ。小さい頃よくモフモフしようとして、吹っ飛ばされたからなあ（痛みは全然なかった）。

気持ちは分かるぜ、妹よ。

「わああああ、すごいモフモフっ」

「そうであろっ？」

しかし、そこにいたのはアネットに撫でられながら、こそばゆそうに目を細めるマハタ様の姿。

「な、何で怒らないですかっ？」

私の時は思いっきり投げ飛ばしたじゃないですかっ」

「流石の儂も子供の戯事にいちいち腹を立てたりはせんよ。

お主が特別なんじや。ほれ、あの時は何か邪なもの感じたから……」

「ええっ!?!」

【「悲報」カタリナちゃん、ちっちゃい頃から“あれ”だった】

【解釈一致でございます】

【つまりカタリナちゃんもモフモフとロリっ妹に興奮する変態さん、と
以上、おあとがよろしいようで】

第二十一話 初デート

「では僕は先に戻るぞ。

町の者にはすでに話を通しておるから、好きに見せてやるといいのじゃ」

「はい、ありがとうございます」

ナキア村中央、大衆広場の端。

いつもの空中跳躍^あでここまで送ってくれたマハタ様に、アネットと二人で頭を下げる。それに彼女はひらひらと手を振って、軽い足取りで去っていった。

私達に足代わりに使われたのに、特に気にした様子もない。

……ほんと、善い人だよなあ。

「えへへ、カタリナお姉ちゃんとデートだね。

楽しみだなあ、ここにはどんな場所があるんだろう？」

「でっ……わ、私に任せてください。」

アネットにぴったりの最高ののでえ、デートプランを遂行して見せましょう」

「わあーいっ」

「な、何かアネットちゃんのカタリナちゃんに対する好感度高くない？」

「昨日預かったばっかりなんだよね？」

【そりゃあ、あれよ 夜のスキンシップ（意味深）のおかげよ】

【たった一夜で仲良くなれるなんて、一体どんなにすごいスキンシップをしたんやろなあ？（すつとぼけ）】

満面の笑みを浮かべるアネットの気押しされ、つい童貞っぽい反応をしてしまう私。

い、いやだってデートだよ？ 男と女が休日に出かける、創作物にしか存在しないあれだよ？

こ、これはもしや私が攻略対象になつてたりする？ それとも女の子同士だとこれくらい普通に言うのかな？

前世だと男友達しかいなかった気がするし、残念姉妹は残念だし……経験が無さ過ぎて分かんないよお。助けてエロい人っ。

「どうしたの？ お腹痛い？ さすさすする？」

「い、いえ何でもありません。それじゃあ行きましようか。」

……アネット。どこか気になるところはありますか？

「うーんとねえ……」

【早速相手任せじゃねえかww】

【最高のデートプランとは一体……？】

「し、仕方ないじゃないですか。」

私もここに詳しいわけじゃないですからっ」

きよろきよろと忙しなく視線を動かすアネットの傍ら、タブレットに向けて囁き声で事情を話す。

まだ私が見習いで自由に歩けけない影響で、買い出しとかはすべてお母さんたちの役割だったのだ。

私がおここに来るのは何かお祭りごとがあつたときくらい。

一応ほとんどの住民とは顔見知りではあるものの、どこに何があるかはさっぱり分らない、というのが実情だった。

うーん、こんなことならマハタ様とかに頼み込むべきだったかなあ。

でも自分の仕事があるだろうし……。

「あ、それじゃああの大きな木は？ 何の木なの？」

「あー、それ俺も気になつてたわ」

【最初からずつとあつたもんな】

アネットが指さしたのは、私たちがいる大衆広場の中央に佇む一本の木。まだ蕾の段階のそのの周りにはぼつりぼつりと僅かな人影あるだけだった。

そういうえびリスナーのみんなにも説明してなかつたんだっけ？

「あれは桜の木、ナキア村のシンボルのな奴です。

毎年満開になったら、ここに集まって宴会をするんですよ」

「え、えんかいっ！」

「ねえねえ、今年はいつやるのっ!?! 私も参加できるっ!?!」

「勿論ですよ。当然お酒は飲めませんけどね。」

「この感じからして、あと三週間、多分3月下旬には満開になっていきますかね」

「ほーん、そーいや向こうの日時とかもこつちと連動してるんやっけ?」

「→だね 地球でも似たような予想日になってる」

「つまり今年はカタリナちゃんとお花見できるってコトっ!?!」

「ええ、どんな形かはまだ分かりませんが、当日は配信する予定です。」

色々と面白い催しがあったりするので、みなさん楽しみにしていてくださいね」

「いいねっ」

「りよ」

「よっしや これです仕事も頑張れそうやわ」

「うう、お花見シーズンに何の予定がなかった俺が……ついにつ!」

「チキンとケーキを用意して待ってるねっ!」

「→チキン冷めちゃった」

【おまいら、周りみんなでわいわい盛り上がっている中、一人でスマホ見ながら黙々と食べる野郎の姿を想像してみろ】

【まじでやめろ】

いつぞやの大事件を思い出したのか、阿鼻叫喚状態に陥るコメント欄。

さ、流石に私もサイレントで配信キャンセルはしないんじゃないかなあ……？

いやでも突然絶世の美女に誘われたらそつちを優先させる可能性が微レ存？（最低）
「むー。なんか変なことを考えてる気がする。

ねえねえ、お母さんに渡されたメモは使わないの？

確か大体の店の場所とか、買わなきゃいけないものが書かれていたよね？」

「あつ……よ、よく思い出しましたね。

今から使おうと思ってたんです。ほ、本当ですよ？」

【明らかに忘れてた様子なんですすがそれはww】

【なあ、やつぱりこれ……】

【言ってやるな 真実は時に人を傷つけるもんだ】

と些細なミスがありながらも、道標を手に入れた私たちはナキア村の中を進みー

「やあ、よく来てくれたのにや。カタリナの嬢ちゃん、そしてアネットの嬢ちゃんだった

かにや？

私の名前はニヤハット。ここで魚屋をやらせてもらってるものにや」

「わあ、猫さんがしゃべってるっ」

「むふつふ、いきなり私の頭を撫でるとは分かっているにやないかつ」

「ニヤハットさんきちゃああああ」

「モフモフキターーーー」

「もふもふもふもふもふもふ」

「ちっちゃい子が大きな猫にじやれつく姿って癒されるよねえ」

「そうか、ここだと子供が怪我をする危険もないのか いいなあ」

なんてケモナー大歓喜の展開があつたりー

【そういえば魚と肉とか普通に売ってるけど、これ全部常者なんだよね？

それなら元は話せたりするの？】

【そーいや前に常者は大体話せるとか言ってたっけ？】

【ま？】

【そう考えると、何か急にグロく見えてきた】

「そ、そうなのっ？ みんな、お友達になれるかもしれないなかった子達なの？」

「い、いえ、流石の私たちもそこまで外道ではありませんよ。

利用しているのはあくまで意思疎通出来ない常者だけです。

ほらみなさんもウマサケを見たでしょう？ あれみたいな存在は、種類で見れば少ないですが、数としてはかなりいるんですよ。

そもそも今私たちが立っている大地も常者の一種ですからね」

【あ、そっか 忘れたわ】

【大地が生き物とはこれ如何に？】

【相変わらず不思議な世界観やなあ】

なんて一幕があつたりしてー

「……みんな、良い人たちだね。それにすごく楽しそう」

「そうでしょう？ だから私はここのみんなが大好きなんですよ」

「うん……わたしも分かるなあ」

町の中を周り終えた私たちは大衆広場に戻ってきていた。

時刻は11時。今日は一日自由をもらっているからまだまだまだ時間はある。

買いた物は最後でいいし……うーん、今から何をしようかなあ？

アネットくらい歳の女の子が好きなもの、か。……ど、どうしよう。一緒に遊ぶと

かしか思いつかない。

大丈夫？ 楽しいのは男だけだったりしない？

「よっ。久しぶりだな。そいつがアネットか？」

「こ、この声はっ」

聞き覚えのある声に振り向けば、そこいたのは幼馴染第三号。

爽やかな笑みを浮かべる奴の名前は――

「アネット。あいつはシルビオ・ロリコンガ―。」

イケメソの顔に騙されてはいけません。小さい子を見ると見境なく襲い掛かる変態さんです」

「へ、へんたいふしんしゃさんなのっ!？」

「おいこら、勝手に俺を犯罪者にするんじゃないやねえ。」

俺が好きなのは年上のナイスバディな……あ」

【なるへそ シルビオは熟女好き、と】

【男の子出ちやったねえ】

【語るに落ちるとはこのことよ】

よしっ、これで釣り大会での屈辱は果たせましたかねっ。

第二十二話 信じていいんだよね？

「全く……カタリナは相変わらずだな。

俺の名前はシルビオ・グラント。ナキア村の狩人で、一応カタリナの幼馴染ってことになるんかね。よろしくな、アネット」

「ふーん。そうですか。

わたしのアネット・フロム。カタリナお姉ちゃんの妹です」

「お、おお？」

気取った様子で手を差し出すシルビオを、何故か「妹」の部分を強調しながら睨むアネット。誰彼構わず笑顔を向けていたアネットにしては珍しく、その顔には猜疑心がありと浮かんでいた。

「あれ、アネットちゃん何か不満そうじゃない？」

「そりゃ（大好きなお姉ちゃんに突然親し気な男が出てきたら）そうよ」

【百合に挟まる男は死すべしってやつやな】

あーなるほど。アネットは私をシルビオに取られたくなかったのかあ。

か、可愛いなあ、もうっ。大丈夫だよ、アネット。私、男なんてこれっぽちも興味な

いからっ（ガチ）。

「……おい、お前のせいで妙に警戒されてるじゃねえか。

どうすんだよ、これ？」

「別にいいんじゃないですか？」

「アネットの知り合いにはむさ苦しい男なんて不要なんですよ」

「ええー。」

「……何かお前、サーニヤっぽくなくてないか？」

「なん、ですってっ!？」

シルビオが放った一言に、稲妻が走ったような衝撃を覚える。

サーニヤ・ロットエン。残念姉妹の妹の方、姉に近づく人間は絶対に殺すマン。

さ、流石にあれと同一視されるのは業腹すぎるっ。

「ほ、ほら、アネット。ちゃんと握手してあげてください。」

さっきのあれは全部冗談で、本当はノリのいい優しいお兄さんですから」

「むー。何でカタリナお姉ちゃんはこいつの肩を持つの？」

愛してくれるって言ったじゃん。やっぱり妹わたしより男の方が大事なの？」

「い、いえ。そういうわけじゃありませんよ。」

ただその、アネットの為を思えばいろんな人との交流を持った方がー」

「わたしは、カタリナお姉ちゃんがいれば、他には何もいらないよ？」

——彼女の瑠璃色の瞳が青藍に染まる。

深く淀むように、可愛らしい瞳から光が消えていく。

【あつ】

【ハイライトオフ】

【流れ変わったな】

【ヤンデレはいいぞ〜^^】

【妹が主導権を持つ姉妹百合ですか……大好物です】

「……なくんて、えへへ。冗談だよ。びっくりした？」

パツと表情を変えてオーラを消すアネット。

失われていた音が世界に戻り、ばくばくと心臓が高鳴っているのが分かった。

ほ、本当に冗談だよね？

秘めた感情がついあふれ出しちゃったとか、選択肢を間違えたらこのまま監禁ルート

直行とかだったりしないよね？

急にそんなこと言われても、私答えられる自信ないよ？

「な、何か悪いな。」

顔見せは済んだし、お邪魔虫はさっさと退散するわ」

「あつ、いえ。ちよつと待っててください」

早足に立ち去ろうとするシルビオの袖をつかむ。

元はと言えばシルビオのせいなのだ。妹の深淵を開けた責任、とってもらおうよ？

「んー、おいしいっ」

【めっちゃうまそうやん】

【蕎麦はこつちと変わらないんだなあ】

【まあ室町時代に出来た店が今でも残ってるくらいやし】

【ま？ 室町時代っていうとあれだろ……あの、安土桃山時代の前の】

【結局何も変わらん件についてww】

落ちていたヒノキの香りと、強い出汗の匂いに包まれた店の中。

ざるに盛られた蕎麦を頬を緩ませて啜るアネットの姿を、私とシルビオはのんびりと眺めていた。

私達がいるのは狐族のコンコさんが営む蕎麦屋。

シルビオに紹介してもらった店だ。やっぱりあの時おすすめを聞いたのは正解だったなあ、流石は私っ。

シルビオも今日は暇みたいだし、これからもっと搾り取ってあげますかね。

「ほー。これが親子ですか」

「家族になるには流石に早すぎるっぴ」

「つてか、食べたりするのにお金が必要なのは驚いたわ。

それなら毎日食べ放題・買い放題やないか」

「まあ私たち稀人は村を護るのに絶対に必要な役職ですからね。

無制限とまでにはいきませんが、生きていける分くらいはみんな気前よく分けてくれますよ」

「そもそもみんな商売っ気とかなないからな。

常者の間でも物々交換したり次のツケにしたりとか結構あるみたいだぜ」

「はえええ」

「いいなあ めっちゃ楽しそうやん」

【それじゃあ家の近くにあった畑とかは自分用なんだ？】

「ですね、出来るだけ皆さんの手を借りないように作ってるんです。

沢山出来た時なんかはみんなに配ったりするんですよ。……まあそれ以上にお返しに野菜とかを貰うんですけど」

【ダメじゃんww】

【話を聞くに、昔の日本とか今の田舎をもっと緩くした感じ？】

【え、田舎だとタダで食料とかもらえたりするの？】

【→帰ったら家の前に今朝採れた野菜が置いてあるとかはザラよ】

【まじか！ ちよつと田舎でスローライフしてくるわっ】

【お、死亡フラグかな？】

【その分色々あるんよなあ】

ちよくちよくりスナーとのやり取りを挟みながら、そばを食べ進めていく。

色々ある、か。

そういうえば向こうでも近所の人に噂を広められて大変だったなあ。

……ん、今何か重要な記憶を思い出しそうになったような……？

【そーいやカタリナちゃんたちは一日何食食べてるん？】

確か三食食べるようになったのって結構最近なんよね？】

【そうそう江戸時代末期頃からなんよ

それまでは昼と夜の二食だったみたいやね】

【はええ 勉強になります、先生っ】

【遊びながら賢くなる、これが進○ゼミですか】

【あーと、私たちは普通に朝、昼、晩の一日三食ですね。

確か常者のみんなも同じでしたよね、シルビオ?】

「だな。ただ俺たち狩人は交代で森の中を見回っているから、どの時間帯に食べるかは
まちまちだな。

夜番の時とかは二食しか食べないなんてのも結構あるし」

【何というか……聞くだけで大変そう】

【もしかして：ブラック】

【夜勤はなあ 給料は高いけど、メンタル的にきついんよ】

シルビオの労働環境に寄せられる同情の声。

そんなに大変だったんだっけ。狩人って。

な、何か毎日配信とかしてるのが申し訳なくなってきたなあ。

【……シルビオ様、いつも見回りご苦労様です】

「ふっ、そう思うんだったら俺への態度を改めてくれてもいいんだぜ?」

「残念。それとこれとは話が別です。」

昔、シルビオのせいでお母さんたちに怒られたこと、忘れていませんから」

「ええー、あの時はお前もノリノリだったじゃねえか。」

未知の昆虫を捕まえるんだって」

「シルビオこそ何言ってるんですか？」

「こんなか弱い美少女がそんなこと言うわけないじゃないですか」

「か弱い、ねえ。それにやあちよつと胸が足りないじゃねえか？」

「は？ セクハラですか？」

いいでしょう、受けて立ちます。私には声を掛けただけで不審者扱いする心強い仲間

がいますからねっ」

「な、何だこの気安いやり取り」

「仲良いと思つてた女の子がクラスの陽キヤと楽しそうに話してるのを見た感じ」

「うっ」

「やめろ……思い出させるじゃねえ」

【所詮俺たちには見てることしかできないんやっつて】

きつと味方になってくれるだろうと思つてダブルレットの方を見たら、そこに広がった

のは現実に破れた男たちの姿。

な、なんだろう。

彼らの気持ちしが理解できる分、今の自分が余計に恥ずかしくなってきた。私今、可愛い女なんだよなあ。

「むー。また二人でこそこそ話してる。

もしかして二人はあれなの、恋人同士なの？」

「違いますっ」「ちげーよっ」

アネットの純粹無垢な問いに、二人で声を合わせて否定する。

俺が好きなのは女の子。男は攻略対象にはならんて。

……それとアネット。目の奥が全然笑ってないのはやめてくださいな。

さっきのあれは冗談だつて信じていいんだよね？ お姉ちゃん、怖くなってきちゃったよ。

「よし。何かやりたいことはあるか」

昼食を済ませ、通りに出てきた私達。

時刻はまだ12:00だから、解散まで時間はある。今後の予定を問うたシルビオに、

アネットが声を弾ませて答えた。

「折角だし、わたし、あれやりたいっ。」

かくれんぼっ」

「あー、かくれんぼかあ。どうする？ 町の人みんなに頼むか？」

「うーん、それでもいいんですけど……」

目当ての人物を探して、周りを見渡す。

マハタ様の手によつて、アネットがここに来る情報は広まっている。きつとあの二人もすぐにー

「あら、彼女がアネット？ 可愛らしいじゃない」

「駄目ですよ、お姉さま。カタリナの妹とかどうせ変な奴に決まっています」

「ー残念姉妹ゲットだぜっ」

【突然のポ○モンwww】

【ポ○モンマスターに俺はなるっ】

第二十三話 予兆

「だ、誰も来てない？」

「……うん、今のところは大丈夫みたい」

狭い路地裏の中。

木の板から小さく顔を出して通りに鬼がいないの伝えると、奥で身を潜めるアネットがほっと息を吐いた。

そう、今は彼女が提案したかくれんぼ中だった。

参加者は私、アネット、シルビオ、残念姉妹、そして何故か途中乱入してきたマハタ様の6人。今回は最初のターンということで、マハタ様が鬼に、私はアネットと一緒に隠れる運びになっていた。

因みに配信中のタブレットは今は鬼のマハタ様が持っている。カメラが一つしかない以上、そうしないとリスナーのみんなが全体の流れを把握できないからね。

「? ……あらあら、懐かしいわねえ。頑張つて、二人とも」

路地裏前の通りを行き交う住人達に優しい言葉を掛けられ、その度に無言で会釈する私達。

一応見つけてきた木の板で前を隠しているもの、普段から通い慣れている彼らの目は誤魔化せないらしい。

うう、場所選択間違えたかなあ。

でも今から移動するのは流石にリスキーだし、そもそも建物や敷地の中には入れない制約があるからまともな隠れ場所が他にないんだよね。

やっぱりここを見つけた自分の直観を信じるしかない、か。

それならば、と私は隣に座るアネットに体を寄せた。

左肩に感じる暖かな熱と、脳を惑わすほのかな甘い香り。密着した二つの体に、アネットは満足そうに「むふふ」と鼻を鳴らした。

「ど、どうしたの？ 何か嬉しいことでもあった？」

「ううん。」

ただ内緒で逢瀬を重ねる恋人同士みたいで、緊張するなーって」

「そ、ソウダネー」

な、なんて言葉を返したらいいんだろう？

正直、迂闊なことを言ったらあのモードになる未来しか見えないうってばよ。

「お、あつちでマハタ様と狩人の坊主がやりあつてゐるみたいだぜ」

「なに、笹食つてゐる場合じゃねえパンダっ」

と、そんな緊張を破ったのは、遠くの方で鳴った衝撃音と俄かに騒がしくなる住民たちの声だった。

どんだん、とまるで太鼓でも鳴らしているかのような音が何度も鳴り響く。

「……あ、あれ？ これ、かくれんぼだよ……？」

「いい、アネット？ リリストアルトリリスのゲームは戦争なんだよ。

搦手、裏切り、奇襲、何だつてござれ。モラルモラルの範囲内であれば何をやっても許される。

そして今回、見つかったら動いちゃいけないっていうルールはない。つまりそういうことだねっ」

「え、ええー」

なんじゃそりや、という感じで眉を下げるアネット。

配信でも「かくれんぼとは一体……？」とかコメントが書かれていそうなのが見える。見える。

でもやってみると案外楽しかったりするのだ。勝ち負けに関わらず、全力は出すのつてそれだけで気持ちいいからね。

「かつかつ、そんな場所に隠れようと儂の目は誤魔化せんで、カタリナよ。

残りはお主たち二人だけじゃ。大人しく儂に捕まるが良いっ」

暫く静寂が続いた後、頭上から高らかな声が降り注いだ。

そこにいたのは、正面の長屋の上で仁王立ちするマハタお様の姿。

「どうする？　このまま捕まる？」

「まさかっ。」

カタリナお姉ちゃんのちよつといいとこ、見てみたくい」

「まかせんしゃいっ」

若干古い煽り文句に乗せられ、アネットを抱えて飛び出す。

「きゃあああっ」

「はっ、そう来なくてはなっ」

腕の中で歓声を上げるアネットと、屋根から下りて急速に距離を詰めてくるマハタ様。勿論私だってタダで逃げ切れるなんて思っていない。

マハタ様に手の平を向けて、体内のマナを呼び起こす。

イメージはそう、線ではなく面。出来るだけ視界を防げるように薄く広く浄化の力を伸ばしていつてー

「わあ、凄いきれいっ」

「ち、ちがっ」

体がぶれるような感覚と共に、肥大化し続ける浄化の力。

何とかしなくては、と制御を試みても何故か全くうまくできない。光の壁はそのまま身長すら超えていく。

何かが起こっていると気付いたのか、大きくなる周囲のざわめき。

「まず、みんな逃げろ」

「あんの馬鹿力タリナッ」

さっさと身を伏せてくださいっ

「っ了解です」

アネットをお腹に隠して身を丸めると同時、白い壁をサーニヤの結界が包んだ。

術者わたしとのリンクが切れ、崩壊し始める浄化の力。

大した効力がなかったはずのそれが大爆発を引き起こし、結界すら破るのを私はただ呆然と眺めていた。

「きゃー、たかーいっ」

「ぎゃはは、そうだろうそうだろう」

俺様は村一番の大男だからな、今アネットはこの中で一番高いってわけだ」
「おおー、いいねっ」

その日の夜、いつもの日課を終えて。

大衆広場の中で巨人族のラットさんに肩車されているアネットの姿を、私はタブレットで撮っていた。

彼女の顔に浮かぶのは純粹無垢な笑顔。どうやらここでの時間はそう悪いものじゃなかったらしい。

……妹がすんなりと馴染んでくれて、お姉ちゃん嬉しいよ。

やっぱり子供には元気のいい顔が似合うなあ。……まあヤンデレも見分にはいいけどね、見る分には。

と、そうだ。

「あの、サーニャ。さつきは助かりました。

サーニャのおかげで誰も傷つけずに済みました」

広場の端で甘酒片手に佇んでいた防人姉妹に頭を下げる。

浄化の力とは言え、形を持たせるために衝撃のエネルギーなどの他の要素も組み込んだ。もし彼女の結界がいなかったら最悪誰かを怪我させていた可能性もあった。

「……ほんと、ですよ。」

これだからカタリナは駄目、なんですよ。すぐに調子に乗るし、勝手なことを言うし……っ」

「??」

何かを堪えるように表情を歪め、走り去ってしまってしまふサーニヤ。

そ、そんなに怒らせちゃったのかな？ 顔も見たくないレベルで？

不安を孕んだ視線でタニアの方を見ると、彼女は頬を強張らせて言葉を紡いだ。

「……カタリナ、あなたは成人の儀が近づいているのよ。」

だからあんな風に力が不安定になる」

「あ、そういうことですか」

『私も早く成人になって、あなたたちに追いつきます。』

それまでは私という天才がいらないフィールドで、伸び伸びしててくださいよ」

とうとうこの日が来たかっという歓喜と共に胸に広がるのは、かつて二人と交わした

約束。

「なるほど。だからサーニヤは逃げ出したんですね。」

私に追いつかれるのが怖かったから。全く、それならもつとそれらしい態度を取ってくれたらいいのに」

「……そうね。そんな感じだわ」

ふつとため息を零して、タニアが小さく笑う。

な、なんだろう？ 今すつごく馬鹿にされたような……？ いやいやまさかね。

「ねえ、カタリナは成人の儀についておばさんたちから何か聞いてる？」

「い、いえ？ その時が来たら教えてあげるとだけ言われました」

「そう……それじゃあ私から一つだけ。」

このまま成人化が進めば、カタリナは近いうちに選択を迫られることになる。永遠の模索か、刹那の安寧か、自分で決めることになるのよ」

「……なんですか、それ？ なぞかけですか？」

「今はそう思ってくれて構わないわ。」

でもこれだけは覚えておいて。例えば周りが何を言おうと、あなたは自分の思うままに進みなさい。あなたの人生はあなただけのものなんだから」

「……」

彼女の真剣な表情に、時間が止まったような感覚に襲われた。

永遠の模索、刹那のあんねい？ 一体どういふことなんだろう？ 今はそれでいいつ

てどういふことだろう？

頭を巡る無数の疑問。それでもタニアはきつとそれに答えてはくれまい。

それならー

「タニア達はその何かを選んだんですか？」

「そうよ。だからここにいるの」

タニアが口を一文字に結んで言い切る。

こちらが気圧されるほど、強い光を灯した瞳で。

「こら、早く降りるゾウ。」

次は私の番。ララットなんかよりも素晴らしい光景を見せてやるゾウ」

「はああ？」

「もう、みんな喧嘩しないでよっ」

広場を通り抜ける夜風。後ろから聞こえてくる喧騒の声。

湿っぽい土のにおいと沈丁花の甘い香りが、春の訪れを告げていた。

第二十四話 【料理配信】世にも奇妙な料理配信、開店で す R

【待機〜】

【こんちゃ〜】

【こんにちわ】

【14時開始か 今日ほちよつと遅いんやな】

【みなさん、お疲れさまです】

【ここにいる名前も結構見慣れてきたなあ】

【→そりやあ平日昼間に長時間配信を見れる層なんて限られてるし】

【まあ確かに暇な大学生とか特殊な勤務形態の人しか見られないか】

【おつ、そうだな（適当）】

【……（もう一つあるんだよなあ）】

【……（仕事中にスマホで見てるなんて言えない）】

【動画タイトルのRって？】

【多分リベンジの略だと思われ】

ほら前にカタリナママさんが料理配信したことあったじゃん」

【なつつ カタリナちゃんの料理下手属性がバレた回かw】

次の日の昼間、わが家のキッチンにて。

待機枠にリスナーのみんなが集まっているの確認して、私とアネットはカメラで小さく手を振った。

「こほん……どうもみなさんこんにちは。

異世界一の凄腕美少女料理人、カタリナ・フロムです」

「お姉ちゃんの妹兼カメラマンのアネットだよっ」

「えー、というわけで今日はこの二人で料理を作っていこうと思います。

つまりお母さんの誕生日に向けた練習ですね。お母さんたちにばれないよう、声控えめ・アーカイブが残らない形式でお送りしています。

また、お母さんたちも結構動画を見返していたりしまするので、他の配信とかでもスルーしてくれると嬉しいですよ」

【なるへそ】

【了解】

【確かママさんへの誕生日プレゼントはカタリナちゃん特製料理になったんやっけ】

【ん？ 何か嫌な予感がしてきたな……】

【恐ろしく早い伏線回収 オレでなきや見逃しちゃうね】

【隠れて作って大丈夫なん？ お腹はいっぱいにならない？】

【今日作るの一人前のおかずだから大丈夫なはずです。

当面の目標は当日の夕食のメニューを一品追加することですから。

ただし品数は練習の出来次第ではどんどん増やしていく予定なので、みなさんふるつ

てご参加ください。

まあ私の腕があれば、余裕で全品作れちゃうと思うんですけどねっ」

「うんうん、カタリナお姉ちゃんなら絶対にできるよっ」

【まかせんしゃいっ】

【アネットちゃんの応援が重い重い】

【やっぱ俺ら責任重大じゃん】

◇ 私の腕があれば

何で彼らつて妙に自己評価が高いんでしょうね……」

【そりゃああれよ 基本何でもおいしく食べられるからよ】

【何の料理を作るかはもう決めてあるの？】

「ええ、YouTubeで「初心者おすすめ」で検索したり、肉屋のミミコロさんに相談したり紆余曲折ありながら決めました。

今日作るのはー生姜焼きです。

勿論材料も用意済み。実は既に昨日町に行った時に貰って、冷蔵庫の底にこっそりを入れておいたんですよ」

【あー、うん】

【何というか……めっちゃ無難】

【これで何を失敗させろっていうんだよっ】

台座に乗り、タブレットを持ったアネットが厨房の上の食材を写す。

薄切りの豚ロース3枚、たまねぎ1/4、小さなシヨウガ、その他もろもろの調味料。色んな動画を見て料理方法とかも確認済みだから、そう酷いことにはならないはず。

「全く。みなさん、私に何を期待してたんですかね？」

私だってお母さんたちにおいしい料理を食べてほしくて作ってるんですよ。今まではちよつと何かが噛み合わなかっただけで、作り方さえ知っていれば私でもパパッと作れちゃいますよ」

【お、フラグか？】

◇お母さんたちにおいしい料理を食べてほしくて

うう、俺の唯一の良心がががが

【頑張れ！負けるな！】

俺たちカタリナちゃんの泣き顔を見るためにここにいるんじゃないかっ

【真正正銘の最低やろうじゃねえかww】

【勝手に仲間にしないでもろて】

「さて。それじゃあ早速。」

カタリナ、sキッチン、開幕ですっ

「いえーい。どんどんパフパフっ」

【よっしや腕が鳴るぜ】

【どんどんぱーって、アネットちゃんに取られてるっ!?!】

このままじゃあ埒が明かない、と包丁を持って料理開始を宣言する。

ふっふっ、全世界100万人のカタリナファンみんな、私の華麗なる包丁さばきを

見るがいいですよっ（てきとー）。

「えーと、まずは筋切り? というやつをするんですけどよね。」

確かこんな感じに縦方向に切って、と」

「あつ。あの、もうちよつと力を抜いて、刃を立てた方がっ」

【お、おお】

【肉がめっちゃ動いてる……】

【身ごと切れちゃってない、これ?】

アネットたちの言うように、まな板の上にあるのは力の入れすぎで不恰好になった肉の塊。上の方にも若干切り込みが入っている。

い、意外と難しいなあ。めっちゃ簡単そうにやってたのに。

「こ、こんな感じですかね？」

「そうそう、基本的には刃先で刺すみたいによればいいよ。」

後はそれをIcm感覚で繰り返してーあ、もうちよつと横かな。うん、大丈夫」

「よしよし、今回は良い感じ」

「ほっ。あのままだったら生姜焼きもどきになっていたぜ」

「恐ろしく早い伏線回収ー（ry）」

「懐かしい 俺も最初の方はこんな風だったなあ」

「まじで作り慣れてないんやなあ 正直かなり誇張してると思ってたわ」

「4歳（暫定）に料理を教わる14歳JCとは一体……？」

「→そもそも4歳で色々指示できる方がおかしいからなww」

「……そして、カタリナちゃんは前のママさんみたく黙っちゃう、と」

「えへへ、いつもの元気なお姉ちゃんも可愛いけど、真剣なカタリナお姉ちゃんもいいよね。」

「……食べちゃいたいくらい」

【??】

【あれ、今なんか変な空耳が聞こえた?】

【なるほどね 完全に理解した】

【い、いや料理配信してるせいで言い間違えた可能性もあるから…… (震え声)】
と、私の知らないところでそんなやり取りがありながらも手順は進みー

「か、カタリナお姉ちゃんっ!?

猫の手はどこにいつちやっただのっ!? 猫の手はっ!?!」

「えっ、でもこんな小さいと猫の手だと支えられませんかよ?」

「そ、そういう時はたまねぎを倒して……そう、そうだよっ」

【ひえっ】

【今一瞬俺の頭にスプラッタな光景が広がったぞ?】

【これ、俺たちだけだったら危なかったんじゃない?】

なんて些細なミスがあつたりー

「……暇です。私も雑談に混ぜてください。」

そろそろみなさんも私とのやり取りが恋しくなってきたと思うんですよ〜」

「駄目、だよ。カタリナお姉ちゃんはフライパンに集中してて。」

それと勝手に火加減とか変えないでね、絶対だよ?」

「うー、分かりました」

「そんなガチトーンで言わんでも……」

「まあでも……うん。気持ちには分かる」

「完全に主従が逆転してる件についてww」

「ママ〜」

「アネットママ、だと!?!」

心配性なアネットの監視を乗り越えてー

「ー生姜焼き、完成ですっ。」

いやあ流石は私。めちゃくちゃ美味しそうにできましたねっ。これにはリスナーのみんなもぐうの音も出ないんじゃないですかっ!?!」

「わ、わあー……」

【よ、ようやく終わった……】

【生姜焼き単品で1時間近くかかるってマ?】

【あれ、おかしいな】

何で俺、休憩していたはずなのにこんなに疲れてるんだろ……?】

【→それが恋つてもんよ】

【そんな恋はイヤだ……】

【アネットちゃんの死んだ目を見ろ 俺たちはみんな同士さ】

【うう。みんな、生きてて良かったっ!】

沸き立つような高揚感と共にアネットの方を見れば、そこに並ぶのは死屍累々と言つた体のコメントの数々。

……あれ、そんなにひどかったかな?

私にしては珍しく一回も作り直しにならなかつただけど……

「す、すごくおいしいよつ。流石はカタリナお姉ちゃんだねつ」

【よかつたよかつた】

【アネットちゃん、俺たち頑張ったよ】

【うう、目から汗が……】

【やっぱり本人の幸せが一番なんやなつて】

何も言わずにいきなりパクリと口に運び、泣きながら微笑むアネット。

??? そんなにお腹がすいてたのかな？

まあでも、それくらいおいしかったってことだよね。それなら良かった。

「この調子で早速二品目をー」

「それは駄目っ!!!」

「アッ、はい」

第二十五話 【雑談】 守人姉妹と初めての共同作業！

「地球圏にお住まいの皆様、こんかた〜。

異世界のつよつよ美少女、カタリナ・フロムです」

「我々はリリストアルトの防人であるっ。

カタリナお姉ちゃん、アネット・フロムだよ〜」

「よっ、待ってましたっ」

「こん、なに？」

「唐突な謎挨拶キター〜」

「アネットちゃんは何故急に断定口調に？ 何かのネタ？」

「さあ……？」

「うっ 映画があつたのに、最近の人は知らないのか……」

「やっぱ中の人はだいたいぶ上の年代説が有力だよなあ」

料理配信の一週間後。

とある予定を遂行するため、私たちは我が家のリビングに集まっていた。ついで、後ろに佇む残りのメンバーも紹介する。

「はい、というわけで今回はスペシャルゲストに来ていただいております。」

約一週間ぶりの登場、残念姉妹ですっ」

「防人のタニア・ロツテンよ。」

リスナーのみんなにはカタリナが迷惑をかけるわ」

「ふんっ。本当ですよ。」

お姉さまの足を引つ張らないよう、くれぐれも気を付けておくことですね」

「よっしゃっ 推しのタニアちゃんきたっ」

「相変わらずどっちもかわええなああ」

「個人的にはタニアちゃんのメスガキ感も良きです」

「分かる、男のあれでわからせたいよなあ」

「は？ メスガキはメスガキのままがいいんだろっ」

残念姉妹の登場に、今まで以上に沸き立つコメント欄。

……な、なんか料理配信の時から私のファン離れが顕著になってる気がするっ。

どうしたらいいんだろっ？ 全然女の子っぽくないって自覚はあるんだけど、カメラ

の前で可愛いポーズとか撮るのって結構恥ずかしいだね。

と、ともかく今は先に進めよう、と机の上に並ぶ和紙の束を写した。

「えー、今回は春のお花見に向けて、この和紙たちを全部紙飛行機にしていきたいと思っ

ています。

ここナキア村では桜が満開に咲いた日はあの世とこの世の境目が曖昧になると言われていて、みんなで「ここにいない誰か」への言葉をこの紙に書いて空に飛ばすんですよ。

その時に手先が不器用な常者でも飛ばせるよう、私達が事前に折り目を付けておくって感じですね」

「毎年家に紙が配られたらこうして持ち寄って、ある程度は一緒に折っているのよ。

紙を折れるのがマハタ様と私達稀人しかないし、お父さんたちとかシルビオたち狩人は忙しいから、私たちがほぼ全員分やるしかないのよね」

「ははあ なるほどねえ」

「仕方ないかもしれないけど、出来る人が雑用を押し付けられる、って感じやな」

「うっ 頭が痛くなってきた……」

「世の中どこもホワイトってわけにはいかないんやなって」

「全部で何枚あるの？」

「全部で約1000枚、一人250枚がノルマですね。

今年はアネットがいるから、これでも大分ましなんですよ？ 去年なんか全然終わらなくて、結局前日の夜に家族全員で徹夜して終わらせましたからね」

「……それは馬鹿カタリナのせいじゃないですか。」

私たちは花見の一週間前には既に終わってましたよ?」

「うぐつ。い、いやあれは、あの、ちよつと誤算があつたというか……最悪、10秒で1個折れれば、半日で終わると思つていたというか……」

「で、でたああー」

先送り癖の人が良く使う、○○秒で○○すれば理論だアアア」

「それまでサボつてきた人間がそんなに効率よくやれるわけないんだよなあ……」

「カタリナちゃん」

さては君、夏休みの宿題は最終日にまとめてやるタイプだね? (名推理)」

「名推理も何も最初から薄々分かつてただろwww」

「ぐう」

リスナーの一人にズバリと指摘され、思わず苦悶を漏らす。

く、この話題は明らかに私に分が悪そうだね。ここは戦略的撤退を選ばせてもらおうよつ。

「それじゃあー」

「全く、みんなは分かつてないな。」

カタリナお姉ちゃんはこのダメさ加減がいいじゃん。……正直このまま大きくなつ

て、私の介護なしには生きられないようになってほしい」

「ちよ、ちよつとアネットまで何言ってるんですか!？」

「???'」

「おおーと、また変な幻聴が聞こえたみたいやなあ」

「大丈夫大丈夫 俺たちには何も見えてないし聞いてないから」

「お二人はどうぞ続きを」

「ワクワク」

「ドキドキ」

「……なるほど。その手もあり、ですね」

「っ」

コンボしていく不幸の連鎖。

不気味に笑うサーニヤに、タニアが助けを求めるような瞳をこちらを向ける。

私は体面の彼女たちから、そして隣に感じる妙なプレッシャーからも目を離して、誰もいない天井を見上げた。

……はたから見てたら面白かったけど、お姉ちゃんになるって大変なんだなあ。

今度からサーニヤにもっと優しくしよう。

「さ、早速始めましょうか。」

誰が一番多く折れるか競争ですっ」

【見なかったことにすんなwww】

【俺たちは一体何を見せられていたんだ……?】

色んな感情全部を押し込んで、私たちは折り紙を折り始めてー

「飽きました。」

単純作業の合間には休憩も大事ですよ。運動しましょう、運動っ」

【実家のように見慣れた光景】

【まだ5分しか経ってないんですが、それは?】

「カタリナお姉ちゃん、もうちょつと頑張ろう。」

「じゃないと、さつきいったことほんとに……ね?」

「あつ、はい」

なんて背筋が凍るような恐怖体験に襲われたりー

「全くなにモタモタしてるんですか、カタリナは。」

「ほら、残り分けてください。仕方ないから手伝ってあげますよ」
「へ？」

「……サーニヤが私に優しくするとか明日は槍でも降るんですかね？」

「それともタニアの秘蔵写真をご所望ですか？ 残念でしたね。さつき私とタニアは同志になったんです。シスコン被害者まを裏切るなんてそんな酷いこと私にはとても……小さいとき一緒に入ったプールの写真でどうですか？」

「っ!？」

「別に、深い理由はありませんよ。」

「ただお婆さんたちに迷惑を掛けたくないから、それだけです」

「お、ツンデレきた？」

「何だかんだ愛されてるよなあ、カタリナちゃんって」

「めっちゃわかりづらいけどなww」

「……意外と彼女が一番のライバル、かも？」

「見知った幼馴染のそんな珍しい行動があったりしながら作業は進みー」

「お、終わったあああああ」

【パチパチパチ】

【お疲れさまでした】

【いや、これはマジで頑張った方なんじゃないか?】

【たし力二】

【良い感じの作業配信だったなあ 俺も仕事があつちやはかどったわ】

【やっぱり誰かの頑張る姿を見るとやる気が出るよね】

約三時間後にも及ぶ作業を予定通り終え、私は開放感のあまりに腕を突き上げた。

机の上に並ぶのは折り目が付いた無数の和紙と、最初の半分以下の高さになった和紙のタワー。

うう、頑張ったよ私達。もう、ゴールしてもいいよね……?」

「とはいってもまだ半分近く残ってるから、後は自分たちでちゃんとやるのよ?」

「大丈夫だよ、二人とも。」

カタリナお姉ちゃんのごことは全部私が管理するから」

「それなら安全ね」

【安全? 安全とは一体……?】

【アネットちゃんが完全にママ化してる件について】

【アネットちゃんが? ちがうだろっ】

俺たちがアネットちゃんのママになるんだよつ」

【→ごめん　ちよつと何言ってるか分からない】

アネットたちが何か変なことを言ってるけど、気にしない。

今はただこの心地よい疲労感に浸っていたいのさ。あ、そうだ。

「ここまで集中して出来たのは、三人ーそしてリスナーの皆さんのおかげです。

本当にありがとうございます」

【お、おう】

【急な不意打ちは心臓発作起こすからやめてもらて】

【相変わらずだなあおまいらはww】

「えへへ。どういたしまして」

可愛らしい笑顔で笑うアネットと、緩く頷くタニアとサーニヤ。

こうみるとあの二人も凄い綺麗だよなあ。……よく考えたら前世だと女友達すらい

なかったら私がこんな子たちと仲良くやってるって凄い奇跡じゃない、これ？

ま、今はいいか。

「さて。それじゃあ今回の配信はここまでです。長時間配信にもかかわらず最後まで付き合ってくれて、本当にありがとうございます」

どうか皆さんに素敵な幻想がありますように」

【ばいかた〜】

【素敵な幻想がありますように】

【素敵な幻想がありますように〜】

【素敵な幻想がありますように】

……。

「……あの、カタリナ。

昼に言ってたことは本当なんですか？ あの、お姉さまのプールの写真があるって

……」

「あー、はい本当ですよ。見ます？」

「見るっ」

その後タニアがいなくなった瞬間を見計らって、サーニヤはそうこつそりと聞いてきた。

うん、やっぱりサーニヤはこうでないかね。

第二十六話 【生配信】 つよつよ幼馴染と異世界探索！

「……へ？ ついてきてほしい、ですか？」

姉妹との配信を終えた翌々日の朝の事。

珍しく我が家にやってきたシルビオが放った言葉に私は困惑を返した。発起人のシルビオが若干視線を彷徨わせながら口を開く。

「ほら、今は家と村の周辺しか配信に映せていないだろ？」

ただ森の中にも色々面白い光景があるからさ、俺と一緒に来ればそういうのも全部撮れるじゃないかと思っただよ

「ほはーお？ なるほどなるほど。」

……いい案ですね、乗りましたつ。リリストアルトの不思議な光景、リスナーのみんなに見せてあげましょうか」

シルビオの提案に一瞬思考を巡らせた後、私は大仰に頷いた。

狩人として日頃からナナトの森の巡回しているシルビオなら、それはもう凄い光景を知っている事だろう。とかいうか子供時以来入ってなかったナナトの森が今どうなっているか、他でもない私がめっちゃ気になる。

「……でもなんで急に? それなら最初の方に言ってくれてもよかったですよね?」

「あー、それはほら、カタリナも成人が近づいてきたわけだろ。」

「万が一があつた場合も最悪どうにかなるんじゃないかねえかと思つたんだよ」

「ふんふん。なるほど、完璧な理論武装ですね」

シルビオの頬を汗が伝っているように見えるけど、まあ気のせいでしょう。

いやあ、シルビオにもカタリナチャンネルのメンバーとして自覚が出てきたんだね。今までの苦勞が報われた気がして、お父さん嬉しい。

「怪しい……怪しいよ。カタリナお姉ちゃん。」

大体、森の中を写すだけならシルビオだけで行けばいいじゃん。

これはあれだよ。チャライ男が適当な口実で女の子を人のいない場所に誘い出す例のあれだよ。お姉ちゃん、よわよわだからシルビオに抵抗出来ず、食べられちゃうんだよ、エ○漫画みたいに……エ○漫画みたいにつ」

「二回も言わんでも分かるって。」

それならアネットも一緒にくるか? 元々そのつもりだったしな」

「勿論行くよつ。お姉ちゃんと年若い男を二人きりになんてできないからねつ」

「分かった。ただし俺たちの指示はちゃんと聞けよ?」

はぐれたりしたら洒落になんねえんだから」

「うん、わかってるよ」

シルビオの忠告に、アネットが意気揚々と頷いた。

うう、相変わらずアネットの中の私の評価がめちやくちや低いよお。流石の私でもシルビオじゃなければ二人きりになったりしないって。

と、それはともかく。

「本当に大丈夫なんですか？

その、もし万が一があつたりしたらー」

「俺たち二人で気を付けて、あとは鈴でも持たせれば何とかなるだろ。」

そもそも俺たちもアネットくらい年の時は森の中を遊び回ってたじゃねえか」

うーむ。そう言われるとぐうの音も出ない。

ま、今は強くなったシルビオもいるし何とかなるかな。

「リリーストアルトは一体どうやって生まれたのか？

その謎を解明するため、我々はナナトの森の奥地へと向かったー」

みなさんこんにちわ。異世界の美少女冒険家にして調査隊長、カタリナ・フロムで

す」

「調査隊副隊長、アネット・フロムだよ。」

今日はシルビオの魔の手からカタリナお姉ちゃんを守護まもるために来ましたっ」

「あー、何の役職もねえただのヒラ調査隊員、シルビオ・グラントだ。」

今回は隊長の代わりに道案内役を務めさせてもらうぜ」

「おー、久しぶりの組み合わせ」

「おかしい、「まもる」になんか変なルビが見える……」

「カタリナちゃんが隊長とか不安しか感じない件について」

「アネットちゃんがいけばへーき、へーき」

というわけで、準備を済ませた私達はフロム家の裏山の入り口に立っていた。

分別がつくようになった後はほとんど家の中に籠ってたから、大体6年ぶりくらいかな。ごくり、と喉を鳴らしてタブレットのカメラの方へ目を向けた。

「えー今回、私の右手はタブレットで、左手はアネットの可愛いお手々で塞がれていますので旅の安全はシルビオが完全に握っていることになります。」

男の子としてちゃんと私たちをエスコートしてくださいね、シルビオ」

「はいよ。ま、男の子っていう年でもないんだけどな」

「……リスナーのみんな、カタリナお姉ちゃんは私が守るから安心してね?」

「うーん、それならヨシッ!」

【当然のように主従逆転してるんだけど?】

【→それはほらアネットちゃんだから】

やっぱりそういう風に見えるよあ、と苦笑いを浮かべながら森の中へ。

中に入ると、一気に視界が暗くなった。

辺りに生い茂る謎の草と、空を閉ざす木々の葉っぱ、そして足元を通る剥き出しの土で出来た道。

そんな懐かしい光景と匂いに、かつての記憶が呼び覚まされていく。

「あ、何となく覚えてますよ、この辺。」

確かあっちの方に樹液が出る木がありますよねっ」

「だな。夜に二人で抜け出して、くそかけーカブトムシを捕まえた場所だ」

「おおっ、懐かしいですね。」

今でもあそこ、生きていたりするんですか?」

「勿論だぜ。……見に行ってみるか?」

「いきますっ」

「お、お姉ちゃん……」

【こうしてアネットちゃんの好感度が下がっていくんやなって……】

【いいなあ こういう女友達が欲しかった……】

「あ、いや。やっぱり私はどっちでもいいんですけどね。」

まあシルビオがそこまで言うなら、行ってあげてもいいかなって感じですよ」

「カタリナ、お前……」

アネットの呆れた声に慌てて誤魔化せば、今度はシルビオすら半目を向けてきた。

うう、女の子が昆虫好きでもいいじゃない。私の味方 is どこ？

【あれ？ でも確か稀人って穢者に襲われやすいじゃなかった？

そんな子供が二人だけで森の中に入って大丈夫なん？】

「いや、思いつきり禁止されてたな。バレたらめちやくちや怒られたし。」

でもカタリナの奴、全然懲りなくてさ。何度も俺を誘ってきたんだよ」

「はああ？ 大体、最初に言い出したのはシルビオの方じゃないですかっ。」

私は仕方なくついて行ってあげただけですよっ」

「なにをー」

「やんのかー」

「……やっぱりお姉ちゃんは私が守らないと」

なんて一幕がありながらも調査は進みー

「……えー、今回の調査では謎の究明は叶いませんでしたが、以下のことが分かりました。

- ・そこに住む動植物たちは独自に進化を遂げている。

- ・沸騰する川が存在する。

- ・村との交流がほとんどない部族が暮らしている。

これらの情報はきつと今後の謎を解く重要なヒントとなるでしょう。以上、ご視聴ありがとうございました。

どうか皆さんに素敵な幻想がありますように」

【それアマゾンにもあるで】

【それアマゾンにもあるで】

【それアマゾンにもあるで】

ー地球の大自然に大敗北を喫したのだった。

アマゾンって凄いつ！（小並感）

第二十七話 【潜入】異世界の学校!

「そーいやカタリナちゃんたちは学校に行つてないの?」

きつかけはリスナーのそんな些細な一言だった。

恐らくはV t u b e rとしての設定が知りたくて聞いたであろうそれに、「そういえばそこら辺の説明はしていなかったなあ」と今更ながら思い至り、ついでにアネットの強い要望もあつて――

「えー、地球のみなさんこんにちわ。

異世界の美少女教師、カタリナ・フロムです。今回はタイトルの通り、リリストアルトの学校を紹介していきたいと思ひます」

「いえいつ」

「よ、待つてました」

【相変わらず最初の挨拶安定しないなあ】

――私とアネットは「フクロ口の寺子屋」と書かれた建物の前にたつていた。

「フクロ口の寺子屋」。

村の中心付近に建てられたそこは梟族ふくろうのフクロ口さんが先生となつて子供たちに読

み書きや計算を教える場所だった。村で生まれた常者たちはみなここで5、6年の間に基礎的知識を学んで大人になっていく。今回はマハタ様の計らいで、特別に私たちのために時間を取ってもらった。

そんな説明を画面に向こうの彼らに話していく。

【はあー、そんな教育機関があつたんやねえ 全然知らんかった】

【やっぱ江戸時代をベースにしてる感じやな】

◇子供達 もしかして今からあの子たちの子供モデルが見えるんどす?】

【なん…だと…(ガタツ)】

【お前天才かつ!? 今すぐ同志たちに連絡しないとっ】

【!?】

【何か、急に同接が500人くらい増えたんやがwww】

【「悲報」カタリナちゃんの人気、ケモナーたちの熱意に負ける】

【→大丈夫 いつものことやから…】

【確か稀人のカタリナちゃんは村の学校に行かないで、家で勉強してたんだっけ?】

「です。渡された教材とかを各自で進める形ーそちらで言うところの通信教育みたいな感じですね。

12歳くらいまでは渋々やらされていたので、多分勉強量的にはそう変わらないはず

です」

「わたしは今も空いた時間とかはカタリナお姉ちゃんに勉強を教えてもらってるんだよ。……まあ逆にわたしが教える場合が多いんだけど」

「?? 何か今ボソツとやべーこと言わなかった?」

【気のせい気のせい】

【あれ、でもそれなら何でもこつちで一緒にやらないんだろ? わざわざ稀人と常者で分ける必要はない? 先生の数足りないとか?】

「え、えーと、それは……あれ、なんでしたっけ?」

確か稀人と一緒にいると穢者に狙われやすいから、とかそんな感じでしたよね。ね、

アネット?」

「え? さ、さあ私はそういうものなんだって勝手に思ってたから……」

「??」

【お、闇深案件か?】

【当然のように妹に聞く姉さんよ……】

突然出現した難問に、二人で首を捻る。

おつかしいなあ、誰かに何度か説明してもらったと思うんだけど……まあ遙か昔のことだからね。忘れてても仕方ない仕方がない。

「はい、注目。今日の朝に話したと思いますが、今回はとある有名人の方に来ていただきました。

地球ともつながっているので皆さん節度ある態度を取ってくださいね。

では。防人見習いのカタリナ・フロムさんとその妹のアネット・フロムさんです。どうぞっ」

「わあ、カタリナちゃんってあのカタリナちゃんっ!?」「おれ、前にアネットちゃん見たことあるぜっ」

【きたあああああ】

【あっあっ】

【いいゾ】

【Woo—hoo!!!】

【海外ネキもようみとる】

【ケモナーは向こうが本場やからな（適当）】

【やっぱかわいいは言語の壁を超えるんやなって】

ーというわけで、早速やってきたご対面の時。

先生の合図とともに教室の中に足を踏み入れれば、猫、犬、などなど様々な形をした常者たちが文机の前で行儀よくお座りしていた。全部で20人くらいか、そこにいる誰

もが期待を孕んだ瞳でそわそわとこちらを見ている。

ああ……心が浄化されていく……。

そうっ。これだよ、これ。最近はずっと残念美少女って扱いだったからなあ。ここらへんで一回、私のイメージをびっしりとさせないとね。

「みなさんこんにちわ。リリストアルト一の最強美少女、カタリナ・フロムです。」

もしかしたら私の美しさに怖気づいてしまうかもしれないが、どうぞ自由に質問してくださいね」

「カタリナお姉ちゃんの妹、アネット・フロムだよ。」

今日はお姉ちゃんの付き添いできたんだ。よろしくね?」

「ええー、タニアちゃんの方が可愛いよね?」「ねー」「それが地球と繋がる機械?」「はいはい、お姉ちゃんは恋人いるの?」「アネットちゃん、まさか君は僕の天使なのか……?」

【あつ】

【Oh……】

【あれなんか一気にコメントが減ったな? 一体ナニをしてるのかねえ?】

座布団を離れ、一斉に詰め寄ってくる子供達。

あ、圧が凄いつ。ってか、今一人やべー奴いなかった? いくら子供とはいえ私のア

ネットは絶対に渡さないよっ。

と、私が混乱する中、アネットが「お姉ちゃんが困ってるじゃないですか、質問するなら一人ずつにしてください」と一喝し、彼らはすんなりと大人しくさせた。

さ、流石はアネット。リスナー皆のママになるだけはあるっ(？)。

「ねえねえっ。防人ってことは浄化の力も使えるんだよね？」

ちよつとここで使ってみてよっ」

「あー、わたしも見たいっ」「わあ、楽しみだなあ。どんな術なんだろ……？」

「い、いや、それはあ……」

狐族の少女の無茶ぶりに、思わず冷や汗が流れる。

成人が近づいてきた影響で私の力も不安定になってきた。こんな場所で使えば最悪誰かを怪我させてしまう可能性もあるだろう。

う、うーんでもアネットもまだ習ってないから使えないし、常者の皆なら怪我也すぐに治るし、ちよつとくらいならー

「ひゃっ。

……ご、ごめんなさい。私達、今は特殊な事情で使えなくてですね……」

「えええ〜」

【意思よわよわじゃんwwww】

【なるほど、これが霊圧ですか】

アネットの「分かってるよね？」という冷たい視線を受け、慌てて頭を下げる。

当然降りかかってくるのは生徒たちの非難轟々の声。

うう、私だって皆に見せたかったんだよ？

でも流石の自分の自尊心プライドの為だけに子供たちを危険に晒したくないからさ。いや、ほんとはだよ、うん。

「ぶーぶー」「なんだよ、嘘つきじゃねえか」

「いいの、カタリナお姉ちゃんは駄目駄目なのがいいんだから」

「うぐっ」

何故かふんすと胸を張るアネット。

そ、それ全然フォローになってないからね……。

子供たちの視線の質が変わりゆくのを如実に感じて、私は心の中でため息をついた。

「アネットちゃん凄いつ。」

クーマくんでも1分以上乗れなかったのにつ

「えへへ。でしよでしよっ？」

「なにい、俺だつてそれ位やれるつてのっ」
時刻は3時過ぎ。

寺子屋横の空き地でアネットたちがタブレットを持ちながら竹馬などで遊んでいるのを、私は縁側に座つてボーと眺めていた。

どうやら寺子屋は2時くらいには終わるらしい。その終了間際にお邪魔した私たちはあの質問タイムの後、こうして一緒の時間を過ごしているのだった。

勿論私も最初は鬼ごっこに混ざつたりしてー結局、1時間で疲れてしまった。

いやあ、子供つて本当にすごい。あんな小さい体のどこにあんな体力があるんだろうなあ。

「……元気にやつてるようじゃな」

「あ、マハタ様。ありがとうございます。来てくれたんですね」

「当然じゃよ。住民たちの幸せに気を配るのが僕の仕事じゃからな」

どこからともなくやつてきたマハタ様と挨拶を交わす。

彼女は私の横に腰を下ろすと、アネットたちの歓声に目を細めた。多分マハタ様も私と同じ感情なんじゃないかな。

「そうだ。どうして私たち稀人はここでみんなと一緒に勉強しないんですたっけ？」

見た感じ人数に余裕もありそうですし……」

しばらく続いた賑やかな沈黙。

雑談がてら気になったことを質問してみると、マハタ様は一瞬だけ眉をピクリとさせ、すぐにいつもの落ち着いた表情で話し始めた。

「言ったであろう？ 稀人は特別だと。」

稀人はここに流れ着いた時点で、寺子屋で教えるような計算や読み書きなどの基礎的能力が何故か身に付いておる。

フクロロには、というより儂以外の常者たちにはそれより上の教育は難しいじゃよ。じゃから儂がお前たち専用の教材を作って、お主たちの親にその教育を任せているわけじゃ。……情けない話じゃろう？」

「い、いえいえそんなことありません。」

マハタ様を作ってくれた教材、凄くおもしろかったですよ。色々と小話を書いてあったり、所々漫画になってたりして」

「そうか。それならよかったのじゃ」

私から視線を外し、口角を上げるマハタ様。

それがどこか辛そうに見えるのは私の気のせい、なのかな？

「……のお、お主はこやつらと一緒に子供時代を過ごしたかったと思うか？」

「え？」

「いやなに、もしもの話じゃ。深く考えんでもよい」
朗らかな笑みを浮かべて、マハタ様が聞いてくる。

うーん、もしもか。確かにそうなたら今よりはもつと賑やかな子供時代を過ごして
いただろう。友達だって沢山できたはずだ。でもそれはー

「ー多分、私は本当の家族が欲しかったんだと思う。

だからここでの生活は十分幸せだったよ」

『どうするのよ、あなた。』

このままじゃ、あのニュースの男みたいにー』

『そんなこといっても仕方ないだろう。それこそー』

度々蘇ってくる過去の断片。

そこにリリスこっトアルトちの家族のような温かい時間はない。いつもほの暗い空気に包
まれていた、そんな感じがする。

だから多分ここでの日々は救いだったのだ。私はお父さんたちに、そして目の前にマ
ハタ様に救われてきた。

……なんて、ちよつとかつこつけすぎたかな。

「あーっ！ アネットちゃんのお姉ちゃんが浮気してるよっ」

「……へえ？ ほんとう、お姉ちゃん？」

「い、いやっ？ 今はちよつと真面目な話をしていたというかー」

「浮気者は全員そういうんだよっ」。

みんな、お姉ちゃんを捕まえちゃってっ」

「任せてっ」「ふ、我が天使の頼みとあればっ」

「ちよ、みんな聞いてー」

嬉々とした表情を浮かべる子供に抱きつかれ、もみくちゃにされる私。人の切れ目から見えるのは、アネットの楽しそうな笑顔。

うぐぐ、アネットも冗談だってわかったやってるでしょ。これっ。

「かっかつ、儂と情を交わすには百年早かろうよ」

私たちの背後でマハタ様が心底おかしそうに笑う。

まあ、マハタ様の気分が戻ったならよかったかな、うん。

第二十八話 祭りの前日

「それは向こう側に頼む」「了解ですゾウ」

常者たちの声が忙しなく行き交い、舞台やベンチなどの設営が着々と進められる大衆広場。その中央に悠々と鎮座し、枝葉を揺らして彼らの様子を見守っている満開間際の桜の木。

そんな爽やかな熱気を孕んだ朝の大衆広場を、私たちは家族四人で歩いていた。

「それじゃあ、私たちはここまでだから。」

カタリナたちもちやんと準備するのよ?」

「はい」

少しだけ寂しそうな顔で、お母さんとお父さんがマハタ様たち執行役員の元へ合流する。彼らの中にはタニア達の両親とシルビオの両親の姿もある。明日の祭りに向け、彼ら大人組と私たち子ども組は別々に準備する手筈になっていた。

「よ、今日はよろしくな。カタリナ、アネット」

「はい、よろしくです」

「むー」

奥の方で待っていたシルビオを見て、頬を膨らませるアネット。どうやらまだ警戒心はぬぐい切れていなかったらしい。

将来的に「お姉さまに近づく人間は絶対殺すマン」化しそうで、お姉ちゃん心配です。でもアネットの歳ならこれくらいが普通な気もするし……うーん、子供って難しい。

「今日は配信してないんだな。」

「このところ毎日やってたのに、珍しい」

「ええ。リスナーのみんなには前知識なしで楽しんでほしいですし……それに配信に気を取られていたせいで重大な欠陥を見過ごした、とかがあつたら罪悪感で夜も眠れませんからね」

花見当日は地球との境が曖昧になるゆえ、流入してくる穢れも増える。そのため、祭りの期間中は村の中心を囲うように特別製の境界が張られるのだ。

私たち子ども組の仕事はその境界の点検。村人の命を守る大切な仕事だ。

……まあとはいっても、それで欠陥が見つかったこともないし、数百年前の歴史の中で今まで一度も破られてないらしいから、ほぼほぼ杞憂に過ぎないんだけどね。

「ってか、何か今のフラグっぽくなかった？」

「やばい、もしかして私のせいで当日重いしなかったミスが起こったりする？」

「脳内でそんなパニックに襲われている中、三人を謎の沈黙が包んだ。」

見れば二人とも妙に神妙な面持ちで私の方を見つめている。

「な、なんですか？」

私、そんなおかしいこといいましたっけ？」

「ううん、何でもないよ。」

残念なだけじゃないのがお姉ちゃんの良いところだもんね」

頬を上気させて、私の手を強く握ってくるアネット。

うう、それは普段は残念だぜって言ってるようなもんだよなあ。

うそっ？ 私の信頼度、低すぎっ!？」

「……アネットって意外とカタリナに辛辣だよな。」

てつきりサーニヤみたくカタリナのイエスマンになると思ってたぜ」

「違うよシルビオ。これは愛の鞭、なんだよ。」

ほら、ここでわたしが色々世話を焼いておけば、お姉ちゃんの心に私を強く刻み付

けられるでしょ？」

「そ、そうか」

アネットのやべー理論に、シルビオはぎこちなく頷いてそのまま黙ってしまふ。

ちよ、ちよっどっ!?! まさかの逃げの一手?!

おい、そんな「まあそういう愛の形もあるよなあ」みたいに遠い目をしてないで、可

愛い妹の闇を暴いた責任を取ってよ、お願いだからっ。

ど、どうすればいいんだろう？ 聞かなかったことにするのが正解？

いや違う。見て見ぬふりはもうやめだ。ここは姉としてこのヤンデレチックな考え方を正してあげないといけないんだ。ちよつと愛情表現が不器用なだけなんだよ、きつと。

……そうだといいなあ（願望）。

「そ、そんなことしなくても私はアネットを忘れたりしないよ。」

お姉ちゃんとしてはアネットには子供らしくもつと甘えてほしいなあ、なんて」

「えへへ。」

「ーそれじゃあ今日の夜もいつものあれ、やってくれるよね？」

「アツ、はい」

そう言われては断るすべもない。

アネットのほの暗い瞳に魅入られ、つい頷いてしまう。

いつものあれーつまりは布団の中でのスキンシップ（意味深）。間違えた、ただのくすぐりあいだ。

アネットは「いつもの」とか言ってるし、毎日ねだってくるんだけど、最初の日以来一度もやっていなかったりする。……だって何か視線がしつとりといていて怖いんだ

もの。

でもとうとう、回り込まれてしまった。しかもアネットたちと同じ家で眠るこの日に。

……何となく嵌められたような気がするの、勘違いなんだよね？ そうだと言ってよ、アネットっ。

「も、もしかして今日俺たちは別の場所で寝た方がいいか？」

マハタ様に言えば——」

「変な気づかいはしないで大丈夫ですっ。

今日は一緒に、せめて隣の部屋で寝てくださいいっ。私の為だと思ってお願いです、シルビオっ」

「お、おう」

「むふふ。ようやくお姉ちゃんど……」

必死に縫りつく私に、シルビオが何故か恥ずかしそうに顔を逸らし、アネットが不気味な笑みをこぼす。

右手には頼りない幼馴染。左手には姉の貞操（？）を狙ってくるやばい妹。

一体私、これからどうなっちゃうの〜!? （絶望）

……はあ、頑張ろう、私。

「こうして、みんなで寝るのも結構久しぶりね。

あの百人一首大会の夜以来……つてあの時はアネットはいなかったら4人で寝るのは初めてかしら」

「ですね。まあでも安心してください。

お姉さまには決して触れさせませんから」

「そ、そう」

さて時も過ぎ去り、残り二人と合流して結界の点検を無事に済ませた私たちは、女子4人でマハタ様の家の一室で寝ころんでいた。

向きは横一列で、順番は左からタニア、サーニヤ、私、アネット。

いつものごとくタニアあの隣ねをキープするサーニヤに、タニアが眉をハの字に曲げた。

私達稀人の家は村の中心からは結構離れていて、結界の中にない。それゆえ毎年花火前日はこうして子ども組で集まり、一緒に夜を過ごす通例だった。

因みにシルビオの野郎は隣の部屋でソロタイムの満喫中である。うう、私もそつちに混ぜてほしいくらいだよ。

「こほん。」

明日は常者のみんなが色んな出し物を用意してくれてるんですよ。楽しみにしててくださいね、アネット」

「……うん、わかった。楽しみにしてる」

私の話題展開も通じず、蠱惑的に微笑むアネット。

何か妙に恍惚としてるし、明らかにそれは祭りに向けられたものではない。

ここ、こうなったらそういう雰囲気にならないようタニア達を巻き込むしかない。

幸い二人ともストライクゾーンからは程遠いし、女子同士のスキンシップだと思えば何とかなる、はずっ。

「さ、さあそれじゃあいつものあれの時間ですなっ。

みなさん、準備は良いですか？」

「……そんなのあつたかしら？」

「全く、また馬鹿なことを言っているんですか？」

疑問符を浮かべる二人の元へこっそりと近づく。

ガードも緩いし、狙うは近くのサーニヤだ。彼女の脇に勢いよく両手をつっこみ、こしよこしよと動かす。

「ちよ、ちよっと、や、やめっーあははっ。

こんの、馬鹿カターーふふっ、ああもうっ」

「あーっ、また浮気してるっ。

それじゃあこっちからっ」

「……それなら私はアネットね」

涙目を浮かべて抵抗するサーニヤ。各々好き勝手にくすぐりはじまるタニアとアネット。

そのまま私たちは昔に戻ったかのように、お互いにくすぐりあったのだった。

次の日、目を覚まして凄惨な現場を確認したアネットは、半目でこんなことを言ってきた。

「カタリナお姉ちゃんはやっぱり変態さんだね」

「うぐっ。今度は否定できないっ」

第二十九話 【生配信】 ナキア村 春のお花見祭りっ！

ナキア村の花見祭りはまだ日も登りきっていない早朝から始まった。

各戸を訪ね歩き、手提げ提灯と例の紙を配布していくお父さんたち大人組。渡された村人はそれを持って中心の広場に赴き、各々割り当てられた場所で談笑に興じる。

約1時間に渡るその工程が終わり住人全員が広場に揃ったら、とうとう祭りの開始だ。

「……以上で、開幕の挨拶を終える。

それでは、ナキア村の繁栄とお主たちの長寿を祈ってー乾杯なのじゃっ」

「かんぱーい」

【おまいらビールはもったな!!】

【乾杯じゃこらあああ】

【くうう、アルコールの優しさは五臓六腑に染みわたるで】

【やっぱこれよなあ】

【(ビールのアイコン) × 3】

【カタリナちゃんを待つこと幾星霜、とうとうこの日がっ】

「うう、買い込んだ食材が無駄にならなくて本当に良かった……」

壇上に立つマハタ様の音頭と共に、会場に座る常者たちが盃を呷あおった。のびやかな青空の元、桜の木を中心に一気に酒気に包まれる大衆広場。

また今が休日どの朝ということもあるのか、同時と接続せつ者数は3166人と、いつもよりもはるかに多い数字記録していた。

流石は私。これならV t u b e rのトップを取るのも夢じゃありませんねっ。

全能感に包まれながら、意気揚々とタブレットの前で手を振る。私たちが座るのはフロム家のために用意されたシートの上。お父さんたちは諸々の警戒で忙しいから、このスペースはほほほほ私たちの独壇場だ。

「はい、というわけで今年も始まりました。ナキア村、春のお花見祭り。」

実況は私、カタリナ・フロム、解説は妹のアネットでお送りしていきます。

……アネットさん、祭りの様子はいかがですか？ 正直、大の大人たちが朝から酔っぱらう姿はあまり子供に見せたいものではありません」

「うーん。元気があって大変よろしいっ」

「ヤ○ザキ春のパンまつりっ!?! (幻聴)」

「祭りの実況って何や……?」

「◇子供に見せたくない めっちゃ辛辣で草」

【!? ってか、しれっと新衣装きてるじゃん】

【お、まじだ】

【かわええええええええ】

「あー、これはマハタ様たちに無理やり着せられた祭り用の着物ですよ。

着るのが大変でしかも動きづらいので、今後もほとんど着る機会はないと思いますね」

【まじで？ めっちゃもつたいなくね？】

【祭りの日しか着ないとか、特別感があつてそれはそれでアリ】

【今日は待ちに待ったカタリナちゃんとのデートの日。】

緊張で胸がはち切れそうな僕の前に現れたのは、艶やかな着物に身を包んだカタリナちゃん……】

【おい、何か怪文書ニキいるってww】

「……お姉ちゃん、オシヤレとか気を付けたら絶対もつと可愛くなるのに……」

私が羽織った着物（赤い生地に菊の花(?)が彩られたやつ)を見せていると、アネツトが口をとがらせてそう言った。

うう、分かつてはいるんだけど……可愛さと利便性どっちを取るかと言われたら、絶対に後者がいいからなあ。

男のために脱ぐ肌はないのですよ（最低）。

と、そんなやりとりをしてしている間に、祭りは次の段階へ。

ここからは有志たちによる出し物の時間だ。

用意された舞台の上で、店の店主が自身の商品を紹介するためのパフォーマンスをしたり、各分野の腕自慢たちがその能力を競い合ったり、寺子屋の子供たちが短い演劇を披露したり。

誰かが何かをする度に歓声が上がリ、酒の匂いが強くなつていく会場。

ただ演者の一人が言葉を囁んだだけで大爆笑が起ることを考えれば、その末期感も知れよう。

「おーいつ、カタリナちゃんたちは楽しんでるかく？」

ちよつと酒が足りないんじゃないか、ええ？」

「こら、なに未成年に飲酒を進めてるんですかつ。」

私だけならともかく、ここにはアネットもいるんですよ？」

「あつはつはつ、こりやあしっけいしっけい」

大事な妹を酔わせようとしてきた不屈き者を追っ払う。

酒は飲んででも飲まれるな。大人には容量用法を守って楽しい飲酒ライフを送ってほしいものである。

「……真面目モードのお姉ちゃんもあり寄りのあり。

もしかしてこの状態が続けば、ずっと守ってもらえる?」

【分かるマン】

【普段とのギャップがたまらんのよなあ】

【それだ】

【もはやアネットちゃんの異常性について誰も触れない件について】

妙案を得た、といわんばかりに瞳を輝かせるアネット。

昨日の夜以降、何となくアネットの闇が薄くなったように感じるのは私の気のせいか

な? (願望)

【カタリナちゃんたちは何か出し物したりしないの?】

「ですね。私たちは時間の確保が難しいので、演者側としては参加できないんですよ。

ただそれも見習いの間だけの話です。

成人となったタニア達は普通に毎年出るはずですよ」

【ははあなるほどねえ】

【それじゃあ来年は演者側に回るかも?】

「ですす。

何もなければ配信は続けていく予定ですので、来年は楽しみにしてくださいね」

「これからもうちのお姉ちゃんをお願いします、だよ」

【はっ】

【よかったよかった】

【よっしや マジで楽しみ】

【でもその前に俺たちの方が楽しめるようになってないとなあ】

【→おいやめろ 現実を思い出せるんじゃないやねえ】

【ああ……何で俺たちは週に5日も仕事してるんだ……】

【あれ、今日は何曜日だっけ……？ あ、頭がががが】

なんてやり取りがありながらも宴は進み――

「えー、次は「村一番の巨人漢」VS「村一番の巨人漢」 像族
のフアンティアあ」VS「空前絶後のちびっこファイター 守人のタニア&サーニヤ」

本当の巨人漢は誰じゃっ!?

ナキア村恒例、大食い王決定戦なのじゃっ」

【紹介文被ってるじゃんww】

【ダークライ粹来たww】

マハタ様の煽りに合わせて、各々壇上の上でポーズをとる四人。

タニアに至っては、ただ右手を挙げただけで文字通り会場の声が湧いた。

「……シルビオ、今年は誰が勝つと思いますか？」

「そりゃ、なあ。言わんでも分かるだろ」

「??」

結末の見た戦いに、近寄ってきたシルビオと一緒にため息をついたり（結果は例年通り、姉妹の圧勝。あの二人、あんな見た目で化け物みたいに食べるのだ）――

「第七回のあて大会の勝者は――シルビオ・グラントっ」

「お前たち、応援ありがとなー」

「かつこいいく」「抱いてく」

シルビオの爽やかな笑顔に文字通り、きゃーという黄色い声を上げる女性陣。

自身よりも若い男の人氣に、村の男連中は露骨に渋い顔を浮かべていた。

「うーん、相変わらずいいけ好かない奴ですな」

「イケメンで運動もできるとか俺たちの立つ瀬がないんだが？」

「→安心しろ もとからだ」

「唯一の救いは本当に脈がなさそうな感じ……?」

なんて悲しい一幕があつたりしてー

「……みんな、楽しそうだったね」

ー楽しいお花見の終わりは近づいてきた。

時は夕暮れ時。茜色の空の元、広場に集まった村人たちが各々の紙を取り出ししていく。今の時間だけはお父さんたちと一緒だった。

ぼつり、とアネットが柔らかな感嘆を零す。

楽しそう、か。確かにその通りだなあ。今日は村人の誰もが笑っていた。辛いことなど何もないかのように、あるいはそれを洗い流そうとするように。

「ですね。」

「……だから私はここにいてみんなが好きなんですよ」

『うわつ、イタすぎだろ(笑)』『黒歴史確定w w w』『××中学校×年×組 ○○君、先生が呼んでますよ〜?』

アネットの言葉に、私は大きく頷いた。

ノイズのように頭に入り込んでくる誰かの言葉。

なぜか今日は多いそれらは、ここにいて忘れるから。その痛みから目を逸

らせられるから。

感傷のまま、私は手の平を見下ろした。

右手に握られているのは「ここにいない誰か」へ向けた言葉が乗せられた紙飛行機。今から私たちはこれを空へと飛ばすことになる。

「アネットは誰に向けて書いたんですか？」

「んふー、内緒。カタリナお姉ちゃんは？」

「残念、私も内緒です」

【結局、何も分からないじゃんwww】

【隠された短冊 そこには互いに向けた秘めたる思いが書かれていてー】

【勝手にシチュ変しないでもろて】

お父さんたちの横、二人で忍び笑いを漏らす。

……全く、言えるわけないじゃないですか。

画面の向こうの彼ら^{リクスナーたち}に対する感謝が書かれてるなんて。

やがて、終幕の時はやってきた。

マハタ様の魔法によって生み出された竜巻に向け、村人たちが紙飛行機を飛ばしていく。

数百もの思いを抱え込んで尚、轟音を立てて回り続ける風の渦。

そんな光景に圧倒されていると、見覚えのある少女の珍しい表情を視界が捉えた。

「ちよつとごめんなさい。アネット、これ持つててください」

「え？ ちよつとー」

アネットにタブレットを預け、少女の元へと駆け寄る。

あの顔はきつと地球の彼らには見せたくないだろうと思つて、普段と違う彼女を放つておけなかつたから。

「ん、カタリナか。配信とやらはもうよいのか？」

「ええ。今はアネットに任せてあります」

彼女ーマハタ様は桜の木の所で所在なさげに佇んでいた。

突然やつてきた私に、マハタ様はそうかと頬を緩ませると、再び桜の木の方へと視線を向ける。

血色の空に向かってどこまでも伸びる幹、ひらひらと落ちてくる花びら。

あ、そうだ。ここは確かあの人の墓だ。

「リリストアルトこでの生活はどうじゃった？」

「え？」

まるでそれ自体が終わりかのような言い方に、思わず疑問符が漏れる。

今のは聞き間違い、かな？ それとも……？

「ふ、何でもない。

年寄りの相手はもう十分じゃ。ほれ、あ奴らの元へ行つてやれ。きつと娘の帰りを待っているのじゃ」

雰囲気に戻して、機嫌よくしつしと手を振るマハタ様。

何だか誤魔化されたような気がしながらも、言いつけ通りにアネットたちの元に戻りー

その日の夜、私は全てを思い出したのだった。

第三十話 異世界リリストアルト

「あら、今日は学校に行かないの？」

「う、うん。ちよつと体調が悪くて……」

上場企業に勤める父親、そして専業主婦として家事全般を担う母親。

そんなごく一般的な家庭に生まれた俺の人生が狂いだしたのは、中学生に上がった頃だった。

きっかけは授業が嫌だとかそんな些細な事だったと思う。

でも当時の俺はどうしようと本気で悩み、最適な選択ずる休みをしてしまった。人間、一度墮落してしまえば元に戻るのには難しい。

一日、一週間、一か月と不登校期間はずるすると伸びて、やがてどうやって自分が学校に行つていったかすら忘れてしまった。

「ね、ねえ本当に危ないんじゃないかしら、これ。

もしニュースみたいになったら……」

「……まあ好きにやらせればいいんじゃないか？」

あいつだっていつかは理解するだろ。それと来週の土曜日だが――」

俺に苛めなど何か明確な理由があるわけではないのだ。事情を聴きに来た担任の先生にも、ただ「何となく行きたくなくて」とか「行けたら行きます」とかそんな言い訳を返すばかり。

そんな俺の態度に困り果てたのか、いや実際どうすればいいかわからなかったのだろう。最初の方は甲斐甲斐しく世話を焼いてくれた母親も、次第にパートなどで家を空けるようになった。

年端もいかない子供に与えられた、消費つくせないほど膨大な時間。

俺はその大半をリビングに設置された一台のパソコンの中で過ごしていた。

ここじゃない何処か、顔も知らない誰かと繋がれるのは思いのほか楽しかった。その中には俺みたいな境遇の大人たちは沢山いたし、時たま同年代の子たちを見かけることもあったから。

「配信者……?」

そんな折、一つのライブ配信サイトが人気を博してきた。

視聴者との相互コミュニケーションが売りの一つだったそこでは、何十人という有名配信者たちが日夜生放送を繰り返していた。

凸待ち配信、歌ってみた、ゲーム配信。時にはリスナーたちや同業者と喧嘩したりながら、画面の向こうで楽しそうに話す彼らの姿はすぐく輝いて見えた。特にやるべきこ

ともできず、ただ無為な時間を過ごしていた俺にとつては。

多分俺は何者かになりたかったのだ。

引きこもりの自分から抜け出して、彼らのように周りに必要とされる存在になりたかった。そうしないと、ここ数年でわずかに残されたちっぽけな自尊心すら守れないから。

だから、貯めていたお年玉をはたいて機材をそろえ、配信者になったのだ。

「えー、と俺の名前は[×]。

きよ、今日はたまたま学校に行っていないから、暇潰しに配信でもしてみようかと思っただ」

今思い返しても最初の配信は酷いものだった。どもりまくりで、無言多し。雑談配信と言いながら大した雑談も出ていない。

ただ当時は新規配信者というだけで注目を浴びる時代で、二回三回と繰り返せば固定ファンが何人かついてくれるようになった。

「うわあ。△△さん、それは相手の方が明らかに悪いわ。

やっぱり社会はクソだよな。引きこもりの俺こそ最強よ」

「[×]、あんがとな ちよつと元氣出たわ」

「△△さんはそれでええんか、？」

【現役中学生のありがたいお言葉だぞ、聞けよおら】

【社会云々の前に、お前はまず学校行けよww】

「うっせ。俺みたいな超天才にも出来る事が出来ないことがあるんだよ」

イメージは昔の俺、根拠のない全能感に溢れていた小学生のころの自分。

当時はまだネットが一般には普及していなかったゆえに、俺みたいな子供配信者は珍しかったんだろう。みんなの悩みに乗っただけだけで、賑やかな時間が過ごせたものだ。

【お、○○さんも配信してるじゃん。ちょっと凸ってみてよ】

【いいね、楽しみ】

それが崩れ出したのは、そんなコメントにのせられて、とある先輩配信者に電凸（配信中に電話を掛ける事）してからだだった。

「あ、あー。いずれは○○さんを越える男だから、俺は。

そこんところよろしくう」

「ぶふっ。おう、そうか頑張れよ」

【うわ、きつつ】

【なんだこいつ笑】

【○○、イタすぎて笑っちゃってるじゃんww】

【よろしくうーww】

当然配信者が違えば、ファン層も違う。

そんなこともわからなかった俺は、いつもの通りのキャラでいつてしまつてーそしてネットの玩具になった。

【○○から来ました〜】

【ねえねえ、××中学校の人って本当なの〜?w】

【あれやつてよ、よろしくうってやつ笑笑】

今までのいじりとは違う純粹な悪意に染め上げられるコメント欄。どこから広まったのか、学校や両親の勤め先など晒される個人情報。

そこからはあまり思い出したくもない。

アカウントを消してもネット上に広がった情報は消えない。まだそこら辺の基準が曖昧だったこともあるんだろう。粘着行為は次第にエスカレートし、しまいには自宅などにまで押しかけられるようになった。

周囲や近所に広まっていく根も葉もない噂、ネット文化に無理解な両親、当時異常なまでに強かった「引きこもり」に対する風当たり。

それら全てが合わさり、世界全てが敵に回ったかのような感覚に襲われて、俺は首を、首をー

「っ」

目が覚める。

視界に広がるのは、朝日に照らしだされたマハタ様の部屋。

「あ、ああっ」

胸の奥にこびりついた絶望を剥がすように、嗚咽を漏らす。背中が、気色の悪い汗でびっしょりと濡れていた。

酷い、夢だった。最悪な人生だった。

……いや、本当にあれは夢だったのか？

日本人として生まれた俺が、些細な理由で不登校になって、それから配信者として活動してー

「ふむ。やはり二人とも思い出したようじゃな」

見れば部屋の中には私とマハタ様、そしてアネットがいた。

タニア達の布団は片付けられていのを見るに、他の二人はすでに起きているらしい。と、それはともかくだ。

「マハタさま、どういうことですか？ 何か、知っているんですか？」

「……その前に顔でも洗ってくるとよい、お主ら二人とも酷い表情じゃぞ？」

なに、儂は逃げも隠れもせんよ」

マハタ様の提案にゆっくりと頷き、家の外に設けられた井戸で顔を洗う。

ついてきたアネットも涙目で黙るばかりで、二人の間に会話らしい会話はなかった。普段を考えれば俺ーじじゃない、私の様子がおかしければすぐにつつついてくるだろうに、本当に珍しい。

でも……よかった。正直、普段通りにふるまえる余裕なんて全然なかったから。

私達が二人でマハタ様の前に座ると、彼女は「ふむ、どこから話そうか」と居住まいをただした。

「まずはお主たちに嘘をついていたことを詫びねばならんな。

稀人はただ人間の姿を模しただけの流者、といったな。あれは間違いじゃ。

稀人とは客人まれびとのこと。輪廻の歯車から零れ落ちた人間の魂が姿を変えて転生した存在、それが稀人じゃ。

そしてお主たち稀人がここを訪れる目的はただ一つ、魂の穢れを癒すためじゃ。ここでの日々は全てそのため存在している。

特にカタリナには身に覚えがあるのではないか？」

「……そういう、ことですか」
『ねえお父さん。』

私、配信者になりたいっ』

マハタ様の話は衝撃的ではあるものの、意味不明というわけではない。

温かい家族、そして摩訶不思議なタブレット、そして今までの配信活動。

それら全ては穢れーつまりは前世の後悔や絶望を解消させるものだった。

そう考えれば今までのほとんどに納得がいくし、稀人それ自体が私と同じ転生者かもしれない、という部分まではある程度予想していたのだ。

何とも言えない感傷に浸る中、マハタ様は一瞬だけ息を吐いて続ける。

「さて、ここからが本題じゃ。

また稀人を語るのにもう一つ大事な要素として、依代という流者がある。カタリナにとってのタブレット、アネットにとつてのキーホルダーじゃな。えてしてそれらは前世と深く結びつきのある形で現れるらしい。

稀人と同時に流れてくるのか、あるいは数年たつてからか。それは当人によつてまちまちじゃ。じゃが、いずれにせよそれを受け取つて一か月ほどが経つとその稀人には二つの選択が与えられる。

輪廻の輪に戻るか、それともここーリリストアルトに骨をうずめるか、じゃ」

「……」

「ただし後者には一つだけ条件がある。

ここを選んだ時点でその魂は輪廻の歯車からは完全に外れ、死した後はリリストアルト存続のためのエネルギーとなる。

つまりもう二度と地球の地を踏めなくなるのじゃ」

『このまま成人化が進めば、カタリナは近いうちに選択を迫られることになる。』

永遠の模索か、刹那の安寧か、自分で決めることになるのよ』

蘇るのはアネットをお披露目した日のタニアの言葉。

輪廻の歯車に戻るか、リリストアルトに残るか。

なるほど、そういう意味だったんだ。

「……までは良いか？」

では問おう。お主たちはどうしたい？」

どこか寂しげな色を含んだ視線が私たちを射抜いた。

第三十一話 夢の終わり

「……までは良いか？」

では問おう。お主たちはどうしたい？」

呆然とした頭の中に、マハタ様の声が響く。

それに私は答えを返せないでいた。突然告げられた事実^{じじつ}に情緒が追い付いていなかったし——何よりどちらの道も痛みを伴うものだったから。

「……まあよい。手遅れになるまでに3日程度の猶予はある、その間にゆっくり決めればいいのじゃ。」

最も、それを過ぎると本当に戻れなくなるがの」

恐ろしい言葉を零して、肅々と席を立つマハタ様。

部屋の中にとり残されたのは、青ざめた表情で座る私とアネットの二人。

アネットは、私の妹は、目を数度瞬かせた後に緊張した様子で聞いてきた。

「お姉ちゃんは、どうする？ どっちを選ぶ？」

「私、は……」

どう、したいんだろう？

地球に戻るか、リリストアルトに残るか。

ここでの幸せな生活を考えれば、大好きな両親や村人たちのことを思えば、後者を選びたいのが本音だった。

でもそれが今世限りで終わるとなれば話は別。どうしても尻込みしてしまう。死ぬのが怖い？

そうだよ、怖いのだ、自分という存在が消えてしまうのが。

今までは死後について何も知らなかったからまだよかった。次の^{らい}人生は今よりもましになっているはずだ、と好き勝手妄想出来た。

だけど今は違う。その答えを、ここでの生活に未来がないことを知ってしまった。マハタ様の言い方的にここでの転生は望めないだろう。

可能性がなければ、死んだ先にあるのはただの無だ。何かを見ることも感じることもできない、文字通りの無。

今の私には、それがものすごく怖かった。

なにせ身を以て知ってしまったから。一つの人生が絶望で終わっても、それが次に持ち込まれるわけじゃないことを。地球に戻りさえすれば、永遠に幸せを求め続けられることを。

それに例え前世と同じような目に合おうと、リリストアルトさえあれば――

……あ、そうだ。

もしかして戻った後に改めて穢れを受けたら、もう一度ここに戻ってこられる……？
一抹の希望に突き動かされ、急いでマハタ様を追いかける。

同じ疑問を目を丸くした彼女に投げかけると、マハタ様は神妙に頷いた。

「ふむ。原理で言えば可能じゃな。

その身に秘めた穢れが規定以上であれば、何度でもこちらに戻ってこられる」

「そっか」

それならあつちも戻ったとしても、もう一度会える。お母さんたちと完全に離れ離れになるわけじゃない。

それは……うん。すごくうれしいな。

胸に広がる安堵と歓喜。

そんな甘い蜜を打ち砕くように、マハタ様は「ただしじゃ」と続けた。

「二度歯車に戻った時点でここでの記憶は完全に消される上に、稀人はその魂の願いを応じて形を変える。

それにここは途方もなく広いからの、もし流れてきたしてもカタリナおカタルナではない誰かとして、何も知らぬの状態でここどこかに、という形でじやろうな」

「っ、そん、な……」

あんまりな事実には、目の前がくらくらと歪む。

今ここに居る彼女たちに抱いてる感情は、間違いなく私の記憶に基づくものだ。もしそれが無くなってしまえば、どうしてここに来たかったすら忘れてしまう。

互いに記憶がない状態での再会。

果たしてそれに何の意味があるんだろう？ 永遠の別れと何が違うんだろう？

「ど、どうにか向こうに行つた後も覚えていることはできないんですか？」

ほら、魂？の奥に刻み込めるとかなんとかして――」

「――無理、なんじゃよ。」

お主も前世でこの存在など露も聞かなかつたじゃろう？

地球に生きる彼らとリリストアルトで暮らす儂らの人生が交わることは永遠にないのじゃ。

……その意味でお主のタブレットとやら特別だつたんじゃよ。まあ稀人の帰還と共にその依代も消失するゆえ、それももう終わりじゃがの」

「っ」

「……お姉ちゃん」

マハタ様の言葉により、最後の希望すら打ち砕かれる。

ただ暗然と立ちすくす私の手を、追いついてきたアネットが優しく握りしめた。

「まあ悔いのないよう、とくと考えると良い。

もし質問等があれば、儂やタニアたちに聞けば答えてくれようぞ」

ひらひらと手を振って、踵を返すマハタ様。

彼女の姿が廊下の奥に消えると、アネットは徐おもむろに話し始めた。彼女と繋いだ手からは、湿気を含んだ肌と冷たい体温が伝わってくる。

「私はね、地球に戻ろうかと思ってる。

みんなのおかげで久々に笑えたから。ここのおかげで人生だって捨てたもんじゃな
いって思えたから」

「っ、……」

アネットが笑う。悲し気な、どこか清々しい顔で。

私はそれに一瞬だけ息を呑み、すぐに目を逸らした。

俺だって同じだ。リリストアルトのおかげで救われた。

俺の自尊心が回復したのはみんなが優しくしてくれたからだ。人間不信にならな
かったのは俺の性格を周りが受け入れてくれたからだ。

でもっ、それを選んでしまえば大事な人たちへの気持ちも永遠に失ってしまう。彼ら
は俺を覚えているのに、俺は彼らとの記憶をさっぱりと忘れて全く別の人生を歩んでし
まう。

貰ったものを何も返せぬまま、リリストアルトのみんなが顔も知らない誰かに思いを馳せているのを眺めることすら出来なくて――

――そんなの、あんまりじゃないかつ……。

目尻が熱くなり、透明な何かが瞳からこぼれてくる。

アネットはそれを一つ一つ丁寧に拭くと、一瞬の逡巡の後に頬を緩めた。彼女の顔に優美な微笑が浮かぶ。

「きつとね、泡沫うたかたの夢みたいなものだったんだよ。

だから――カタリナお姉ちゃん。私と一緒に地球に戻ろう？ 私、お姉ちゃんがどこかにいると思えば、向こうでも頑張れると思う」

「っ……」

アネットの、この世界の妹の言葉に曖昧に頷く。

胸に募った感情を代わりに吐き出すかのように、両目からは涙が何処までも流れていった。

第三十二話 幼馴染

「よ。ひでえ話だっただろ？」

マハタ様との対話を終えて家を出れば、そこにいたのは幼馴染三人衆だった。

シルビオが相変わらぬ澄ました態度でこちらに手を上げ、寄り添うように並ぶ姉妹の半身、サーニヤが俯きながらびくりと肩を震わせる。

私たちはそんな彼らを、成人三人の姿をまともに直視できないでいた。

『……カタリナ、あなたは成人の儀が近づいているのよ。』

だからあんな風に力が不安定になる』

『依り代が稀人と同時に流れてくるのか、あるいは数年たつてからか。それは当人によつてまちまちじゃ。じゃが、いずれにせよそれを受け取つて一か月ほどが経つとその稀人には二つの選択が与えられる。』

輪廻の輪に戻るか、それともここーリリストアルトに骨をうずめるか、じゃ』

彼らの言葉を考えれば、自ずと「成人になる」という意味も見えてくる。

「みんな、地球での転生を蹴つて、ここでの生活を選んだんですよね……？」

成人になるってそういうことですよね？」

「だな。」

「……全く、誤魔化すのにも結構苦労したんだぜ？ 早く成人になりたいってカタリナがうるさいからさ」

恐る恐る口にした言葉に、大きく肩をすくめるシルビオ。

「……ああ、やっぱりだ。でも正直、当たってほしくなかったなあ。」

なんでシルビオはそんな晴れ晴れした顔が出来るんだろう？ どうしてそんな恐ろしい未来を選出来るんだろう？

憧憬にも似た疑問が頭の中に湧き上がる。

さりとてそれを無遠慮に聞けるわけがなかった。私にここに来た理由があるように、彼らにもまたそれだけの過去があるのだ。人間、土足で踏み込んでほしくない部分だつて沢山ある。特に、同じ道を選ばなかった私みたいな奴には。

「……カタリナのうそつき。」

防人になるって言ったじゃないですかっ」

「っ」

「こら、サーニャ。待ちなさいっ」

瞼に涙を滲ませて、サーニャが身を翻して道の奥へと去っていく。

一瞬だけしか見えなかったが、そこには確かな失望が浮かんでいた。

嘘つき、か。……きつついなあ、これは。

『ええ、好きです。お父さんもお母さんも、みんな大好きです。あ、勿論タニアとサーニヤのことも。』

だから、その生活を守るために立派な防人になってみせますよ』

『約束、ですよ……?』

『ええ、約束です。』

安心してください。私、カタリナ・フロムは嘘をついたことは一度もありませんから』百人一首大会の夜に、まだ謎の自信に満ち溢れた頃に交わした些細な約束。

これだけ気まずそうにしていたら、そりやあ分かるよね。

あーあ、嘘ついちゃった。でも仕方ないじゃん。あの時は稀人の正体だって知らなかったんだし。それにアネットにあんな風に言われたらー

って違う、そうじゃない。逃げるな、私。

アネットに「一緒に戻ろう」と言われた時、気持ちは既にそちらに傾いていたはずだ。彼女の言葉はただのきっかけに過ぎない。間違はなくこれは私の選択の結果なのだ。

「タニアはサーニヤを追いかけてあげてください。」

私の言葉じゃ、きつと何も響かないと思いますから」

「……わかったわ。でも勘違いしないで。」

カタリナは何も悪くない。きっとそれが人として正常なのよ」

優しい微笑を残して、サーニヤの背中を追いかけるタニア。

『でもこれだけは覚えておいて。例え周りが何を言おうと、あなたは自分の思うままに進みなさい。あなたの人生はあなただけのものなんだから』

彼女だけは時折私を励ましてくれていた。

もしかして最初からこうなるって、永遠のお別れになるってわかっていたのかな。

「お姉ちゃん……」

「大丈夫、ですよ。覚悟していましたから」

不安げな瞳で見上げてくるアネットの手を強く握りしめる。

そう、全部分かっていたはずだ。

だからせめて、こんな私と一緒にいたいと言ってくれたアネットの想いだけには応えたい。

マハタ様の話によれば、次の人生や出自等は選べないものの、魂レベルで深い繋がりがあある人間同士は同じ時空に転生しやすいらしい。つまりまた彼女と家族になれるかもしれない。そう考えると、少しだけ気力も湧いてくる。

失うだけじゃない、得たものも確かにもあったのだ。

思い出すのは、リリストアルトで過ごした十寸年余りの記憶。ナキア村の防人を司る

フロム家の長女として生まれて、シルビオたちと一緒に大きくなって、それからすぐに家で一人で過ごす時間が多くなつてーそれでも孤独を感じたりはしなかった。お父さんたちの愛を存分に感じられたから。

タブレットが流れてきてからは本当に楽しかった。

タニア達が泊りに来たり、マハタ様が突撃して来たり、それから……

両腕に収まりきれないほどの記憶があふれ出てくる。

ついで、それらがタブレットの、つまりは依代の流入を境に急激に増えているの気が付いた。

「もしかして急にみんなが会いに来てくれるようになったのって……？」

「だな。別れが近いってみんな分かってたんだよ」

小さく目を細めて、シルビオが虚空へと視線を向ける。

『ほら、今は家と村の周辺しか配信に映せていないだろ？』

ただ森の中にも色々面白い光景があるからさ、俺と一緒に来ればそういうのも全部撮れるじゃないかと思っただよ』

『ほはーお？ いい案ですね、乗りましたっ。』

……でもなんで急に？ それなら最初の方に言ってくれてもよかったですよね？』

『あー、それはほら、カタリナも成人が近づいてきたわけだろ。』

万が一があつた場合も最悪どうにかなるんじゃないやねえかと思つたんだよ」なるほど。あの時のあれはそういう意味だったんだ。

なんだ、完璧超人だと思つてたシルビオにも意外と可愛いところがあるじゃん。

「ありがとうございませす、シルビオ。これで地球でも頑張れそうです」

「あ、私もつ。シルビオたちのおかげで楽しかったよ」

「……そうか。そりゃあ良かった」

一瞬だけ顔を歪めて、それから鷹揚と笑うシルビオ。

その両目が若干赤いのは、まあ触れないであげるのが吉かな。

「他のみんなにもお礼色々とかしたいんですけど……時間ありますかね？」

「何か他に用事があるわけじゃねえんだ。それくらいなら叶えられるはずだぜ。」

ただまあ、その前に話すべき人がいるんじゃないか？」

「っ」

シルビオの鋭い指摘に、思わず息を詰めらせる。

胸の奥底で疼く強い痛み。

それを左手で握りしめると、淡い青色に染まる春空を見上げた。

逃げたつて状況がよくなるわけじゃないもんなあ。

……ほんと、酷い話だよ。

第三十三話 家族との夜

「シルビオ君、お疲れ様。

良ければお茶でもしていくかい？」

「あ、いえ。大丈夫です」

護衛のシルビオと一緒に我が家に戻ると、穏やかな声音の二人に出迎えられた。

気遣いからか、そそくさと森の中に帰っていくシルビオ。

私たちの前には、フロム家の御両人——つまりはこの世界のお父さんとお母さんだけが残された。

「つ……あの、私たちは……」

瞳に映る二人の足。

アネットの手を握ったまま、私は顔を上げることが出来なかった。

なにせこれから二人に告げなければいけないのだから。

ここでの生活じゃなくて地球での転生を選ぶと。二人との日々を捨てて、顔も知らない誰かとの人生を選択すると。

涙で視界が滲み、両手足の感覚が鈍くなる。

リリストアルトの日々の裏には必ず二人の姿があった。あんな風に追い詰められた私が笑えたのは二人のむすめだったからだ。どれだけ間拔けな姿をさらそうと、二人なら見捨てないでくれるという強い信頼があったからだ。

なのに、そんな二人に恩返しすらせず地球に戻ろうとしてる。二人の感情を無視して、ただ自分の為だけに。

「大丈夫。何も言わなくても分かってるわ」

心の中で暴れ回る自己嫌悪と罪悪感。

そんな感情と必死に戦っていると、不意にお母さんの抱擁が私たちの体を包んだ。触れ合った部分からはお母さんの柔らかな体温が伝わってくる。

「カタリナを育てたこの14年、私たちは幸せだった。子供を産むことを許されなかった私たちがごく普通の家族として過ごせたのは、間違いなくカタリナのおかげよ。私たちはカタリナから十分すぎるくらいのものをもらってるの。」

だから大丈夫よ。カタリナ、あなたは自分の人生を歩みなさい」

「っ、でも私はー」

「実はね、カタリナ。これは初めてじゃないんだよ。」

僕たちはカタリナの他にも何人もの稀人を地球に送っている。カタリナが来てからは何故か流れて来なかったけれどね」

「……」

そうはにかむお父さんの顔が見ていられなくて、私は思わず唇をかんだ。慣れるから大丈夫……ってそんなわけないじゃん。

成人になった稀人の寿命がどれだけのあるかはわからない。それでも十数年という日々はそんな簡単に割り切れるほど軽くはないはずだ。

だって、だって……私の心は、こんなにも苦しいのだから。

「そうねえ、じゃあ帰るまでの三日間は私たちの娘でいてくれるかしら？」

それが私たちの最後のお願ひよ。勿論、アネットもね。一緒に過ごしたとしつけは関係ない。あなたたち二人は私たちの大切な家族よ」

「……わかった」「うんっ」

そう言われは断るべくもない。

対照的な感情を灯した私とアネットに返事に、お母さん大きく頷いて一層強く抱きしめてきた。

それからは家族四人で昔のアルバムを見ながら思い出話に花を咲かしたり、家にあつたトランプとか百人一首で遊んだりして――

「……ねえ、カタリナ。覚えてる？」

ほら、昔はよくここを抜け出してシルビオ君と一緒に森の中に入ったりしていたじゃない？」

「ーあつという間に夜がやってきた。」

久しぶりの、家族全員一緒になってのごろ寝。

私の右隣で寝息を立ててるアネットを起こさぬよう、左隣のお母さんが小さな声で聞いてきた。

私はそれにちよぴつとだけ頬を膨らませて答える。時間が経ったおかげで随分と自然に話せるようになってきた。

「う、ううつ。その話はもういいじゃん。」

あの時は私もシルビオの子供だったんだよ」

「あ。そうじゃなくてね。」

普段の言動とか女の子っぽくない趣味を見ていて思ったのよ。

もしかしてカタリナは向こうでは男の子だったんじゃないかって」

「つ」

そ、そりやあバレルかあ。普通に女の子が好きとか言ってたし。

そうだよ、と肯定しようとして、お母さんの瞳が不安に揺れているの気付いた。

……もしかして私を女の子として育てたことを後悔してるとか？　そ、そんなの駄目だ。ならここはー

「ごめん、昔のことはよく覚えていないんだ。

でもっ、でもね、凄く怖かった気がする。周りに馬鹿にされて、世界中のみんなが敵になつた気さえして……。

だから昔の事なんてどうでもいいんだ。私には今のお母さんたちがいれば、愛してくれた過去があれば、それで十分。

これ以上望むのはみんなに申し訳ないよ」

お母さんの服を掴んで、ぎこちなく微笑みかける。

きっと前世では求めすぎたんだ。何の特技も面白味のない俺に、数十人のファンが出来た時点で満足すべきだった。

それなのに身不相応にも頂点を目指そうとして、だからあんなことになつた。

そんな私に何を思ったのか、お母さんは大きく目を見開かせて何かを話そうとして、口を噤んだ。背後から優しい声が降りかかってくる。

「大丈夫だよ、カタリナ。

そんなに悲観しなくたって、ありのままのカタリナを愛してくれる誰かがきつと見つかるさ。僕たちのように、ね」

「つ、うとうと」

二人は何でこんな私に優しくしてくれるんだろう？ 俺らの好意を無碍にしやがってって怒らないんだろう？

耐えようのない涙が溢れ、布団に染みを作っていく。

思いつけば、お父さんとお母さんは最初からお父さんとお母さんだった。

お父さんたちも私と同じ稀人なのだ。二人には二人だけの歴史があったはずだ。

それにもかかわらず血のつながってない赤の他人わたくしのためにいつもご飯を用意してくれて、馬鹿なことをしても見捨てないでくれて……。

ほんとどれだけ聖人だったら、こんなことできるんだろう？

私も二人みたいになれるのかなあ……？ それとも地球にいた時から二人はこんな感じだったのかな？

『ねえ、二人はどうやって知り合ったの？』

なれそめとか色々教えてほしいなあ』

『カタリナは知ってるよね？ この国の外には沢山の稀人たちが集まった場所があった、そこでは稀人は三役以外の職に就いているって。』

私たちはそこに生まれたんだよ。しかもかなり身分が違う家のもとに、ね。

それで些細な切っ掛けから惹かれあつた私たちは、何とか一緒になろうとして——結局どうしようもなくて、ここに逃げてきたんだ』

地球での日々を思い描いたその時、いつか交わした二人との会話が蘇ってきた。

当時は丸め込まれたそれ。でもよくよく考えてみれば向こうでも通用しそんな内容で——

「もしかしてお父さんが前に語つたなりそめつて本当だつたりする？」

「あら、よく分かつたね。」

ほとんど実話よ。私とお父さんは昭和の日本で生まれた居酒屋の娘と旧財閥の御曹司だつたのよ。そして長い長い逃避行の果てに、二人で身を投げた。

結構多いのよ、向こうでどうしても一緒に慣れなかつた二人がこつちでその願いを叶えるのつて」

楽しそうな表情とは裏腹に、壮絶な過去を語るお母さん。

『むしろようやく女の子らしい趣味に目覚めてくれたつて感じよね。

ほら、最近の若い子はヒップホップ？ で踊る動画を取るんでしよう？

どうせならお母さんと二人でやってみる？ こう見えて踊りには自信はあるのよ』

『母さん、もう昭和じゃないんだから……』

『何だか懐かしいね。』

昔はよくこうして母さんの仕事を手伝ってあげていたんだよ。あの頃はまだ付き合ってたすらいなかったっけ』

『もう、あなただったら。』

そんな過去の話、今更しくたたっていいじゃない』

『いたっ、いた、いや本当に痛いよ?』

『ふーん。でも私、あなたの財布からいけなカードが出てきたの、忘れてないわよ?』
『いつ、いやあれはその、魔が差しただけというかなんというか』

脳裏に、スーツを着たお父さんがお母さんと一緒に何かのチラシを書いている光景が浮かんできた。

……こんなに近くに、ヒントはあったんだなあ。ほんと私って……。

「あらあら、まるで大きな赤ちゃんね。」

ついでお父さんにも抱きついてあげなさい。私ばかり話して、きつと寂しがつてると思うから」

「うう、やだ。

遠いし、お父さん柔らかくないし」

「ふふっ。そうね。

お父さんも私の柔らかい体にメロメロになったのよ?」

「ちよ、ちよつとつ!? そんなプライベートなところまで赤裸々にしなくてもいいん

じゃないっ?」

「……お父さんの、へんたーい」

「……い、今ようやく思春期の娘がいる父親の気持ちがよく分かったよ。

うん、出来れば知りたくなかったっ」

珍しく声を荒げるお父さんを見て、お母さんと二人笑いあう。

最初の夜は、こうして穏やかに流れていった。

第三十四話 サプライズ

「っ……」

意識が浮上する。

視界に広がるのは静かな夜の気配と、寝息を立てるお母さんたち。

どうやら途中で起きてしまったらしい。

何となくそのまま眠る気になれなくてぼーと周囲を眺めていると、障子の向こう側に小さな影が映っているのが見えた。

「……眠れない?」

「あ、カタリナお姉ちゃん。

うん、色々考えることがあつてね……」

そろそろと足を動かして外の縁側に出れば、そこにいたのは妹のアネット。

アネットは一瞬だけ顔を輝かせて、すぐに目を伏せた。私はそのすぐ隣に腰を下ろすと、小さく微笑みかけた。

「私も同じだよ。衝撃の事実過ぎて、朝から何だか夢で見てる感じ。」

……でも全部事実だもんね。全く、こんな不親切設計にするとか神様も何を考えてる

んだか」

「あはは、確かに。」

「ここを選んでも地球に戻るようにしたらいいのに、ね」

「本当だよ」

満月に照らし出された夜に、儂い談笑が溶けていく。

夜風に揺れる草木の匂い、かすかに聞こえる虫の声。

心地の良いそれらに身を任せていると、アネットがぼつりぼつりと話し始めた。

「……私はね、向こうでは普通の社会人だったんだよ。」

でも新卒で入った会社がブラックで、後は家族関係とかも色々あつて……結局対処できなくなって、ここに来たの。

だからね、ここでの生活は本当に良い休暇になったんだ。

家族団らんつて、人との交流つてこういうものだったつて、思い出せた」

「そう、なんだ」

『え、と昨日からカタリナお姉ちゃんの家でお世話になっていきます、アネットです。』

『ご挨拶が遅れて申し訳ありません。不束者ではございますが、どうぞよろしくお願ひします』

頭の中に、見た目よりも遙か大人っぽい言動を取るアネットの姿が浮かぶ。

俺が死んだのは中学生のころ。こっちに來た時点で経験値がリセットされているから、今の私の精神年齢も多分同じ位。

ほら、やっぱり私よりも年上だったんじゃない。

全クリスナーのみんなもあれだけ馬鹿にしてーううん。何でもないや。

……そういえば、最初の方に見たあれは何だったんだろう？

アネットと一緒に流れてきた中二病キーホルダー、つまりは彼女の依代。それを見た時、脳裏に一人の男の光景が蘇ってきた。確かにその男は前世の俺の姿だったけど、俺と今も彼女の胸元で揺れるそれとの関係性が全く見い出せなかったのだ。

配信者とはいえ、何かグツズが出せるほど人気だったわけじゃない。

それにリアルでもそんなに仲良い友達はいなかったと思うし……。

「どうしたの？」

「……ううん、何でもない」

暗礁に乗り上げた思考を、かぶりを振って追い出す。

ファンとかじゃなくて、もし彼女がアンチ側だったらーそんな思考が一瞬頭をよぎってしまったから。

大切な妹を疑うなんて本当最低だよ、私。

今までの態度の考えればそんなはずがないのに、「お姉ちゃんと一緒なら頑張れる」ってそう言ってくれたのに。

あーあ。過去の自分なんて思い出したくなかったな。

この世界で、ただのカタリナ・フロムとして生きて良かったなあ……。

「何かお父さんたちに恩返しでも出来たらいいよね。」

あ、勿論お姉ちゃんたちにも、だよ」

「……うん、確かに」

涙声のまま、アネットの言葉に頷く。

私もアネットと全く同じ気持ちだった。

せめてお父さんたちだけには何かを返してあげたくて、二人の娘でよかったそう伝えたくて……あ、そうだ。

「ねえ。アネットー」

「私、ちよつと用事あるから、三人は先に行っていていいよ」

「うん、分かったよ。気を付けて」

翌日の昼。ナキア村の一角にて。

最後の挨拶を交わすついでに村人のみんなにとあるお願いをしていた私は、集合場所へと急いでいた。

マハタ様の家に着くと、厨房の方へと顔を出す。

「準備は大丈夫ですか？」

「大体の食材は集まったかな。」

「ただどうしても肉がね……」

「いえ。ありがとうございます。それで十分です」

中で待っていたのは、魚屋や八百屋の店主たち。

お母さんの誕生日は来月の8日。どう頑張っても一緒に過ごすことはできない。だからその時にやる予定だったサプライズを前倒して実行するのだ。

そのための食材を、彼らには用意してもらっていた。

ただ一昨日に開催した花見大会の影響で村の備蓄は尽きてしまったらしい。

申し訳なさそうに眉尻を下げるミミコロさんに感謝を伝えて、テーブルの上に乗った魚たちの前に立つ。

無理を言ったのはこちらの方なのだ。彼らを責められるわけがない。

それに一応魚の焼き方とかもYouTubeで見えて覚えている。一品くらいなら何

とかなる、はず。

「全く、それじゃあ流石のおばさんたちも寂しいだろうよ。」

ほら近くの豚とかを狩ってきてやってたぜ？」

「私たちも手伝うわ。設営とか色々あるでしょうし」

「……ふんっ」

「シルビオっ、それにタニアたちもっ」

頼もしい声に後ろを振り向けば、そこにいたのは何個もの骨付き肉を持ったシルビオと、薄く口角を上げるタニア。

あの時逃げられてしまったサーニヤも、ぶすつとした表情で立っていた。来て、くれたんだ。

正直みんなには少なからず失望されてると思ったから、結構胸にクルものがあるなあ。

……あれ、でもどうして知ってるんだろう？

出来るだけバレないように、店主さんとかに伝えてないのに。

「無粋な奴じゃな、カタリナは。それでもナキア村の住人か？」

そんな面白そうな祭事に皆を呼ばんで、なんとする？」

「わあーい、パーティーだパーティーっ」「お邪魔するゾウ」

「な、んでっ」

マハタ様を先頭にぞろぞろと入ってくるナキア村の常者たち。

寺子屋の子供たちに始まりゾウ族のフアンテイアさんや、はてには片手で数えられるくらいしか会ってない人たちの姿もあった。

何か事あるごとにお祭りにして、好き勝手に楽しむ彼ら。

そうだ。私はそんな彼らを好きになつたんじゃないか。

涙腺が緩み、空っぽな心が徐々に温かくなる。

「その、私なんかのために、ありがとうございます」

「かつかつ。構わんよ。」

お主ら稀人の願いを叶える事、そのために私たちはここに居るのじゃからな」

「っ」

歪んだ視界のまま、もう一度頭を下げる。

それからは早かつた。マハタ様たちの指示の元、会場となつた応接間の準備が進められて、同時に新たに持ち込まれた食材を使った料理が作られていつて――

「やれそうなの？ 良ければ手伝うわよ？」

「大丈夫です。」

みんなと練習しましたから」

「ー私の番がやってきた。」

玉ねぎと薄切りの豚肉を前に、ごくりとつばを呑む。

『えー、というわけで今日はこの二人で料理を作つていこうと思います。』

つまりお母さんの誕生日に向けた練習ですね。お母さんたちにばれないよう、声控えめ・アーカイブが残らない形式でお送りしています。

また、お母さんたちも結構動画を見返していたりしますので、他の配信とかでもスルーしてくれると嬉しいです』

『か、カタリナお姉ちゃんっ!？』

猫の手はどこにいっちゃったのっ!？ 猫の手はっ!？』

『えっ、でもこんな小さいと猫の手だと支えられませんかよ?』

『そ、そういう時はたまねぎを倒して……そう、そうだよっ』

『何もなければ配信は続けていく予定ですので、来年は楽しみにしてくださいね』

『これからもうちのお姉ちゃんをお願いします、だよ』

【はっ】

【よかったよかった】

【よっしや マジで楽しみ】

思い出すのはかつての配信の記憶、リスナーの前で笑う私の姿。

……結局、サイレントで配信を休むクソ野郎になっちゃたなあ。

でも今はもうタブレットを起動する気分にはどうしてもなれなかった。評価なんて些細な理由で反転してしまうと身を以て知ってしまったから。このまま大成功のままに終わらせたいから。

【あっ】

そんなことを考えていたからか、玉ねぎを抑えていた左手がずれる。

そのまま包丁の刃が左手の指に向かって振り下ろされー直前で、白い結界に防がれた。隣に佇むサーニヤの充血した瞳がこちらを射抜く。

「ありがとうございます。サーニヤはいつも私を助けてくれますね。」

口では色々言いながら優しくしてくれるの、私は結構好きですよ?」

「うっさいですよ。」

私はただお姉さまにスプラッタな光景を見せたくなかった、それだけです」
頬を膨らませて、不意と視線を逸らすサーニヤ。

なんてちよつとうれしいやり取りがありながらも、準備は進みー

「おじゃまします」

ーその時がやってきた。

「あらあら?」「な、なんだいこれは……?」

応接間に飾られた「エレエヌ・フロムさん、早めの誕生日おめでとう」の文言や賑やかな装飾、そしてテーブルに並べられた料理の数々を見て、目を丸くするお父さんとお母さん。予想以上の出来だったのか、ぐっと親指を立てるアネット。

そんな三人の前に、私は生姜焼きが入った皿を持っていく。

「あの、お母さん。これ。誕生日プレゼント。」

アネットたちに練習を手伝ってもらって、でも今日は一人で作ってみただ」

「え、カタリナが作ったの?」

「誰かが作るのを見ていたわけじゃなくて?」

「かつかつ。正真正銘、カタリナの手料理じゃよ。」

なにせここにいるみんながその証人じゃからの」

「それはそれは……」

楽しそうに笑うマハタ様たちの前で、お母さんが不安と期待が入り混じった何とも言えない表情をこちらに向けてきた。

明らかに不安の方が多く見えるのは気のせいだといいなあ、うん。

一瞬のためらいの後、お母さんは恐る恐る口に運ぶ。

「ど、どうかな？ 私としては結構うまくできたつもりなだけど……」

「っ……うん、おいしいわ。」

ほんと、これなら、向こうでもやってっ……」

「ほら、母さん。」

折角みんなが用意してくれたんだから」

声を詰まらせて、むせび泣くお母さん。

彼女の背を撫でながら、お父さんが私たちに頭を下げた。その瞳にもまた薄っすらとした涙が浮かんでいて――

「っ」

――二人の様子に耐え切れずに、視線を落とした。

ほんと、これで少しでも私の想いが伝ってくれたらいいなあ。

第三十五話 帰還の儀

最後の日は意外なほど穏やかな雰囲気が始まった。

いつものように起きた後、朝ご飯を食べたり農作業しながら家族一緒の時間を過ごす。その間も特段変わった会話はなく、まるでこれから遠足でも行くかのようなんびりとした時間が流れていた。

三日という時間は別れの準備に十分だったのか、あるいは四人ともそれを必死に隠そうとしていたか。

どちらにせよ、ありがたい話ではあった。もし少しでもその話題が出てしまえば、平常ではいられないから。きつとこの優しい空気を壊してしまうだろうから。

さりとしていくから見せかけの平穏を守ろうと、現実まで変えられるわけじゃない。

昼過ぎになれば、ナキア村に赴いて最後の別れを交わすことになった。

とはいえこちらも今生の別れを感じさせるほど深刻なものではなかった。桜に彩られた公衆広場に、「頑張れよ」とか「みなさんもお元気で」とか明るい言葉が連ねられていく。

「ではな、カタリナ、アネット。

お主たちと過ごした日々もそう悪くはなかったぞ」

「私もですよ、マハタ様。」

あなたたちの存在は私にとって救いでした。私はナキア村のみんなが大好きです」

「うんっ、私も同じ気持ちだよ。」

だからみんな……ありがとう」

アネットと二人、最大限の感謝を以て頭を下げる。

わあっ、と一気に騒がしくなる広場。その照れくささに満ちた、されど何かを惜しむような空気に当てられて、思わず目頭が熱くなる。

私の中にある彼らの姿は、常に陽気に満ちていた。何か祝い事がある旅に徳利片手に集まって、何でもないことで笑って……ほんと、楽しかったなあ。

「……やはりお主はそちらを選ぶのじゃな」

そんな感傷に浸る中、マハタ様の自嘲が小さく響いた。

常者のみんななどの時間が終われば、後は「帰還の儀」だ。

「帰還の儀」とは文字通り稀人を地球へと帰す儀式のこと。ここに残る意思がある場合は「成人の儀」、その逆の場合は「帰還の儀」が執り行われるのだ。

今私たちの目の前には一隻のオール付きの木製の小舟が杭に繋がれて停留していた。「帰還の儀」は輪廻の歯車と近づく時間帯、逢魔が時にこれに乗って沖合に出ることによって完遂されるらしい。

とはいえ穢れも流れてくるから、儀式はそう簡単なものじゃない。

穢れに対抗するためにここに集められたのが、私たちフロム家の四人と幼馴染三人衆の七人だった。

茜色に染まった空の元、顔を付き合わせて真剣な様子で話し合うお父さんたち。それを私はアネットと共にボーと眺めていた。

何だかさつきから妙に現実感に乏しかった。まるでテレビの映像を画面越しに見ているかのような、不思議な感覚に囚われている。

やがて最後の時はやってきた。

集団を抜けたタニアが緩やかに口角を上げて手を差し出してくる。

「いつてらっしやい、カタリナ。」

どうかあなたの来世に幸があらんことを」

「ありがとうございます。」

タニアもこっちで頑張ってくださいね。……特にサーニヤを励ましてください」

「任されたわ」

力強く頷いて、私の横に佇むアネットに話しかけるタニア。

今度は涼し気な笑みを浮かべたシルビオが私の前の前に立っていた。

「じゃあな。カタリナ。」

向こうでも面白おかしくやるんだぞ……って、カタリナなら大丈夫か。なにせほとんど娯楽がないここでもあんなに楽しめたんだからな」

「どう、ですかね。」

正直自信はありませんが、シルビオの期待に応えられるよう頑張ってみますね」

「お、おう……」

予想外の返事だったのか、拍子抜けしたようにシルビオが頬をかく。

なんだろう、何か間違えたかな……？

答えが出ないままシルビオがはけると、次は暗い表情を灯したサーニヤがやってきた。

しばし俯いて黙り込んだ後、かすれた声で嘲笑を吐き出す。

「……ふんっ。」

カタリナなんか、もう一度酷い目に合ってこつちに戻ってくればいいんですよ」

「ちよ、ちよつとっ。サーニヤっ流石にー」

「あはは、大丈夫ですよ。」

それじゃあ、その時はまたよろしくお願いしますね」

「っ」

私が差し出した手を乱暴に払いのけ、サーニヤがアネットの方に駆け寄っていく。

結局、この子とは最後まで分かり合えなかつたなあ。

最後の二人、お父さんとお母さんは二人一緒にやってきた。

私たちの前に膝をつくとき、その大きな二つの体で私たち二人ともを優しく抱きしめてくる。

「例えどんな姿になつたとしても、あなたたちは永遠に私たちの娘よ。

だから大丈夫っ。どれだけ酷い目に合つても、きつと乗り越えられるわ」

「……うんそうだね。

でももし本当に心が折れそうになつたら、遠慮なくこつちに戻つてくるといい。きつと僕らじゃない誰かが二人を助けてくれるよ……」

そんな彼らに私は何て返したのだろうか。いまいち思い出せない。

ただ多分私は「ありがとう」とか「ごめん」とか月並みな言葉しか言えなくて――

「どうどう、だね」

「ー気が付けば、私は海の上に浮いていた。」

小舟に乗るのは私とアネット、そして二人分の依代だけ。

周りは血のように真っ赤な空に囲まれ、度々黒い穢れが現れては白い浄化の光で消滅させられていく。後方には私たちがいた海岸とそこで動く彼らの姿もあった。波の音、そして浄化の音の隙間を縫って、「元気でなく」「いつてらつしやい」とか彼らの声がかすかに聞こえてくる。

ドーーーーーン。

「わあ、綺麗っ」

彼らに向けて手を振ろうとしたその時、大きな音が響いた。

見れば、上空のナキア村方面で巨大な光の花が浮いていた。

火花だ。常者のみんなが祭りごとの度に打ち上げるそれ。

でもおかしい。今日はそんな話はなかったはずじゃ……。

「っ……」

脳裏に浮かび上がった彼らの笑顔。堰を切ったようにあふれ出す感情。

「つ、離れたくない」とそう叫びそうになつてー

――空から巨大な何かが降ってきた。

最終話 素敵な幻想がありますように

時は「帰還の儀」より僅かに遡る。

選ばれしファンが集う個人スレでは、三月末のお花見配信を境に突如音信不通となつたカタリナ・フロム推に関する議論が白熱していた。

810：名無しのリリストアルト民

最後の配信から三日……やっぱ失踪説が有力かな

めちやくちや金がかかってたし、採算取れなかつたんやろなあ

811：名無しのリリストアルト民

いや、毎日配信してた今までが異常だったんだって

女の子なんだから怪我とかそういう日とかで色々あるだろ

812：名無しのリリストアルト民

お、おう……

813：名無しのリリストアルト民

それだったら何か報告があるはずなんだよなあ

814：名無しのリリストアルト民

一か月弱で登録者一万人集めても切り捨てられるんか

世知辛い業界やな……

815：名無しのリリストアルト民

ほまいら、それでも名誉リリストアルト民かよっ!?

悔しくないのか、大切な推しがいなくなっちゃうかも知れないって時にこうして何の生産性のない会話を交わしてるだけでっ

816：名無しのリリストアルト民

つつても俺らに出来る事なんてYouTubeにコメント書くくらいだし……

817：名無しのリリストアルト民

名誉リリストアルト民（勝手に言ってるだけ）

818：名無しのリリストアルト民

せめてカタリナちゃんが何かのSNSやっていればなあ

俺らの声も直接届けられるんやけど

819：名無しのリリストアルト民

結局、どこの企業がバックに付いてる分らないもんねえ

820：名無しのリリストアルト民

おまいら一体……何の話をしてるんだ？

採算とかバックとか、リリストアルトは実在するに決まってるだろっ!?

821：名無しのリリストアルト民

く、ここにも幻想病患者がっ

パンデミックが起こるぞ 衛生兵！ 衛生兵を呼べええ！

822：名無しのリリストアルト民

そんな空気感染でうつるみたいな……

ん、何で俺はこんなところにいるんだ？ 早くリリストアルトに戻らねえとっ

823：名無しのリリストアルト民

ふ 逆に俺は全身全霊で祈らせてもらうぜ？

俺の想いがリリストアルトに届きますようにっ

824：名無しのリリストアルト民

て、手遅れだったか

ついに、全人類幻想住民化計画が始まってしまったっ

825：名無しのリリストアルト民

そして始まるリリストアルトの顕現っ……っ、まてよ

案外その案ありじゃね？

826：名無しのリリストアルト民

??どゆこと??

827：名無しのリリストアルト民

流者の根源は沢山の人が抱いた強い感情だったよな？

それなら俺たちの手で新しい流者を作り出せばいいんだよ

828：名無しのリリストアルト民

????

829：名無しのリリストアルト民

あ、なるほど

使われていた設定を逆手にとって、ファンが考えたキャラクターを逆輸入させようっ

て魂胆か

もしそれがバズって担当者の目に届けば、判断が変わるかもしれないし

830：名無しのリリストアルト民

おお 結構面白そうやな、それ

あとはどんな流者にするかやけど……

831：名無しのリリストアルト民

俺たちの願いを叶えるもの……招き猫とか？

832：名無しのリリストアルト民

つ、「ネットで拾った招き猫の顔にカタリナの顔を雑に張り付けたイラスト」

833：名無しのリリストアルト民

クソコラじゃねえかwww

834：名無しのリリストアルト民

これなんかどう？

「有名な巨大ザメの顔にカタリナ顔が張り付けられた写真」

835：名無しのリリストアルト民

あかん めっちゃ王道なのに笑ってまう

836：名無しのリリストアルト民

色んなものが混ざっているっていうの流れ者設定ってクソコラと相性いいんやな

あつて（遠い目）

837：名無しのリリストアルト民

しやーない

ほいならわいのアカウント（フォロワー11人）で宣伝してやりますか

838：名無しのリリストアルト民

拡散は任せろ 俺の趣味用アカウント（フォロワー5人）が火を噴くぜ？

839：名無しのリリストアルト民

よつしや 久しぶりの祭りじゃあああ

840：名無しのリリストアルト民

それじゃあハッシュタグはー

それから実に迅速だった。

ネットの海にばら撒かれたわずかなハッシュタグ。本来なら埋没するはずだったそれらはクソコラコンテストという敷居の広い形態、Vtuberの引退を止めるためという背景、そしてカタリナ本人の人気も相まって爆発的に拡散されていった。

ネット特有の悪乗り、有名絵師や大手Vtuberの参戦などの様々な偶然も重なりー

666：名無しのリリストアルト民

17：11現在 ○(旧Titter)の世界トレンド一位でありますっ

667：名無しのリリストアルト民

どうしてこうなった……

――爆発的な成功を取めたのだった。

ナキア村方面で花火で上がった直後、私とアネットが乗る小舟の近くに巨大な何が落ちてきた。

ぼちやりぼちやりと連続で響く着水音。その正体を確かめる前に、私の周りを薄い穢れが包む。

一体何がつ?! まさか儀式失敗……? 「な、なにこれ?!

お姉ちゃんの色んな生き物に――ふふっ」

混乱に怯える中、隣のアネットが遙か高くまでそびえる落下物を見て笑みを零した。彼女に倣って見上げてみれば、そこにあつたのは私の顔をした招き猫。

そのほかにも前に話した野菜が生えたゴキブリだったり、猫と犬が合体したっぽい生き物の姿もあつて――

「つ」

胸の内から湧き上がってくる感情を、息を吸いこんで止める。

目の前のこれが流者であることは流石の私でも分かつていた。

ただ問題は どうして今、私に関係がありそうな流者が流れてきたか、だ。

大量生産の時代が始まってからは、こちらに来る流者の量はかなり減っている。穢れてない流者がこうして同時に現れる事なんてほとんどない。まして全員が全員はつきりした姿をしているなんて、よほど奇跡が起こらない限り無理だ。それこそ何万もの人間が同時に同じ感情が浮かべるとかのレベルの。

……でも一つだけ知ってるんだよなあ、それが出来るかもしれない人。

ネットの発達によって生まれ、良い方にも悪い方にも傾く彼ら彼女らだ。

どういう経緯でこれが成し遂げられたかは分からない。ただきつとその発端には私のファンの姿があつたはずだ。

ーなにせ、私の心はこんなにも彼らの私に対する愛に溢れているのだから。
「あつはつはつ。」

馬鹿なんじゃないですか？ たった三日休んだだけじゃないですか、切り捨てるつもりだつたじゃないですか。

それなのにこんなに心配してつ、こんなにも嬉しくなつてつ」

どうしようもなく愚かな彼らと自分に、口から歓喜が零れる。波が零れる。

ああ、そうだ。私は好きだったんだ、ネットという世界が、そこに住民と交流する配信者という存在が。

だから俺は配信を始めたんだ。私は配信を始めたんだよ。
そして多分、一番の大馬鹿ものは私だ。

いつ前世と同じ目に合うかもしれないのに、たった一度くそ素敵なプレゼントをもらっただけで茨の道に戻ろうしている。自分の全てを投げ打って、彼らの期待に応えなくなっている。

チヨロインだ。物語の展開なら炎上ものだ。

でもナキア村の防人として、V t u b e r のカタリナ・フロムとしてどうしても
リリストアルトあっに戻りたくなくてー

「……やっぱりこうなっちゃったかあ」

「え……？」

ー落胆したような、あるいは安堵したかのような声が響いた。

見れば、隣のアネットの体が暖かな光に包まれていた。

徐々に半透明になりつつある彼女の体。それに対して、私の体に変化はない。むしろいつもより力に溢れてるくらいだ。

『きつとね、泡沫うたかたの夢みたいなものだったんだよ。

だからーカタリナお姉ちゃん。私と一緒に地球に戻ろう？ 私、お姉ちゃんがどこかにいると思えば、向こうでも頑張れると思う』

そうだよ。私がこつちを選んでしまえば、アネットとの約束を破ることになってしま
う。大切な妹を、一人ぼっちにさせてしまう。

そんな私の心情を察したのか、アネットはゆったりと口角を上げた。
「いいんだよ、あれはただの私の我儘だから。

私はお姉ちゃんとしてのカタリナも好きだけど、配信者のお姉ちゃんのほうがもつと
大好きだから。

やっぱりあなたにはそういう自信満々な笑顔の方が似合うよ。

ね、ーさん」

「っ」

アネットが告げる。とうの昔に捨てた、かつての俺の名前を。

『ー見つけたっ』

『うーん、よく分かんない。』

でもカタリナお姉ちゃんがいれば大丈夫。何となくそんな気がするんだ〜』

……やっぱりそういう繋がりがりだったんだ。

何だよ、辛い記憶ばかりだと思つてたけど、昔の俺も案外やるじゃん。

「それじゃあ、向こうでも配信楽しみにしてるから。」

またね、カタリナお姉ちゃん。楽しかったよ」

「私もっ、楽しかったよ、アネットっ」

満面の笑みをして、視界から、世界からアネットが消えていく。

小舟の上に残されたのは、一人ぼっちの私と一台のタブレット。

楽しみにしてる、か。そういわれちゃあ、仕方ないよね。

暖かな感情のまま、両目に浮かんだ大粒の涙を拭ってタブレットのスイッチを入れる。目的はもちろんあれだ、配信というやつだ。

「どうも皆さん、こんばんわ。」

リリストアルトの超絶美少女、カタリナ・フロムです」

【お、急にはじまた】

【何か鼻声っぽい?】

【珍しい時間だし、多分ネットのあれについてだよなあ】

【ち、違うんですつ あれはみんなが勝手にっ】

【トレンドから来ましたっ】

宣伝効果ゆえか、いつもより遥かに多い同接数。

そんな彼らに向け、私は海に浮かぶ流者たちを背後に映して頭を下げた。

「まずはこんなに素敵なプレゼントをくれたみなさんに感謝を。」

一度折れかけた私が、今こうして立っているのは間違いない皆さんのおかげです。本当にありがとうございます」

【やっぱ何もしなかったら終わってたんだな マジでナイス】

【おー、もう俺たちがデザインしたやつらが採用されてる】

【!?!?】

【いやいや流石に早すぎない?!】

【た、確かに……】

そのまま私は空を、夜空に浮かぶ輪廻の歯車を見上げた。

ありとあらゆる物を転生を管理し、そしてそれが出来なくなつた魂をリリストアルトという休息の地へと送るシステム。

私には分かる、既に刻は満ちてしまった。

もう私は地球に戻ることはできない。

でもそれで構わなかった。

私はここで生きると、カタリナ・フロムとして一生を終えると決めたのだから。

「……もしかしたら、これを視聴している方の中には辛い現実に打ちのめされている人や、謂れのない誹謗中傷に晒されている人もいるかもしれないですね。」

そんな人はどうか私の配信を見てください、リリストアルトに思いを馳せてください。私たちはいつだってあなたたちを歓迎します」

画面越しの彼らへ、たった一人の妹へ、言葉を紡ぐ。

そうだ、私とアネットは完全に離れ離れになったわけじゃない。

ネットにが存続する限り、私の姿は永遠に残り続ける。そう考えると、普通に転生するよりも何だかロマンチックな気がした。

例えば幾数年が立とうと、私という存在は彼らの励みになり続けるのだ。

彼女の前途を讃えて、彼らの幸せを願って、私はいつものように笑った。

「だからどうかー皆さんに素敵な幻想がありますようにっ」

エピソード 或る少女の物語

「ねえ、あなたのお名前はなんて言うの？」

それはまだ稀人の家が街中にあつた頃の話。少女がナキア村の村長になって「マハタ様」と呼ばれる前の記憶。

少女が暮らすナキア村に一人の稀人がやってきた。

彼女の名前はリーズ。4歳前後の見た目をした彼女は、防人を司るフロム家に引き取られ、すぐにその才覚を発揮することになった。

明朗快活な笑顔、例え危険があろうと迷わず突っ込む無鉄砲さ、相手がどんな姿や態度であろうと話しかける人懐っこい性格。そんな彼女に村の住民たちは瞬く間に虜となり、村長の娘として育てられていた少女もまた彼女に惹かれていった。

「リーズは……ずっとここにいるんだよね？」

わたしの前からいなくなったり、しないよね？」

「あ、あはは。

どうしよっかなあ。勿論マハタちゃんとの日々も吝かじやないんだけど……」

だから彼女に稀人の真実が告げられて尚、そう願ってしまった。向こうに待たせてい

る人がいると聞いていたのに、だ。

自身が最悪な過ちを犯したのだ、と気付いたのは帰還の儀を行うはずだった彼女が当日の朝に意を翻したからだだった。

「やつぱり私はこっちの方が大事みたい」と恥ずかしそうに笑うリース。

少女はそんな彼女の顔をまともに見ることが出来なかった。罪悪感に襲われて、どんな態度で接すればいいかわからなくて、家に引きこもるようになった。

それから何十年も経つとリースも亡くなり、ナキア村の村長を受け継いだ少女は稀人と村人たちの生活を出来るだけ切り離すことを決めた。

三役の住居を村の外れまで移動し、稀人は獣に襲われやすいという迷信を流して、子供の稀人が村民たちとあまり交流を持たないようにした。子供の稀人と村人たちの時間が重なるのは祭りや成人間近、または彼ら自身が望んだ時くらい。

それもこれも全ては稀人たちのためー彼らの選択に少女たちの存在が極力影響を与えないようにするため、だった。

少女が村の形を変えてからは目に見えて成人になる稀人が減った。度々大陸から人員を補充する必要も出来てきた。

ただそれでも少女は構わなかった。もう二度とあんな悲劇を繰り返したくはなかったから。

「おおお、ケモミミ&ケモしっぽキターーッ」

「こら、女の子がそんな言葉遣いしないのっ」

そんな時だった、今代の防人が一人の少女を連れてきたのは。

彼女の名前はカタリナ・フロム。男っぽい口調で話しては母親にどやされるーりーりの生き写しのような女の子だった。

「えいっ」

「っ!？」

初対面でいきなりこっちの尻尾を触ってきたカタリナ。その表情がどこまでも生き生きとされていて、その爛々と輝く瞳がリリースを思い起こさせて、つい少女は彼女を吹き飛ばしてしまった。

それからカタリナにかき回されてばっかりだった。

再三の注意に関わらず夜の森に脱走したり、会うたびに人懐っこい笑みで近づいてくるカタリナ。彼女に手を焼く度、どこか楽しんでる自分もいたりしてー

「あいつら、ちゃんと帰られましたかね？」

「……当たり前じゃろ。」

帰還の儀はそう難しいものではない。のじゃ、」

ーでもそれも今日ですべて終わりだ。

花火師の言葉に頷いて、マハタは桜の木の幹に埋まったリースの墓へと目を向けた。

『私、死んだらここに埋まりたいなあ。』

ほら、何百年も生きる木になれば村のみんなを守る気がするから』

『……』

他でもない彼女の願いによって作られたそれ。

遙か昔に交わした約束を、リースと過ごしたささやかな記憶を思い出して、マハタは小さく息を吐いた。

やはり、だ。自分は間違ってたなかった。今度は間違えなかった。

胸の中に安堵と寂寥感、そして大きな罪悪感が広がっていく。

やがて、儀式を遂行していたエレノたちが返ってきた。

それもここにいないはずの少女を伴って。

「ほら、カタリナ。みんなにあいさつしなさい」

「え、えくと……みなさんさつきぶりです。」

リリストアルト一の美少女防人、カタリナ・フロム、戻ってまいりましたっ。これか

らもどうぞよろしくです」

泣きはらした目のエレーナに促され、ぎこちない敬礼をかますカタリナ。

その表情があまりにいつも通りで、目の前の光景が信じられなくて、マハタは勢いよく彼女に詰め寄った。

「な、んでっ、ここにいるのじゃっ。」

だっってお主、地球に帰るんじゃないやとそう言っつー」

「いやあ、ちよつと私のファンたちに予想外の方向からぶん殴られまして……。」

うん、よく考えたら折角超絶可愛い私としてファンタジー世界にいるんですから、もつと有効活用しない損ですよねっ」

「そん、なこと……?」

わたしが、今まで何のためにここまでやってきたと思っつるっ。わたしはただ、お前たちがちゃんと自分の意思で考えられるようになってっ」

零れ落ちる後悔と慟哭。

感情のままに彼女の胸を力なく叩けば、カタリナはマハタの手を優しく包み込んできた。

「……な、なんでマハタ様が泣いているかは分からないですけど、少なくとも私は自分の意思でここに立っていますよ?」

確かにあの花火とかりスナーからの贈り物とかはグツと来ました。

でも結局、今までの考えを捨ててこつちを選んだのは自分自身なんですよ。彼らの期待に応えたいという感情を優先したのは他でもないこの私です」

『どうしよ。村長さん。』

多分マハタちゃん、自分のせいで私が残っちゃってすつごい気に病んでるよね……？』

『ふ。大丈夫じゃろう。』

あやつだつていつまでも子供ではないのだ、いつかきつと理解するさ。人心はそう単純なものではないと。

もし相手に自分の言葉が届いたのだとしたら、それは相手が聞きたいと思ったからなのじゃ。相手がその思いに応えたいと思ったからじゃ。

であるならば感謝こそすれ、どこに悔やむ道理があるうか？ ……そもそもお主がこちらを選んだのは全く別の理由じゃしの』

脳裏によみがえる、錆びついていた記憶の断片。

ああ、どうしてそんな大事なことを忘れていたんだらう。後悔に痛む胸を押さえて、

空を見上げる。

その時不意に、桜の木の下に立つ彼女の姿を見た気がした。

数十年前と変わらない、悪戯っぽい笑みを浮かべたリーズ。

成人になった稀人の魂は、リリストアルトを構成する要素となる。

であるならば、リーズは本当に桜の木になってマハタたちを今も見守っていたりするのだろうか？

なんて、流石に都合がよすぎるか。

涙に滲んだ視界のまま、少女は晴れ晴れとした表情で辺りを見渡した。

「カタリナが見事成人になった祝いじゃ。

ほらお主ら酒じゃ、酒を飲めっ」

桜色に彩られたナキア村。

一人の少女を迎えた彼女たちの日々はどこまでも続いていった。